

府 中 遺 跡 II

—都市計画道路大阪岸和田南海線街路築造事業に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会

序 文

今回の発掘調査では、弥生時代中期後半の竪穴住居が発見されました。

弥生時代中期後半の時期といえば、我が国屈指の『環濠集落』として名高い国史跡池上曾根遺跡の最盛期にあたります。当時の池上曾根遺跡は、中央に巨大神殿と称される「大型建物」を構え、各地からもたらされた物資や技術が集積し、それらを周辺の集落へ供給する交流の要として存在していたと考えられています。府中遺跡の弥生時代においても、池上曾根遺跡と密接な関係にあったことが容易に想像することができます。

府中遺跡と池上曾根遺跡との位置関係は、今回検出した竪穴住居から北方へ 1.5km。現代の感覚でいえば、徒歩 20 分程度でしょうか。池上曾根遺跡の標高は 8 m 前後、府中遺跡は 22 m、2 千年前には直線上に障害物はなく、府中遺跡で暮らす人々は、日々、池上曾根遺跡の「大型建物」を眺めながら生活していたことが想像できます。きっと、池上曾根遺跡で銅鐸を鳴らせば、その音色は府中遺跡にも届いたことでしょう。

平成 29 年 6 月 4 日に府中遺跡の発掘現場を公開しました。地元の人々を中心に 300 人を超える参集を得ました。調査担当者の説明に熱心に耳をかたむけ、出土品の展示コーナーには長蛇の列ができました。そこには、生の歴史に触れ、時空を超えた感動から単なる考古学ファンにとどまらず、地元を愛し、地域の歴史を誇りに思う人々の姿を見ることができました。発掘調査で得た成果は地域の歴史を、より具体的に表現するツールとなります。私たち文化財保護課では、このツールを文化財として保存し、広く活用することに努めています。

最後に、発掘調査の実施にあたって、ご協力、ご支援いただきました関係各位ならびに地元の皆様には深く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政へのご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成 31 年 3 月

大阪府教育庁
文化財保護課長 森屋 直樹

例　　言

1. 本書は、都市計画道路大阪岸和田南海線街路築造事業に伴い、平成29年度に実施した和泉市府中町五丁目所在する府中遺跡の発掘調査(調査番号17001)の報告書である。
2. 発掘調査は、大阪府都市整備部から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した。
3. 発掘調査、遺物整理および本書の作成に要した経費は、大阪府都市整備部が負担した。
4. 現地調査は、平成29年度に本府教育庁文化財保護課調査事業グループ主任専門員 橋本高明、技師 市川創、専門員 小林義孝、臨時的任用職員 阿部幸一を担当者として実施した。
5. 遺物整理は、平成30年度に、同調査管理グループ主任専門員 山本彰、同専門員 阪田育功を担当者として実施した。
6. 「第3章第3節府中遺跡出土の蛍光X線分析」については、三辻利一氏、大阪大谷大学教授犬木 努に分析を依頼し、レポートにまとめていただいた。
7. 発掘調査にあたっては、写真測量を株式会社エムズに業務委託して実施した。
撮影フィルムは同社において保管している。
8. 本書に掲載した遺構の写真撮影は調査担当者が実施した。
出土遺物の写真撮影は、イトーフォトに業務委託した。
9. 出土した鉄製品の保存処理ならびに放射性炭素年代測定、花粉分析、出土品の種同定は、株式会社パレオ・ラボ東海支店に業務委託した。
10. 出土品および記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。
11. 本書の執筆は、第1章を小林、第2章を市川、第3章第1節を橋本、第2節を阿部、第3節を三辻、犬木、第4節を株式会社パレオ・ラボ東海支店、第4章を橋本が担当し、編集作業は橋本が行った。
12. 発掘調査、遺物整理および本書の作成にあたっては、下記の機関からご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。
和泉市教育委員会、大阪大谷大学、大阪府都市整備部鳳土木事務所、府中町中央自治会

凡　　例

1. 遺構名は、遺構番号と遺構種別名の組み合わせによって検出順に通し番号を付した。ただし、第1区についてはN区、S区を合わせて通し番号とし、第2区については先に調査を始めたS区は1から順に、N区は101から順に付した。
したがって遺構種別、時期ごとにまとめておらず、現地調査では遺構と認識して番号を付したもの、遺物整理中に欠番にしたものもある。
第2区において、遺構の輪郭や埋土が明確に確認できなかった遺構が多数ある。基本的には土坑と思われるが、遺構種別には「遺構」と記した。【例：遺構102】
2. 遺物番号は、本書全体で通し番号を付した。基本的には遺物実測図の番号を優先した。
3. 本書で用いる座標値は世界測地系(平面直角座標第IV系)に基づき、方位針は座標北を示す。
また本書に記載した水準値は、すべてT.P.値(東京湾平均海面値)である。
4. 土層の色調は、基本的には『新版 標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄／2002年度版)に拠る。
5. 遺物実測図の断面は、須恵器を黒塗りとし、その他の陶磁器、瓦器、黑色土器、土師器、弥生土器、石器等を白抜きとした。

府中遺跡Ⅱ

—都市計画道路大阪岸和田南海線街路築造事業に伴う発掘調査—

序文・例言・凡例・目次

本文目次

第1章 調査経過と調査方法	1
第1節 調査経過	1
第2節 調査方法	3
第2章 地理的・歴史的環境と既往の調査結果	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境と既往の調査結果	8
第3章 調査の成果	10
第1節 第1区の調査	10
第1項 基本層序	10
第2項 検出された遺構と遺物	10
第2節 第2区の調査	37
第1項 基本層序	37
第2項 検出された遺構と遺物	39
第3節 府中遺跡出土須恵器の蛍光X線分析	67
第1項 はじめに	67
第2項 分析法	67
第3項 分析結果	68
第4節 自然科学分析	72
第1項 はじめに	72
第2項 花粉分析	72
第3項 動物骨状遺物の分析	73
第4章 総括	78
報告書抄録	

挿図目次

図1 調査地位置図	1
図2 調査区配置図	2
図3 地区割図(第1区)	3
図4 周辺の遺跡(1/25000)	6

図5	既往の調査区(1/5000、(都)大阪岸和田南海線事業関連、平成3年作成大阪府地形図を使用)	7
図6	府中遺跡・和泉寺跡・和泉国府跡における既往の調査地点(1/10000)	9
図7	第1区土層断面図(東壁北部・西壁)	11
図8	第1区土層断面図(南壁・トレンチ西壁)	12
図9	第1区全体平面図	14
図10	竪穴住居跡65平・断面図	16
図11	竪穴住居跡10平・断面図	17
図12	竪穴住居跡65・10・93出土遺物実測図	18
図13	竪穴住居跡85平・断面図	19
図14	竪穴住居跡85出土遺物実測図	20
図15	建物1平・断面図	21
図16	建物2平・断面図	21
図17	建物3平・断面図	22
図18	第1区検出土坑断面図	23
図19	土坑6・7・8・64・107、ピット91出土遺物実測図	24
図20	土坑60出土遺物実測図	25
図21	ピット51・72、溝9・97・119出土遺物実測図	26
図22	溝70断面図	29
図23	溝70出土遺物実測図(1)	30
図24	溝70出土遺物実測図(2)	31
図25	黒灰色土出土遺物実測図(1)	32
図26	黒灰色土出土遺物実測図(2)	33
図27	灰色土・床土出土遺物実測図	34
図28	第1区出土石器実測図	35
図29	第2区土層断面柱状図	37
図30	第2区S区全体平面図	38
図31	溝45平面図	39
図32	土坑46・47・48、遺構51・57平・断面図	41
図33	第2区検出土坑・遺構・溝断面図	43
図34	遺構52平・断面図	44
図35	遺構58平・断面図	44
図36	第2区N区全体平面図	46
図37	土坑102平・断面図	47
図38	遺構136・141平・断面図	47
図39	土壤墓145平・断面図	48
図40	遺構102出土遺物実測図	49

図41 遺構101出土遺物実測図	50
図42 土壙墓145出土遺物実測図	51
図43 土坑47・49、遺構51・136、河川跡54出土遺物実測図	52
図44 土坑46出土遺物実測図	53
図45 土坑48、遺構52・56・57・141出土遺物実測図	54
図46 河川跡50出土遺物実測図(1)	55
図47 河川跡50出土遺物実測図(2)	56
図48 河川跡50出土遺物実測図(3)	57
図49 河川跡50出土遺物実測図(4)	58
図50 河川跡142・143出土遺物実測図	59
図51 灰褐色土出土遺物実測図(1)	60
図52 灰褐色土出土遺物実測図(2)	61
図53 黄灰色土出土遺物実測図	63
図54 試料No.4写真	68
図55 府中遺跡出土須恵器の両分布図	69
図56 府中遺跡出土須恵器の両相関図	69
図57 陶邑・大野池地区の窯跡出土須恵器の両相関図	70
図58 韓国・内谷洞窯跡出土陶質土器の両相関図	70
図59 野中古墳出土初期須恵器の両相関図	71
図60 動物骨状遺物サンプル写真	72
図61 土坑60の埋土の写真	73
図62 花粉分析のプレパラート写真	73
図63 年代測定試料	74
図64 曆年較正結果	75
図65 府中遺跡の土壙墓145下層の灰白色物質と顕微鏡写真	76

図版目次

図版1 第1区と周辺の環境

第1区(N区)と信太山丘陵(南から) 第1区(S区)と和泉山脈(北から)

図版2 第1区 全景

第1区(N区)の遺構(南から) 第1区(S区)の遺構(北から)

図版3 第1区 土層

トレンチ西壁 調査区東壁 調査区西壁

図版4 第1区 竪穴住居跡65

竪穴住居跡65(北西から) 竪穴住居跡65の炉跡

図版5 第1区 竪穴住居跡65 遺物出土状況

床面遺物出土状況 床面遺物出土状況

図版6 第1区 竪穴住居跡10

竪穴住居跡10(北から) 竪穴住居跡10完掘状況

図版7 第1区 竪穴住居跡10の炉跡と土坑

竪穴住居跡10の炉跡 竪穴住居跡10内の土坑

図版8 第1区 竪穴住居跡85

竪穴住居跡85(北から) 竪穴住居跡85遺物出土状況

図版9 第1区 竪穴住居跡100

竪穴住居跡100(南から) 竪穴住居跡100(西から)

図版10 第1区 掘立柱建物跡

建物跡1(北東から) 建物跡2(北から) 建物跡3(北から)

図版11 第1区 柱穴

ピット32(建物跡1) ピット25(建物跡1) ピット42(建物跡2) ピット41(建物跡2) ピット121(建物跡3) ピット127(建物跡3)

図版12 第1区 土坑6

土坑6遺物出土状況(北東から) 土坑6遺物出土状況(南東から)

図版13 第1区 土坑

土坑1 土坑8 土坑28

図版14 第1区 土坑

N区の土坑群(左から土坑11・64・12・63・13・14) 土坑12 土坑13 土坑14 土坑64

図版15 第1区 土坑

土坑60遺物出土状況 土坑60遺物出土状況(細部)

図版16 第1区 土坑

土坑47 土坑48

図版17 第1区 土坑

土坑61遺物出土状況 土坑91遺物出土状況 土坑107

図版18 第1区 溝

溝70とその周辺の遺構(竪穴住居跡100、土坑107・111、溝97 南東から) 溝70遺物出土状況

図版19 第1区 溝

溝70東壁断面 溝70断面(中央部 東から)

図版20 第1区 溝

溝112(西から) 土坑115～117、溝119(東から)

図版21 第2区(S区) 全景(第1面)と溝45

全景(溝1～45 北から) 溝45

図版22 第2区(S区) 全景(第2面)

全景(河川跡50 北から) 南東部

図版23 第2区(S区) 全景(第2面)と土坑

全景(土坑46・47) 土坑46検出状況

図版24 第2区 土坑47

土坑47検出状況 土坑47底部分検出状況

図版25 第2区 土坑48

土坑48検出状況 土坑48検出状況(上部の土器片除去後)

図版26 第2区 土坑49と灰褐色土土器検出状況

土坑49検出状況 灰色褐色土土器(須恵器壺)検出状況

図版27 第2区 遺構51

遺構51土器(須恵器蓋と杯)出土状況 遺構51土器(須恵器蓋)検出状況

図版28 第2区 遺構52

遺構52(石組み遺構)検出状況 遺構52(石組み遺構)検出状況

図版29 第2区 遺構52

遺構52(石組み遺構)基底部検出状況 遺構52(石組み遺構)断面

図版30 第2区 遺構57

遺構57土器出土状況 遺構57土器検出状況

図版31 第2区 遺構58

遺構58(土壤墓)土師器検出状況 遺構58(土壤墓)石敷き検出状況 遺構58(土壤墓)石敷き検出状況

図版32 第2区(N区) 全景(第1面)

全景(溝103～144 北西から) 全景(北から)

図版33 第2区(N区) 全景と第2面土器出土状況

第2面 全景(南から) 土器(須恵器)出土状況

図版34 第2区 遺構101

遺構101土器出土状況 遺構101土器(土師器)出土状況

図版35 第2区 遺構102

遺構102土器検出状況 遺構102土器出土状況(上部の土器除去後)

図版36 第2区(N区)遺構141と河川跡142

遺構141土器(須恵器)出土状況 河川跡142土器(須恵器)出土状況

図版37 第2区 土壙墓145

土壙墓145検出状況(南から) 土壙墓145検出状況(北西から)

図版38 第2区 土壙墓145

土壙墓145石敷き検出状況(南から) 土壙墓145完掘状況(南から)

図版39 第2区 土壙墓145下層の植物遺体

土壙墓145下層の植物遺体検出状況 土壙墓145下層の植物遺体検出状況(細部)

図版40 第2区 土層断面

S区の北西部 土層断面 S区の南東部 土層断面 N区の北西部 土層断面 N区の南東部 土層断面

- 図版41 第1区 竪穴住居跡65出土遺物
- 図版42 第1区 竪穴住居跡10出土遺物
- 図版43 第1区 竪穴住居跡85出土遺物
- 図版44 第1区 竪穴住居跡93・100、ピット91出土遺物
- 図版45 第1区 竪穴住居跡93出土遺物
- 図版46 第1区 竪穴住居跡93出土遺物
- 図版47 第1区 土坑6・ピット91出土遺物
- 図版48 第1区 土坑8出土遺物
- 図版49 第1区 土坑60出土遺物
- 図版50 第1区 土坑出土遺物
- 図版51 第1区 土坑・ピット・溝出土遺物
- 図版52 第1区 溝70出土遺物
- 図版53 第1区 溝70出土遺物
- 図版54 第1区 溝70出土遺物
- 図版55 第1区 溝9・119出土遺物
- 図版56 第1区 黒灰色土出土遺物
- 図版57 第1区 黒灰色土・灰色土・床土出土遺物
- 図版58 第2区 土坑102出土遺物
- 図版59 第2区 土壙墓145、土坑46出土遺物
- 図版60 第2区 遺構出土遺物
- 図版61 第2区 遺構・土坑出土遺物
- 図版62 第2区 遺構出土遺物
- 図版63 第2区 遺構・河川跡他出土遺物
- 図版64 第2区 河川跡50出土遺物
- 図版65 第2区 河川跡50出土遺物
- 図版66 第2区 河川跡出土遺物
- 図版67 第2区 灰褐色土・黄灰色土出土遺物
- 図版68 第2区 灰褐色土・黄灰色土出土遺物

表目次

表1 府中遺跡・和泉寺跡・和泉國府跡における既往の調査	8
表2 府中遺跡出土韓式系土器・須恵器 蛍光X線分析データ	68
表3 測定試料および処理	74
表4 放射性炭素年代測定および曆年較正の結果	75
表5 半定量分析結果(mass%)	75

第1章 調査経過と調査方法

第1節 調査の経過(図1・2・5)

府中遺跡は、和泉市の西北部、府中町を中心に一部黒鳥町、桑原町に広がり、標高20～24m付近の段丘上に展開する遺跡であり、南北約1.2km、東西約1kmを測る範囲をもつ。

遺跡の中央部に所在する泉井上神社のあたりには和泉国府跡が想定されており、遺跡の南部は和泉寺跡の一部が重なる。また、遺跡の中央部を小栗街道(熊野街道)が南北に縦断する。

今回の発掘調査は、都市計画道路大阪岸和田南海線街路築造事業(府中工区)に伴う記録保存調査である。この工区については、平成17年度以降、本府教育委員会において順次発掘調査を実施し、市道府中阪本線以南については、すでに調査を終了し報告書が刊行されている(大阪府教育委員会2012、2013、2015)。

市道府中阪本線以北については、平成27年度に事業者である大阪府都市整備部鷹土木事務所建設課と文化財保護課が協議を行い、建設予定地内を事前に確認調査を行い、その結果に基づいて発掘調査を実施することとなった。その結果、平成27、28年度にわたって発掘調査が実施され、平成29年度に調査報告書も刊行された(大阪府教育委員会2018)。

本書では、府中遺跡における都市計画道路大阪岸和田南海線建設予定地の未調査部分において、さら

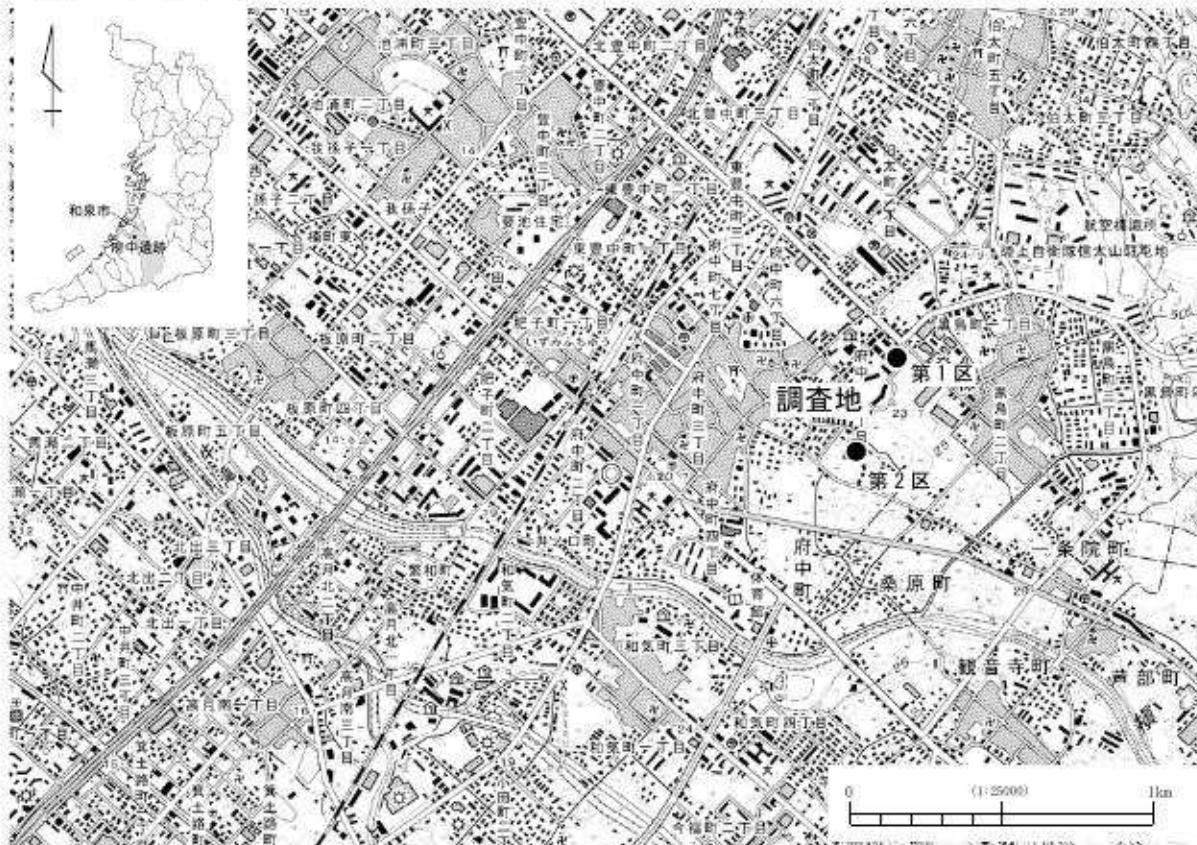


図1 調査地位置図

第1章 調査経過と調査方法

に調査を実施した箇所を報告するものである。今回の調査対象地は大きく2ヶ所に分割され、北側(第1区)と南側は平成27、28年度調査のA・B・C区とF・G区に挟まれた部分(第2区)である。

本発掘調査は、平成29年4月3日から9月4日まで実施した。所在地は和泉市府中町と黒鳥町にまたがっている。調査面積は2072m²である。

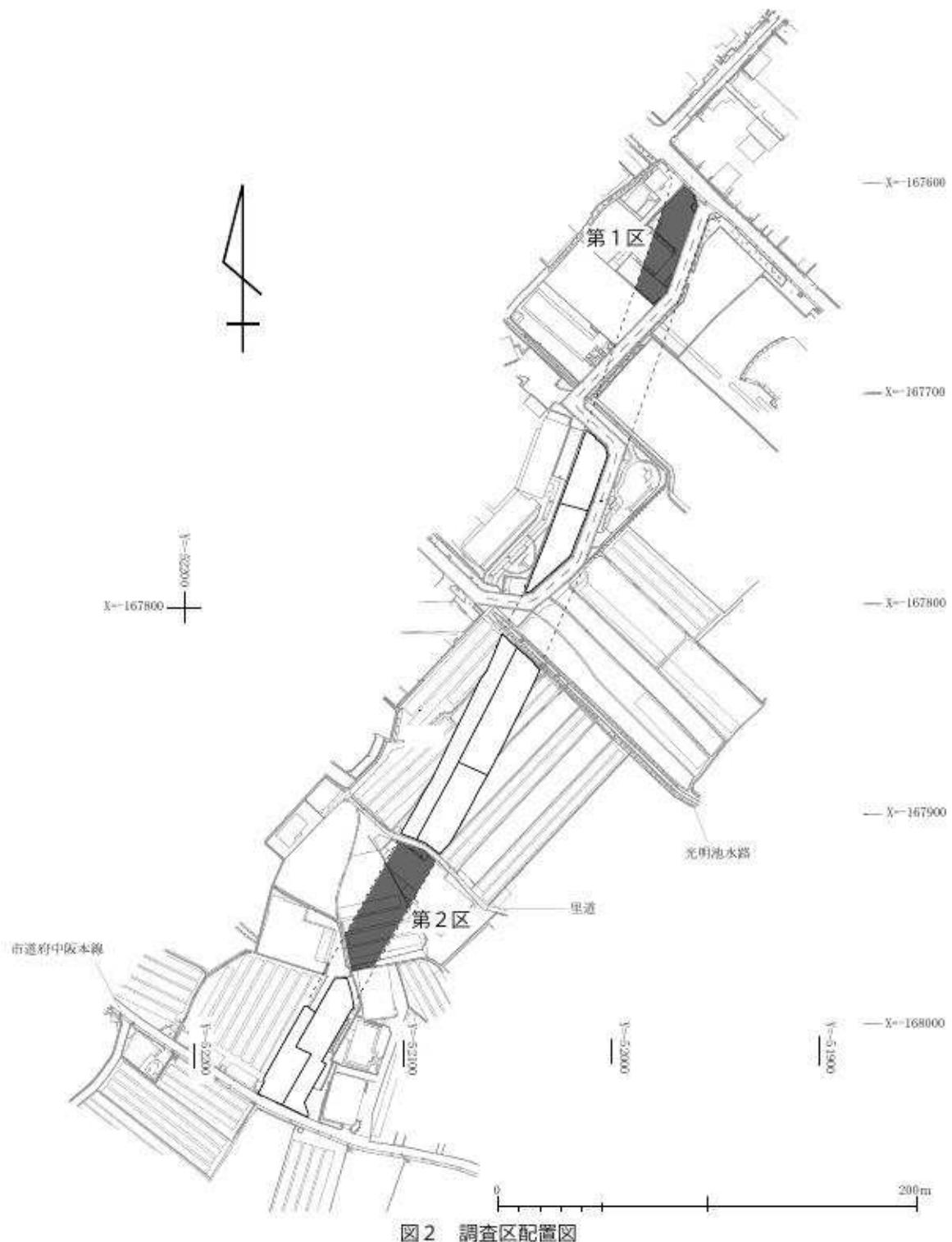


図2 調査区配置図

第2節 調査方法(図3)

発掘調査の実施にあたっては、掘削残土の仮置き等を考慮して、それぞれの調査区を2分割して実施した。調査は盛土や旧耕作土は重機によって除去し、その下層を層序を確認しながら人力掘削によって発掘調査を進めた。なお、平面図、遺構図の作成については、空中写真測量を実施し、作業の効率化を図った。

出土遺物については、図3のとおり地区割を設定し、5m メッシュで取り上げ遺物台帳に記載し管理した。

参考文献

大阪府教育委員会2012『和泉寺跡・府中遺跡』大阪府埋蔵文化財報告2011-3

大阪府教育委員会2013『和泉寺跡・府中遺跡Ⅱ』大阪府埋蔵文化財報告2012-5

大阪府教育委員会2015『和泉寺跡・府中遺跡Ⅲ』大阪府埋蔵文化財報告2014-5

大阪府教育委員会2018『府中遺跡』大阪府埋蔵文化財報告2017-3

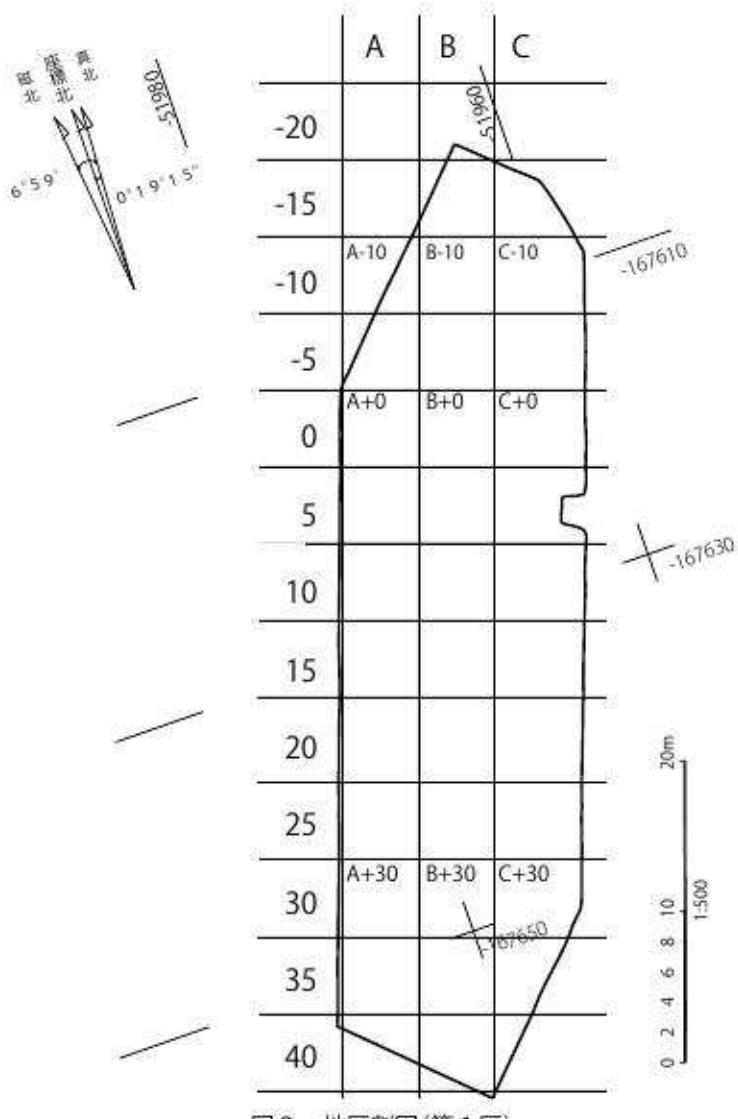


図3 地区割図(第1区)

第2章 地理的・歴史的環境と既往の調査成果

第1節 地理的環境

和泉市は大阪府の南西部に位置する。市域の南部には和歌山県との境となる和泉山地があり、その北側は海岸部に向けて泉州丘陵や信太山台地が広がっている(図4)。槇尾川や松尾川は和泉山地に端を発してこれらの丘陵地や台地を流れしており、流域に小規模な三角州や谷底平野を形成するもののその発達は悪く、段丘崖を形成させながら蛇行している。槇尾川右岸の丘陵地、台地は、信太山丘陵と呼ばれ、現在自衛隊の駐屯地や演習場がある。丘陵上には比較的平坦な部分もあり、縁辺部には谷を発達させる。これらの中には光明池や大野池などのように谷下流に堤を設けた溜池がみられる。また槇尾川と松尾川の間の丘陵地、台地は和泉丘陵とよばれ、こちらも縁辺部には谷を発達させており、梨本池や谷本池などのように堤を設けて溜池となっている部分がある。

府中遺跡は槇尾川右岸に位置し、国土地理院発行の数値地図25000(土地条件)によれば、基本的には信太山丘陵から派生する更新世段丘に位置する。ただ、大阪岸和田南海線の築造に伴う既往の調査により、かならずしも更新世段丘のみでなく、これを開析した縄文時代以降の地層が存在することがわかってきていている。たとえば、市道府中阪本線よりも南で行われた調査では旧河川を検出しており、それが古墳時代後期まで完全には埋積されず窪地として残存すること、またその後に形成された古代の遺構面も洪水堆積層によって覆われることが報告されている(大阪府教育委員会2012・2013／報告書については表1参照、以下同じ)。こうした旧河川は、図5に示す「里道」付近より南では普遍的に検出されており、その埋没時期は平安時代に下るものもある(大阪府教育委員会2018)。また今回の調査でも第1区ではその基盤層が沖積層であることが明らかとなり、第2区では遺構面基盤層を構成する水成堆積物が紀元前1401～1266年(縄文時代後期後葉～晩期前葉)に遡ることを報告している(第3章第4節参照)。なお、これらの旧河川の流向については明らかではないものが多いが、おおむね東西方向であると報告されている例があり(大阪府教育委員会2012)、流路が固定化する前の槇尾川およびその支流による影響を受けていると考えて大過なかろう。すなわち、当地一帯が更新世段丘に位置するという理解は、発掘調査の知見からは否定的であり、遺跡の形成過程とも深く関わる周辺環境の復元を、今後意識的に進めることができると考えられるだろう。

また、当地一帯は中世以降、急速に生産域と化していくことがこれまでの調査から判明している。沖積段丘上に位置すると目される当地一帯において、水田を経営するためには灌漑施設の整備が不可欠であったはずであり、水田の発達を可能とした水利の発達、およびその整備をもたらした社会背景についても、地域史的な視点から理解の深化が必要と思われる。

第2節 歴史的環境と既往の調査成果

本節では、府中遺跡周辺の遺跡の動向を確認したのち、大阪岸和田南海線築造に伴う既往の調査で得られた主要な成果について確認する。まず遺跡周辺の動向について、時代ごとに概観したい。

旧石器時代 和氣遺跡で翼状剥片が、大床遺跡、伯太北遺跡、万町北遺跡、觀音寺遺跡、上フジ遺跡、西山遺跡等で国府型ナイフ形石器が見つかっている。

縄文時代 前期では仏並遺跡、池田寺遺跡、小田遺跡などで土器が出土している。中期では仏並遺跡で竪穴建物や土器棺墓、府中遺跡、池田寺遺跡、池上曾根遺跡、万町北遺跡などで土器などが出土している。晚期では仏並遺跡、府中遺跡、池上曾根遺跡、万町北遺跡などで土器などが出土している。

弥生時代 前期中葉には池浦遺跡、前期後葉には環濠をもつ大集落である池上曾根遺跡が現れる。中期には池上曾根遺跡で集落の拡大が認められ中期後葉には最盛期を迎える。この時期には横尾川中流域の万町北遺跡、池田下遺跡、松尾川右岸の寺田遺跡、左岸の輕部池遺跡で建物遺構が検出されている。後期には池上曾根遺跡の大規模集落が解体し規模が縮小する。また觀音寺山遺跡や惣ヶ池遺跡が認められるようになる。後期後葉には今木遺跡、輕部池西遺跡、山ノ内遺跡で建物遺構が検出されている。庄内式併行期には府中遺跡や豊中遺跡、七ノ坪遺跡、寺田遺跡でも集落が検出されている。

古墳時代 前期には府中遺跡、和氣遺跡、寺田遺跡、小田遺跡、田治米宮内遺跡遺跡、西大路遺跡等で引き続き集落が営まれ、寺田遺跡、田治米宮内遺跡は後期にかけて継続する。古墳では和泉黄金塚古墳、摩湯山古墳、丸笠山古墳、久米田古墳群、信太千塚古墳群などが造営される。また陶邑窯跡群では須恵器生産が盛行する。

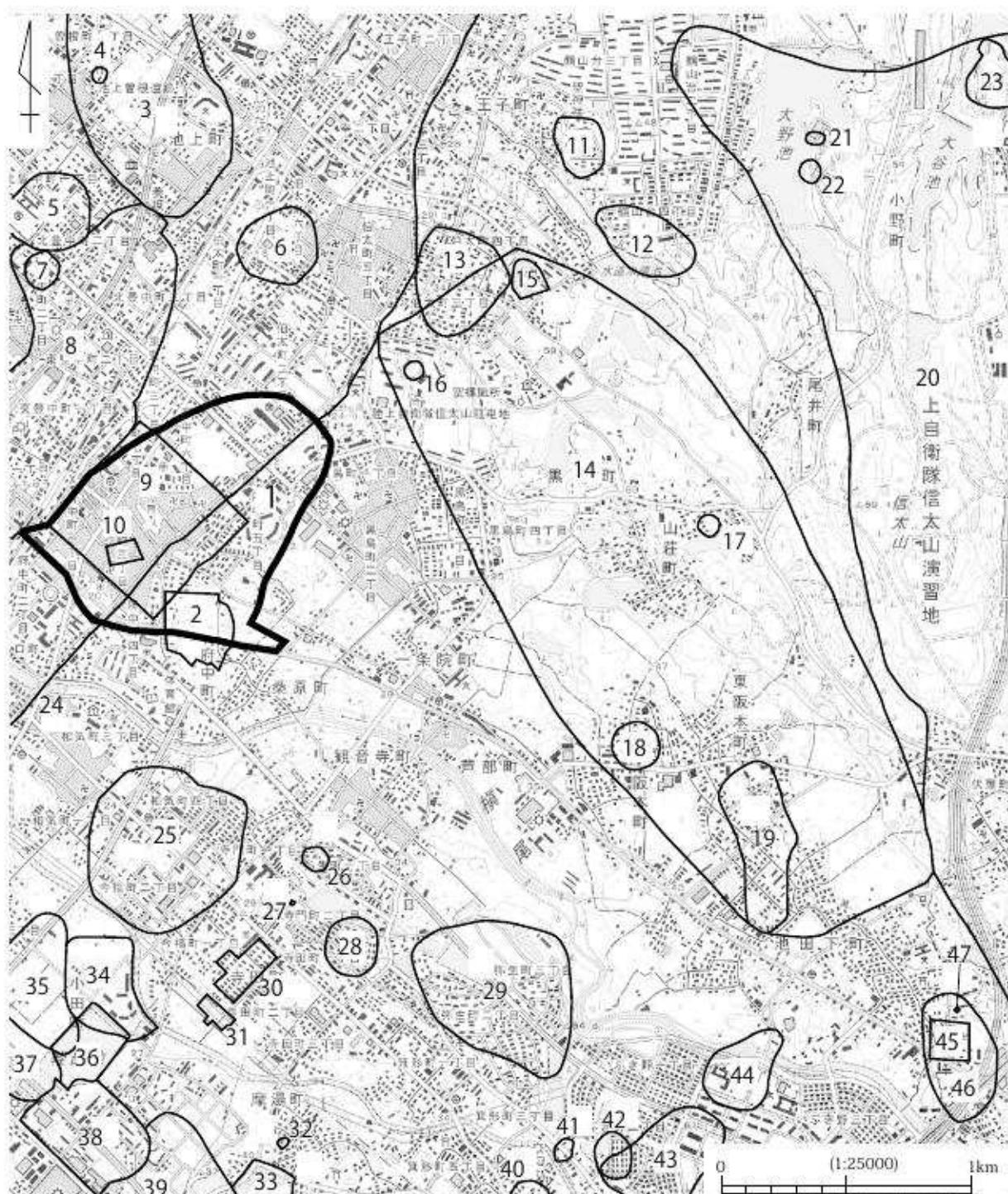
飛鳥～奈良時代 飛鳥時代には万町北遺跡、二俣池北遺跡などが古墳時代から継続する。奈良時代ではこれらに加え、府中遺跡、板原遺跡、小田遺跡などで集落が形成されている。この時期の古代寺院跡としては、信太寺跡、和泉寺跡、坂本寺跡、池田寺跡、和泉国分寺跡等がある。今回の調査と一連の道路事業による和泉寺跡の調査では、推定寺域の外側、南西部付近から文字瓦等が多数出土している。府中遺跡内には和泉国府が推定されているが、関連する明確な遺構は見つかっていない。

平安時代 池田寺遺跡、万町北遺跡、二俣池北遺跡などで奈良時代から集落が継続している。万町北遺跡では「大同五年」(810年)と記された木簡が出土している。

中世 二俣池北遺跡、水込遺跡、山直中遺跡、和氣遺跡、府中遺跡で集落跡が検出されている。

次に、大阪岸和田南海線築造に伴う既往の調査で得られた主要な成果について、遺跡の南方で実施された調査から順に確認する(図5・6、表1)。

市道府中阪本線より南方では、先述したように旧河川を検出し、横尾川の影響を受けたことが判明している(大阪府教育委員会2012・2013・2015)。この流路の多くは古墳時代後期にかけて埋没していくが、その過程で、弥生時代後期を中心とした多量の土器が出土している。出土状況からみてこれらの土器は意図的に置かれた可能性がある。当該期の生活に関わる遺構はこの調査区では検出されておらず、周辺に集落の存在が想定される。上記の土器群については、生駒西麓産、北近畿産、淡路型など外来系土器が含まれることが特徴として挙げられる。こうした特徴は古墳時代になんても同様であり、市道府中阪本線より北も含めて、鉄鋌や鉄鐸、韓式系土器(ただし分析の結果、胎土は土師器と同様であ



- | | | | | | | |
|----------------|---------------|-------------|-----------|----------|---------------|---------------|
| 1 府中遺跡 | 2 和泉寺跡 | 3 池上曾根遺跡 | 4 曾根城跡 | 5 七ノ坪遺跡 | 6 伯太北遺跡 | 7 大福寺跡 |
| 8 豊中遺跡 | 9 和泉國府跡 | 10 国府城跡 | 11 聖神社遺跡 | 12 惣ヶ池遺跡 | 13 伯太藩陣屋跡 | 14 信太千塚古墳群 |
| 15 丸笠山古墳 | 16 王塚古墳 | 17 黒島山荘遺跡 | 18 坂本寺跡 | 19 頤成遺跡 | 20 陶邑窯跡群大野池地区 | |
| 21 大野池遺跡(北地区) | 22 大野池遺跡(南地区) | 23 山田古墳群 | 24 熊野街道 | 25 和氣遺跡 | 26 観音寺城跡 | |
| 27 孤塚古墳 | 28 寺門古墳群 | 29 観音寺山遺跡 | 30 寺田遺跡 | 31 摩瀬北遺跡 | 32 イナリ古墳 | 33 摩瀬山古墳 |
| 34 軽部池遺跡 | 35 小田遺跡 | 36 軽部池 | 37 軽部池西遺跡 | 38 山ノ内遺跡 | 39 山県北遺跡 | 40 和泉丘陵A1地点遺跡 |
| 41 和泉丘陵A87地点遺跡 | 42 池田山遺跡 | 43 唐国池田山古墳群 | 44 池田下遺跡 | 45 池田寺跡 | 46 池田寺遺跡 | 47 池田寺瓦窯 |

図4 周辺の遺跡(1/25000)

るとされたものもある)が出土しており、外来系土器、とりわけ朝鮮半島との関係を示す遺物が出土している。図5に示す15017・16001-A~C区の南端では、旧河川のへりに韓式系土器を伴う小規模な竪穴建物を検出しており(大阪府教育委員会2018)、当地付近に渡来系の文化を有する人びとの活動拠点があったことが推測できる。

古代については、市道府中阪本線より南方は、瓦の出土や正方位に則る地割の存在から、古代寺院「和泉寺」の比定地(和泉寺跡)となっている。古代寺院に直接的に関わる遺構はこれまで検出されていないが、遺物については、古代氏族名「珍縣主」・「坂合部連」が記された文字瓦が出土していることが特筆される(大阪府教育委員会2013)。これらの瓦は7世紀末~8世紀前半のものであり、地割などから総合的に判断すれば、比定地における和泉寺の実在を示す資料と評価できる。

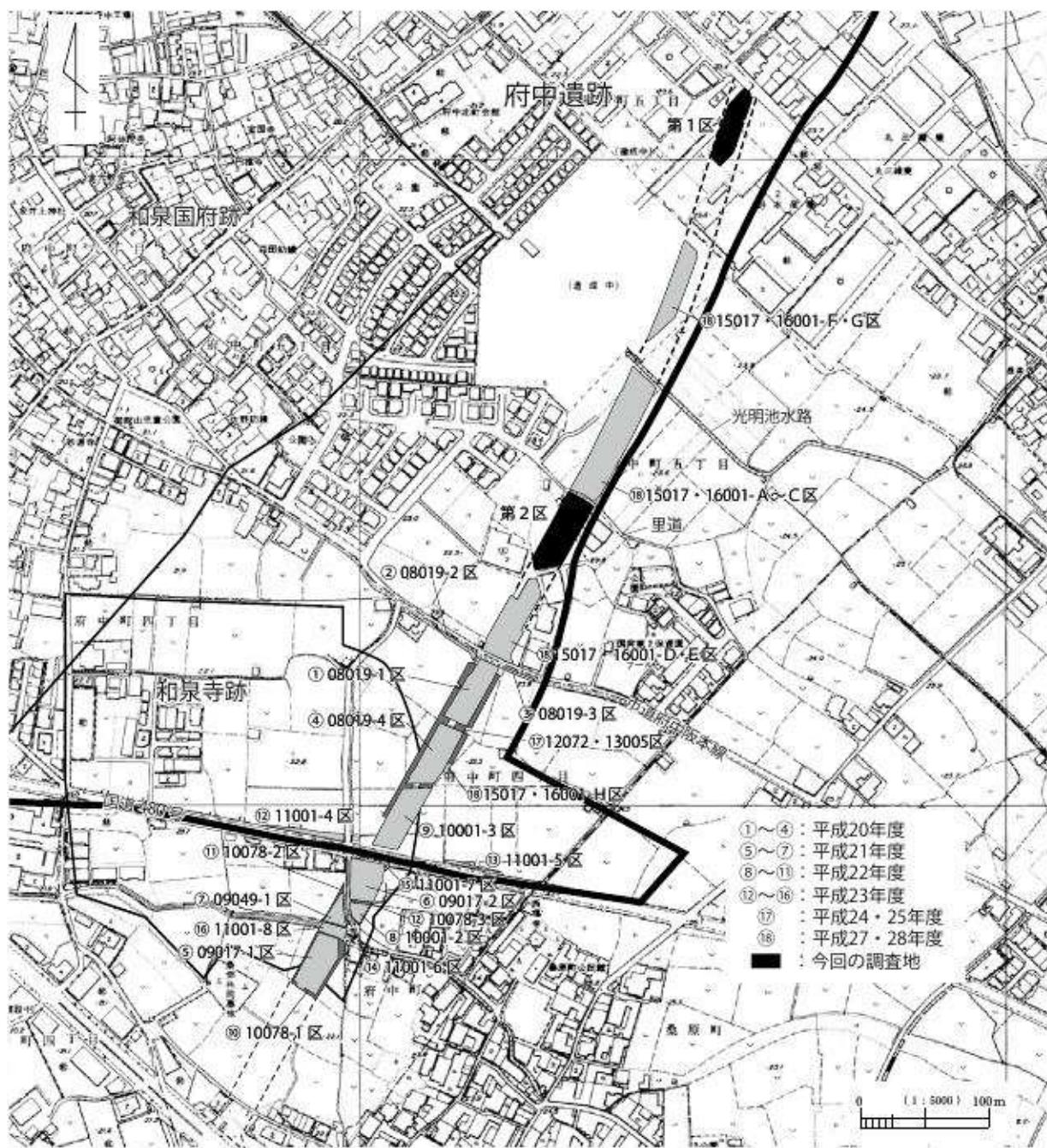


図5 既往の調査区(1/5000、(都)大阪岸和田南海線事業関連、平成3年作成大阪府地形図を使用)

表1 府中遺跡・和泉寺跡・和泉国府跡における既往の調査

調査番号	主な時代	主な遺構	主な遺物	報告書
81-6	5c後半～6c後半、平安	掘立柱建物1棟、溝、土坑、ピット	須恵器环蓋、捏ね鉢、滑石製紡錘車、黒色土器、綠釉陶器 瓦、須恵器环蓋、土師器小皿	和泉市教委 1983「府中遺跡群発掘調査概要」Ⅲ
82-1				
77-1次	弥生～古墳前期	竪穴住居2基、焼土坑、溝	大量の古式土師器	和泉市教委 1978「府中遺跡発掘調査概要」Ⅱ
77-2次	弥生～古墳前期	竪穴住居、土坑、溝	弥生土器	
75-1次	弥生・古墳	溝、落ち込み、ピット	弥生土器	和泉市教委 1976「府中遺跡発掘調査概要」
75-2次		土坑、ピット		
75-3次	弥生中期・古墳後期	竪穴住居、溝、袋状土坑	弥生土器、須恵器	和泉市教委 1980「府中遺跡発掘調査概要」Ⅳ
75-4次			古代の土器、弥生、須恵器	
79	古墳後期後半～奈良	掘立柱建物4棟(奈良) 土坑、溝、落込み	土師器	和泉市教委 1987「府中遺跡群発掘調査概要」Ⅶ
86-1	近世		陶磁器	和泉市教委 1986「府中遺跡群発掘調査概要」VI
86-3	古墳後期後半	溝・ピット・落込み	須恵器	
84-5	中世以降・近世	溝・土坑・落込み・ピット	肥前磁器・淡焼	和泉市教委 1985「府中遺跡群発掘調査概要」V
84-4	古墳後期～奈良・平安	溝・ピット	須恵器、土師器	和泉市教委 1981「府中遺跡群発掘調査概要」
80-1	中世・近世	ピット・土坑	土師器・軒平瓦・瓦	
80-2	古墳前期・中世以降	溝・ピット・井戸(中世以降)		和泉市教委 2015「和泉市埋蔵文化財発掘調査概報」25 和泉市教委 2002「和泉市埋蔵文化財発掘調査概報」12
13-2		溝・円形土坑	瓦・土師器	
00-4	弥生	円形・方形周溝墓	弥生土器	大阪府教委 2010「府中遺跡」 (府埋文調査報告 2010-5)
02020～06017	縄文中期～古墳、	土器集積遺構、土坑、方形周溝墓	縄文土器・弥生土器・土師器	
84-1～1区	弥生中・後期、古墳	竪穴住居、土坑 方形周溝墓 大溝、溝、土坑、ピット	弥生土器(Ⅲ様式)・石斧、石籬 弥生土器(Ⅴ様式) 弥生土器(V様式末)・土師器(布留式)・須恵器	大阪府教委 1985「府中遺跡発掘調査概要」
86	弥生中・後期、古墳初	竪穴式建物、溝	弥生土器・土師器・縄文後期土器	大阪府教委 1987「府中遺跡発掘調査概要」II
04～09	縄文～近世	土坑、溝、中世屋敷地、井戸、土坑 中世屋敷地、井戸、土坑	縄文土器・弥生土器・石器・土師器・瓦器 瓦器	大阪府教委 2012「府中・豊中・板原遺跡」 (府埋文調査報告 2011-9)
66	奈良	掘立柱建物、周溝	土師器・須恵器・錢貨(皇朝十二銭)・土馬	大阪府教委 1966「和泉国府跡発掘調査概要」
89-13	中世	ピット、土坑	土師器・須恵器・瓦器・錢貨(洪武通宝・大觀通宝)	和泉市教委 1991「和泉市埋蔵文化財発掘調査概報」I
89-10	古墳後期	円形土坑	土師器・須恵器	和泉市教委 1990「府中遺跡群発掘調査概要」X
98-7	奈良前半以降、近代	整地層、溝	土師器・須恵器・平瓦	和泉市教委 1999「和泉市埋蔵文化財発掘調査概報」9
98-8	平安以降	河川痕跡	瓦	
96-4	5c後半～7c	ピット、整地層	土師器・須恵器・繪錢(江戸時代)	和泉市教委 1998「和泉市埋蔵文化財発掘調査概報」8
94-1	中世以降	溝	土師器	和泉市教委 1995「和泉市埋蔵文化財発掘調査概報」5
93-2	近世	ピット、埋甕	陶磁器・淡焼・軒丸瓦	
93-6	近世	方形土坑		和泉市教委 1992「和泉市埋蔵文化財発掘調査概報」2
92-10	古墳後期	落込み、ピット	土師器・須恵器	
90-6	中世以降	長方形土坑	土師器	和泉市教委 1993「和泉市埋蔵文化財発掘調査概報」3
90-7	中世以後	土坑	瓦・土器片	
92-3	古墳後期、中世	掘立柱建物、ピット、土坑、溝	土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器	和泉市教委 2012「和泉寺跡・府中遺跡」(府埋文報告 2011-3)・同 2015「和泉寺跡・府中遺跡」III(府埋文報告 2014-5)
92-4	古墳後期	円形ピット	土師器・須恵器	
08019～10001～12072	弥生末～古墳初、奈良、中世	土器溜まり、自然流路、 掘立柱建物、土坑、溝	弥生土器・土師器(弥生時代末～古墳時代初期)・滑石製品(有孔円盤・白玉)・瓦質土器	大阪府教委 2013「和泉寺跡・府中遺跡」II (府埋文報告 2012-5)
	奈良		土師器・須恵器・瓦	
	中世	掘立柱建物、土坑、溝	土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・磁器	大阪府教委 2018「府中遺跡」(府埋文報告 2017-3)
09017～11001	弥生～古墳	柱穴、自然流路	弥生土器・土師器・韓式系土器	
	奈良	土坑、溝	瓦(文字瓦・軒丸瓦・軒平瓦)	大阪府教委 2005「府教委文化財調査事務所年報」8
	中世	掘立柱建物、土坑、溝	土師器・須恵器・瓦器	
15017～16001	古墳	竪穴式建物、自然流路	土師器・須恵器・韓式系土器・鉄鐸	大阪府教委 2005「府教委文化財調査事務所年報」8
	平安	掘立柱建物、土坑、溝	黒色土器	
	中世	掘立柱建物、土坑、溝	土師器・瓦器	

その後、平安時代に活発な活動が認められるのは 15017・16001-D・E 区であり、旧河川が埋没したのち、5 棟の建物をはじめとして、10～11 世紀頃の遺構群が検出されている。

中世になると、先述したように当地における生産域化が急速に進行している。その中で、居住地として利用されたのは、市道府中阪本線より南方で、かつ旧河川の影響を受けていない場所である。旧河川部は自然科学的分析から水田として利用されたことが判明しており、旧地形が中世段階まで土地利用のあり方を規制していたことがわかる。

近世以降については、点在する集落を除き、当地一帯が生産域化していくようである。そして、こうした農村としてのあり方は、現代まで継続していくこととなる。

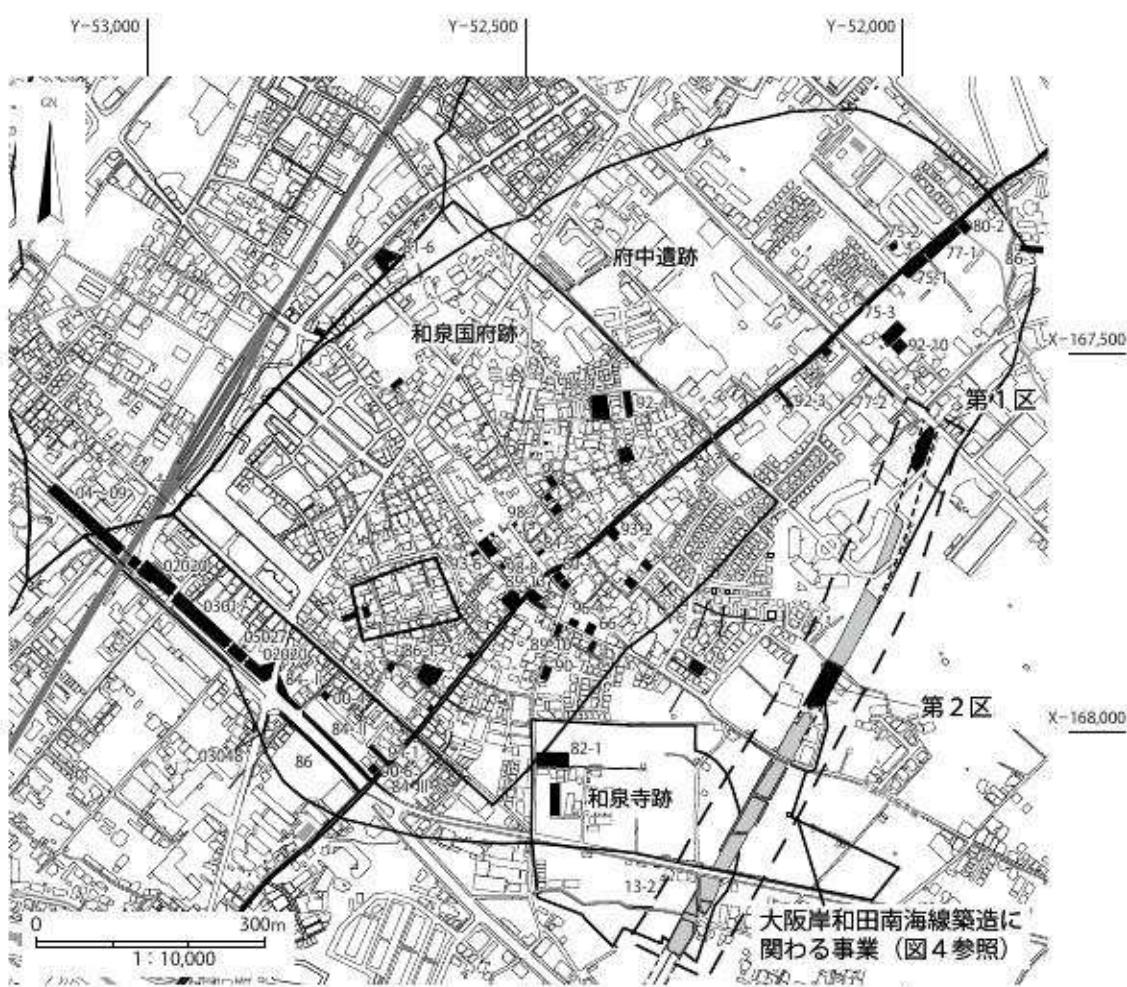


図6 府中遺跡・和泉寺跡・和泉国府跡における既往の調査地点
(1/10000、調査箇所の番号は表1と対応)

第3章 調査の成果

第1節 第1区の調査

平成28年度調査区の北側に位置し、都市計画道路泉大津阪本線までの延長約60mを発掘調査対象とした。調査面積は約870m²である。調査は掘削土置場を確保するため、中央付近で南北に分割し、北側をN区、南側をS区としてN区から調査を開始した。遺構の番号は検出した順に、通し番号を付した。

第1項 基本層序(図7・8、図版3)

この地区の地表面の高さは、調査区の北端で標高23.05m、南端で23.10mとほぼ水平な状況である。基本的な層序としては、東壁断面図や西壁断面図に見られるように上層から現代の盛土(層厚30~40cm)、その下に②層床土(層厚10cm前後)がある。部分的には床土の上部に①・⑨層耕作土(層厚10cm程度)が認められるが、大半は耕作土を除去した後に盛土を施したと考えられる。床土の下層は⑧層(にぶい黄色礫質シルト)あるいは⑫層(黄褐色シルト質砂礫)が層厚15cm前後でみられる。⑧・⑫層は弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器などの土器を含んでいることや上面に鍬溝の痕跡が認められたことから、中世後期以降の開墾による耕作土と考えられる。⑪層(にぶい黄色砂質シルト)と⑬層(オリーブ褐色砂礫)は、第1区の弥生時代中期以降の遺構面のベースとなるものである。第1区北部中央に設定したトレチの断面で観察できるように、礫層が堆積した窪地にシルト(細砂)層が堆積している。沖積段丘面の形成過程での堆積状況と考えられる。基本的にはシルト(細砂)層がベースとなる部分に遺構は集中しており、遺構の希薄な部分は礫層が地表面に露出している地域と言える。

第2項 検出された遺構と遺物

今回の調査で第1区から検出された遺構は、竪穴住居跡、建物跡、土坑、溝、ピットなどである。これらの遺構の時期は竪穴住居跡65が最も古く、床面から出土した遺物は弥生時代中期後半の様相を示し、その他の竪穴住居跡(10・85・93・100)や建物跡(1~3)は弥生時代後期後半から古墳時代初頭の所産と考えられ、溝70からは古墳時代終末期の須恵器(161)が出土している。検出した遺構の時期幅はかなり大きいものの全て同一面で検出されているし、純粹な遺物包含層も存在しない。おそらく、中世以降の開墾によって大きく削平され、当時の生活面は残っていないものと言える。

竪穴住居跡65(図10・12、図版4・5・41)

C-5~0区にまたがって検出した。平面形はおおよそ隅丸方形を呈すると考えられるが、後世に著しく削平されていて南側の大半は壁、壁溝ともに欠損している。正確な規模は不明であるが、1辺6m前後と考えている。住居の北側に残る壁溝は幅20~30cm、深さ20cm前後である。壁溝の埋土は、褐色細~粗砂である。柱穴は4ヶ所検出した。柱穴の平面形は円形に近い不定形で、直径30~60cm、深さはピット80が25cm、他(ピット67・71・77)の深さは10~15cmである。柱穴の埋土はにぶい黄褐色あるいは褐色のシルト質細砂である。炉は住居のほぼ中央で検出した。直径約1mの円形に近い

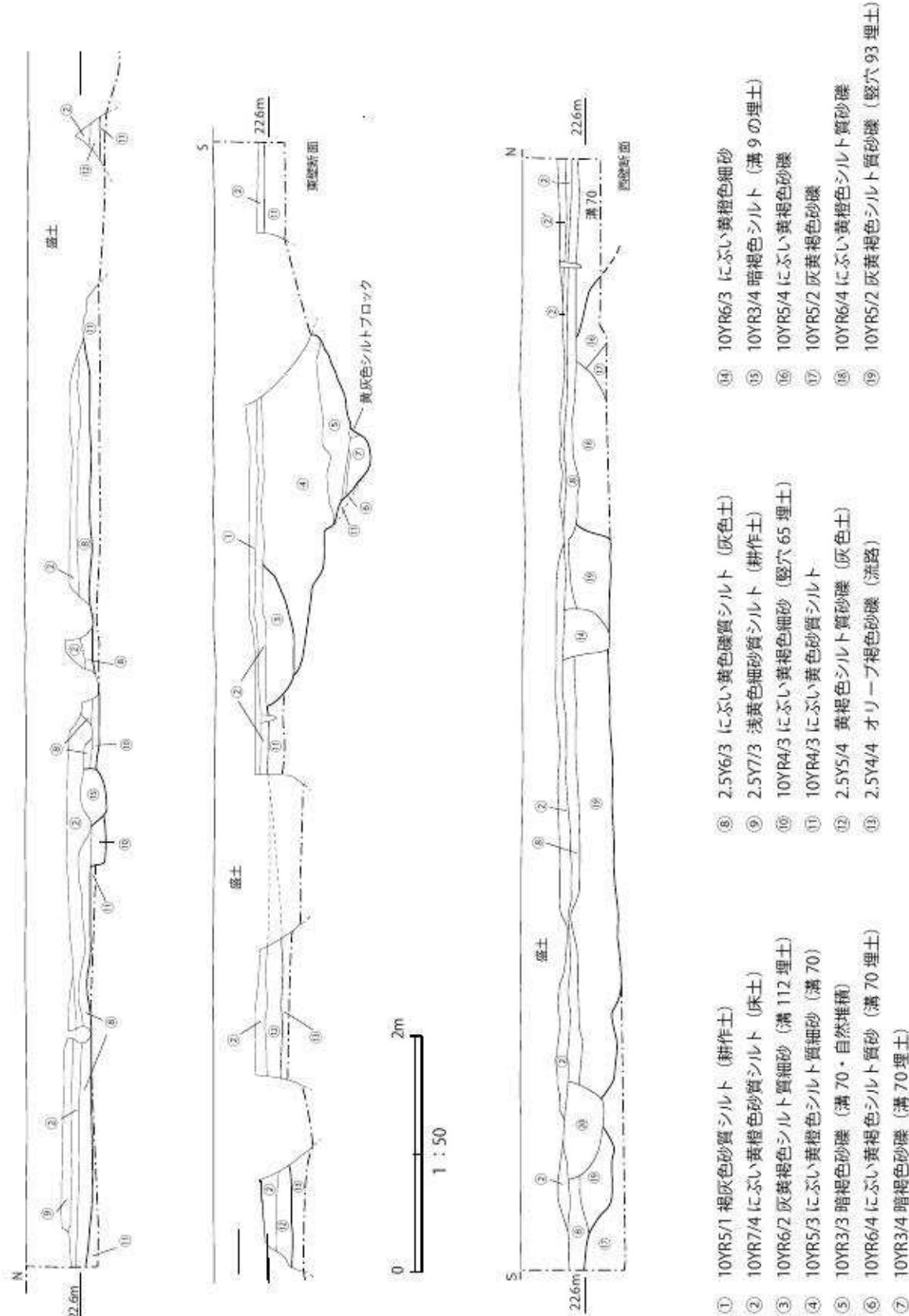


図7 第1区土層断面図(東壁北部・西壁)

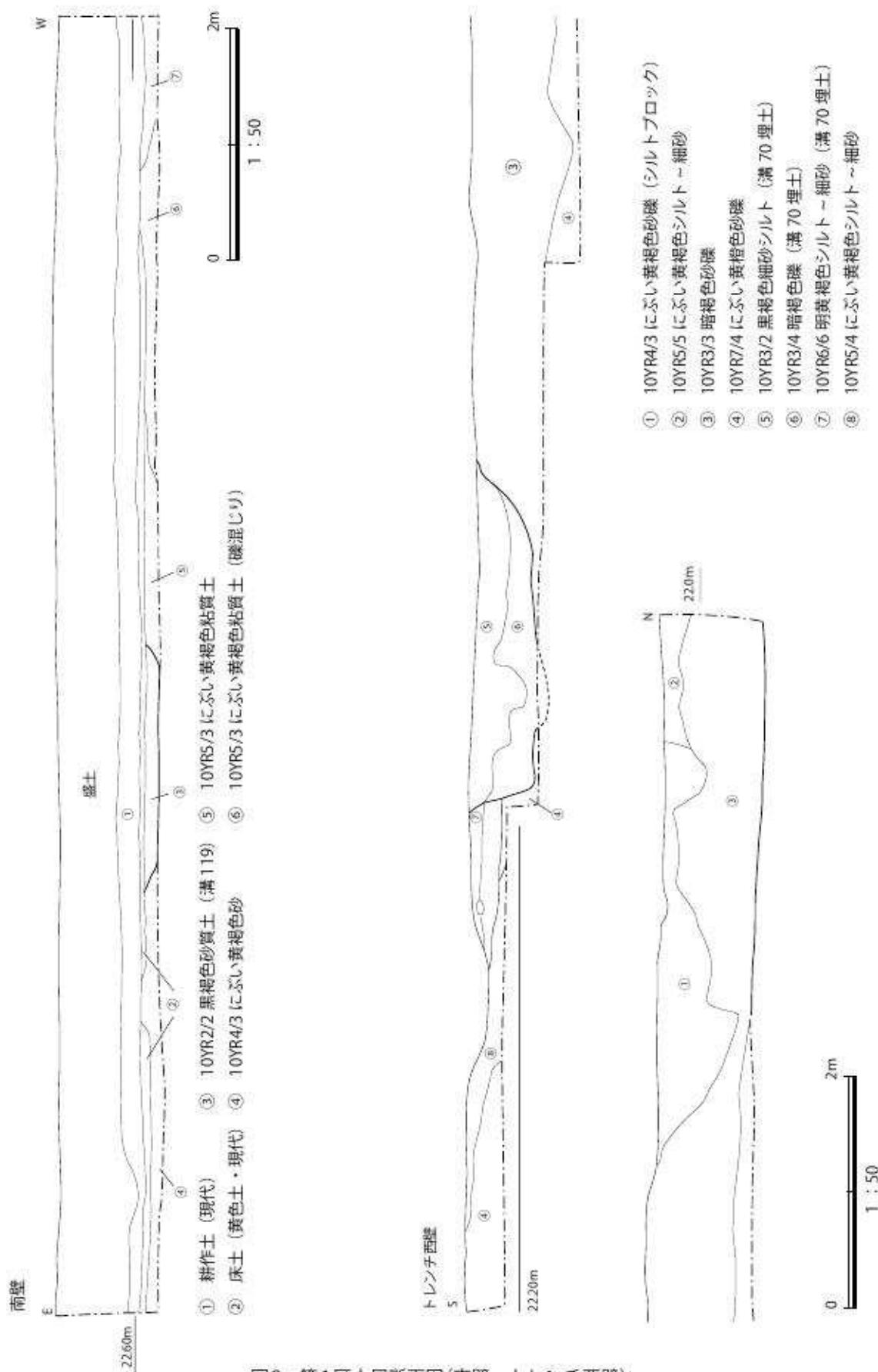


図8 第1区土層断面図(南壁・トレンチ西壁)

不定形で、深さは約30cmである。炉の埋土は大きく2層に分かれ、上層の20cm程は柱穴や壁溝と同様の褐色系のシルト質細砂である。下層は薄く底に溜まっており、黒褐色細砂で炭や灰が混じる。竪穴の掘形としては床面下15～25cmの深さを確認したが、床面より上部はほとんど欠損している。したがって、住居の床面直上に本来確認される埋土は認められないが、住居の北部に残存する壁溝、柱穴や炉の上層の埋土から褐色系の細砂が想定される。

出土遺物は少なく、1～3・5・506は住居北側の壁溝の近くで、床に張り付くような形で出土した。1は壺の蓋である。2個1対の円形の孔が対角にみられる。2はタコ壺で口縁部付近に円形の孔が1ヶ所みられる。3は壺の体部である。外面の風化が著しく文様はみられない。内面には上半に指オサエの痕跡を残す。506は壺の肩部の細片と思われる。外面には簾状文を施した上に円形浮文が付く。5は砥石である。3面に使用の痕跡が認められる。側面の使用痕は小さく部分的である。4は炉の上層から出土した広口壺の口縁部である。他にサヌカイト片が1点出土した。262は住居上部の灰色土から出土した壺の底部である。上層からの出土であるが、位置的には竪穴住居跡65の直上にあたることからここに記載した。

竪穴住居跡10(図11・12、図版6・7・42)

B-5区を中心に、B-10区、A-5区に一部がまたがって検出した。平面形は南北方向にやや長い長方形を呈している。長辺3.9m、短辺2.9mで小規模な竪穴であると言える。住居の壁溝は、幅が約30cm、深さは約25cmで四周をめぐり東辺中央の土坑に取り付く。小規模な竪穴にしては、しっかりとした壁溝である。土坑は東辺の中央付近で東壁に接して検出した。楕円形を呈し、長径90cm、短径が45cm、深さが30cmである。柱穴は認められない。住居のほぼ中央に円形を呈した炉が見られる。直径約40cm、深さ5cm程度で非常に浅く、底には炭や焼土が認められる。床面はにぶい黄褐色極砂～細砂を5cm程度の厚みで水平に仕上げている。竪穴の埋土は灰黄褐色細砂で土坑の埋土もほぼ同様である。

出土遺物は、非常に少ない。6は甕の口縁部から体部、9、10は甕の底部である。外面にタタキ目がみられる。8は底部であるが、外面にタタキ目は見られない。7は鉢である。緻密な胎土で、内外面ともに淡いピンク色の色調を呈し、精製された土器である。507、508は外面にタタキ目を残す甕の体部である。他にサヌカイト片が2点出土した。

竪穴住居跡85(図13・14、図版8・43)

C+15～20区にまたがって検出した。住居の西辺と南辺の一部を検出したが、住居の大半が調査区外にのびるために正確な規模は不明である。おそらく一辺7m程度の方形プランを呈すると思われる。住居の壁溝は西辺では20～30cm、南辺では20cm程度である。住居に伴う柱穴は認められない。住居の埋土は、褐色あるいは黒褐色系の砂質土で礫が混じる。竪穴住居跡85付近の遺構面は砂礫層をベースにしており、埋土に礫が混じるものもこれに起因するものと考えられる。

出土遺物は、25～29は甕の口縁部、26は口縁端部をつまみあげる特徴をもつ。27は体部上半まで残るが、外面にタタキ目はみられない。36～44は甕の底部である。36、37、40は底部外面中央に親指が入る程度のくぼみがある。30は高杯の杯部、31、33～35は高杯の脚柱部、32は脚部である。31と32は円形の透かし孔がみられる。

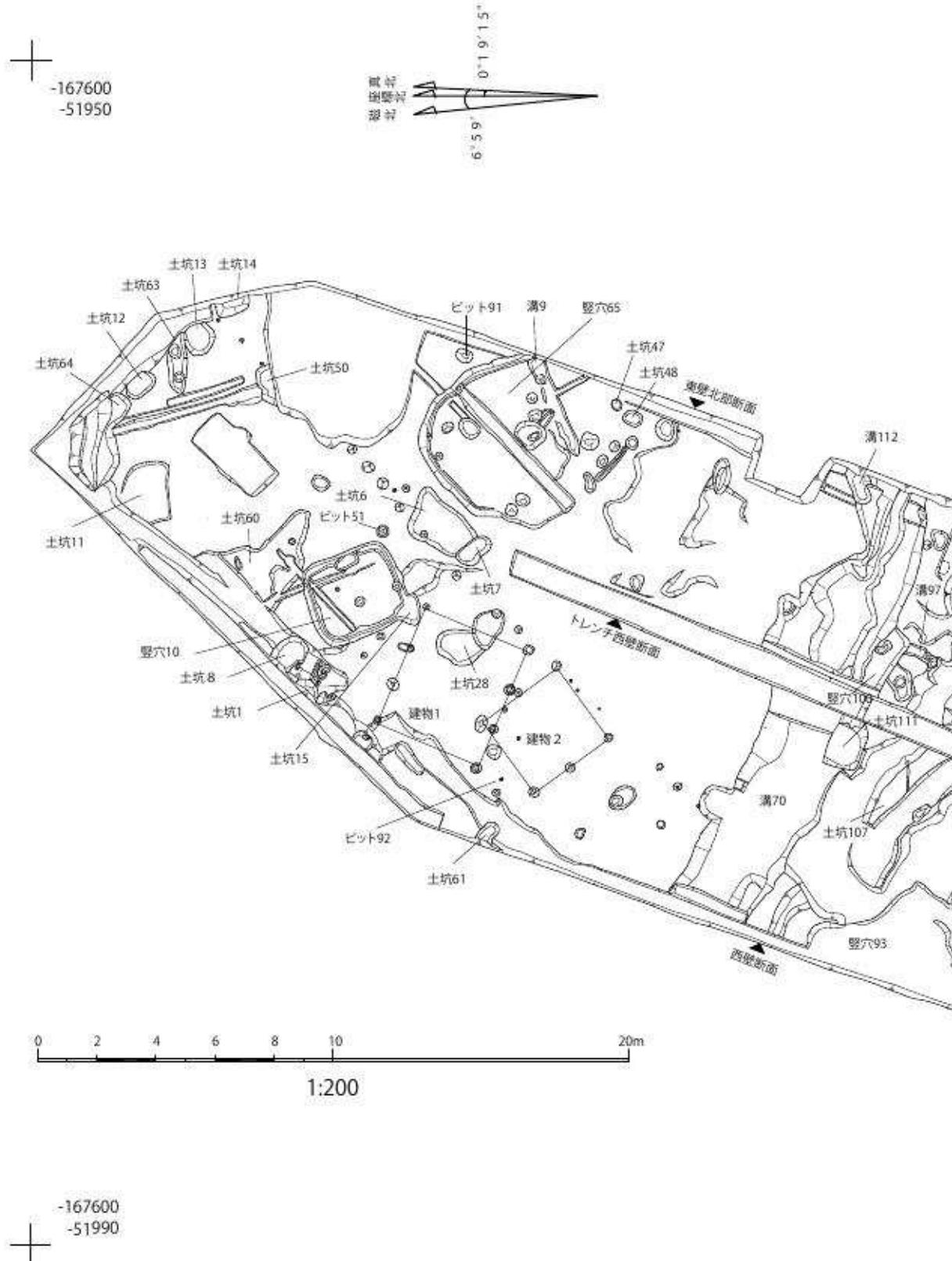
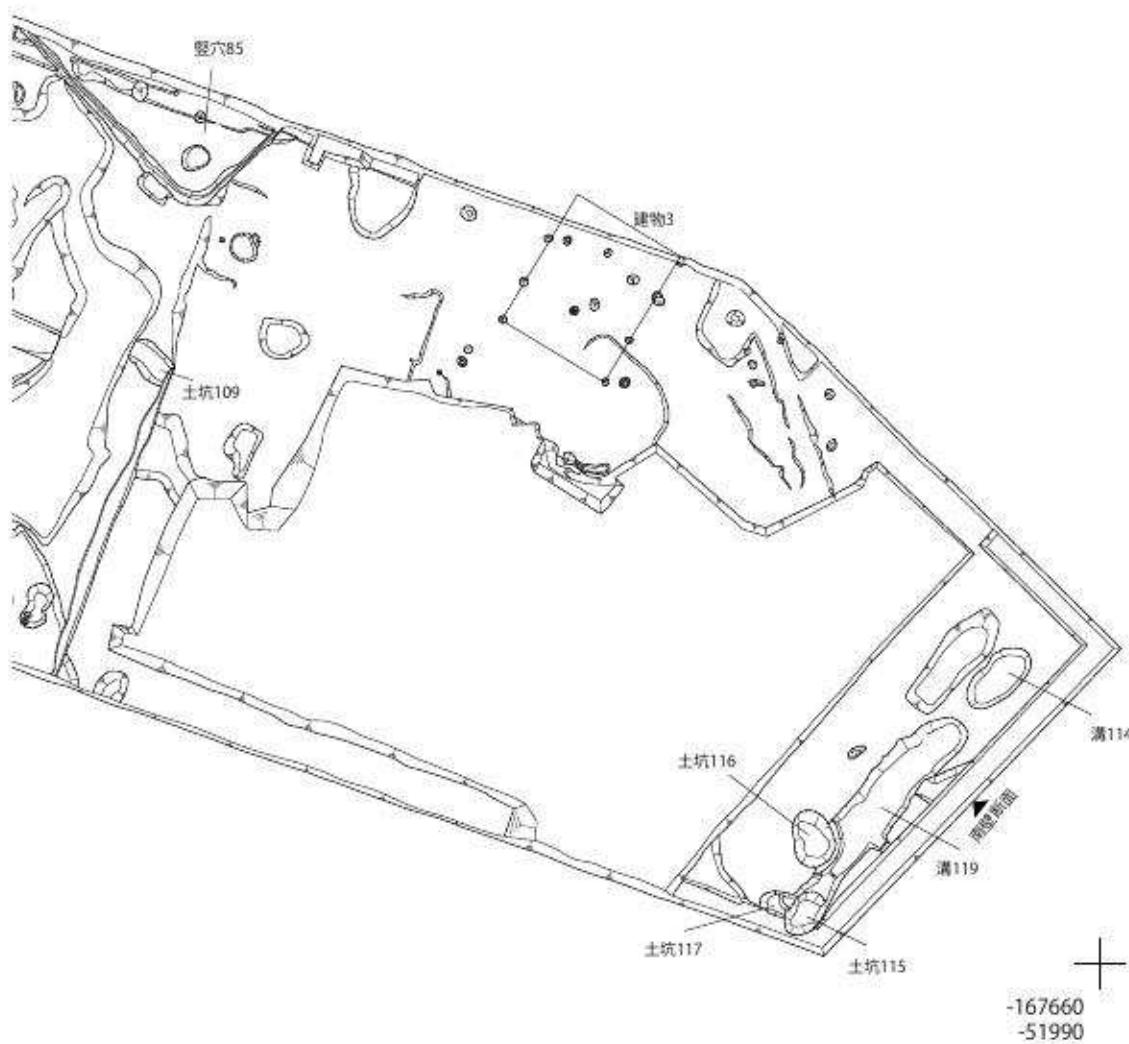


図9 第1区全体平面図

+
-167660
-51950



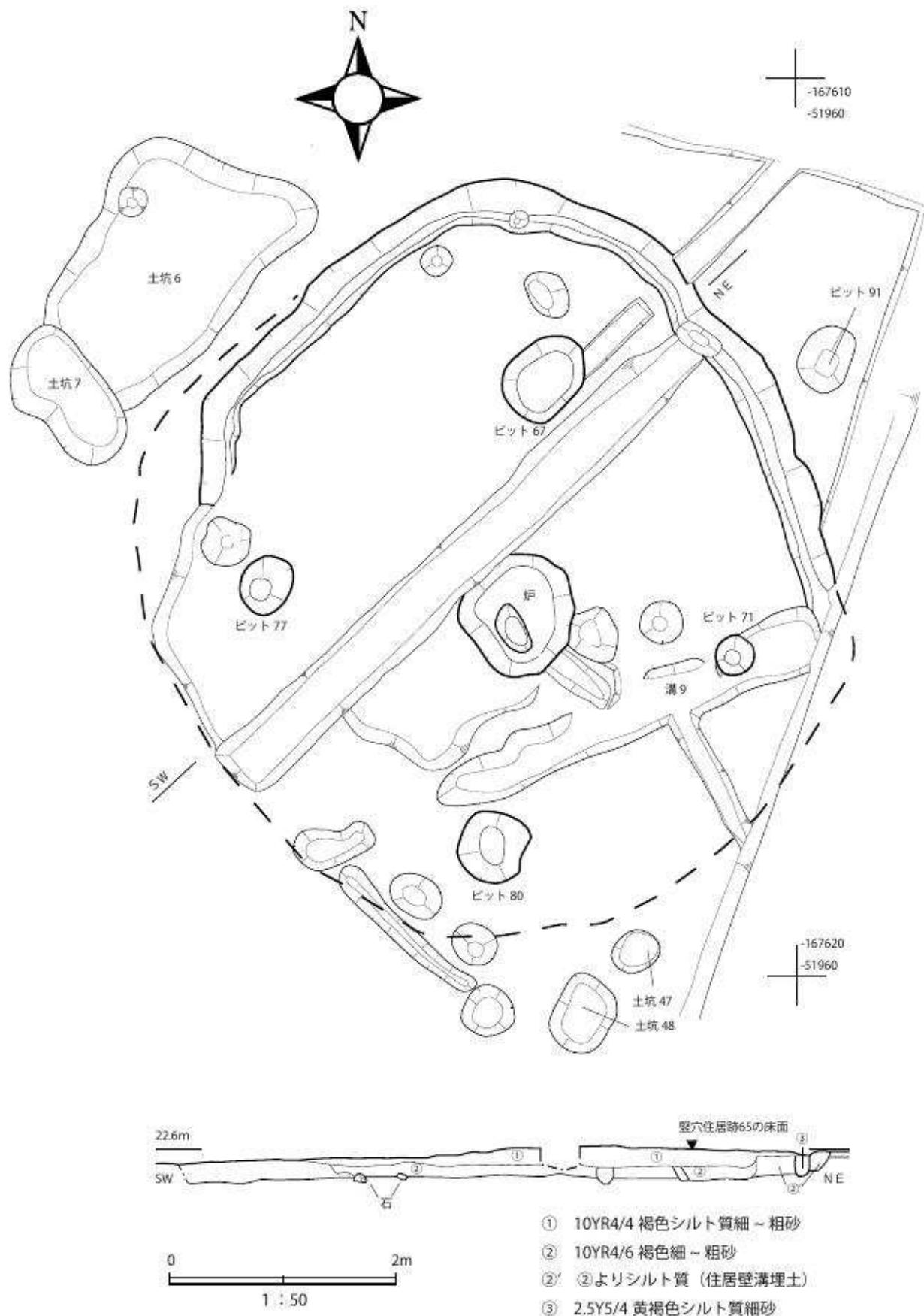


図10 竪穴住居65平・断面図

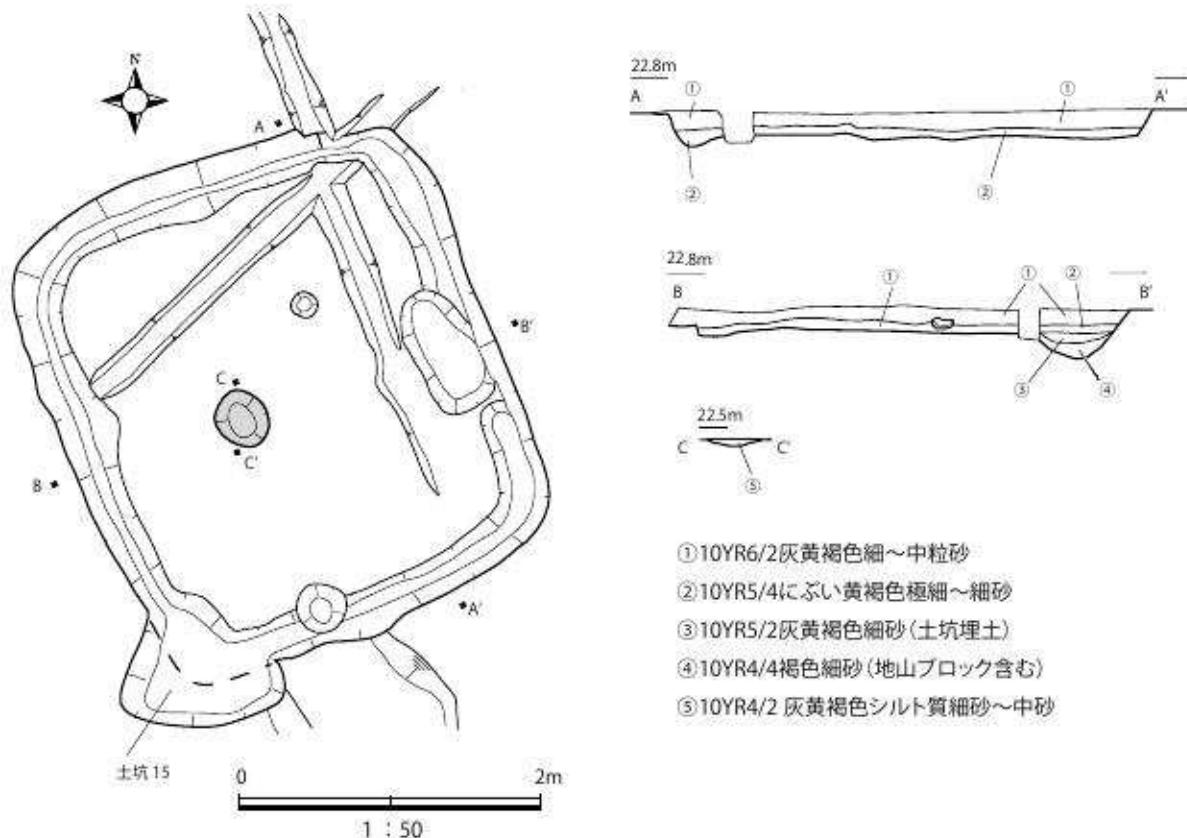


図11 竪穴住居跡10平・断面図

竪穴住居跡93(図9・12・18、図版44～46)

A + 15区を中心にA + 10・20区にまたがる。約半分は調査区外にのびると思われるが、一辺6m程度の方形プランを呈するものと思われる。壁溝、柱穴、炉等の施設は認められず、調査当初は土坑として認識していたが、平面プランが概ね方形であること、底面が平坦であることなどから竪穴住居跡として報告することにした。住居の埋土は灰黄褐色シルト質砂礫である。また、住居の南壁に接して土坑が見られる。住居に伴うかどうかは不明であるが、竪穴住居跡10の例もあるので住居内の施設と考えた。

出土遺物は、他の住居に比べて多い。11～13は甕の口縁部で、端部をわずかにつまみあげている。518～523は甕の体部で、外面に細いタタキ目が認められる。これらの土器は茶褐色あるいは淡褐色の色調を呈し、生駒西麓産の庄内式土器の特徴を有している。14は甕の口縁部である。15は鉢である。口縁部外面にヨコナデは認められるものの文様はない。外面にスヌが付着している。16は直線的に開く口縁部をもつ壺である。体部外面には縦方向のミガキが施されている。17は高杯の杯部から脚柱部である。杯部の外面は縦方向、内面は横方向のミガキが施されている。16、17ともに色調は明橙色で、成形技法などにも共通点が認められる。509、510、512、513は高杯の脚柱部である。511、514、515は高杯の脚部である。514には円形の透かし孔が認められる。18～22、24は甕の底部である。外面にタタキ目がある。18、19、21、22は底部中央にくぼみがある。23は壺の底部である。516は壺の体部である。外面に櫛書きの直線文と波状文が認められる。517はほぼ球形を呈する壺の体部である。外面には縦方向のミガキが若干認められるが、表面の風化は著しい。色調は、淡黄橙色で黒斑が認められる。

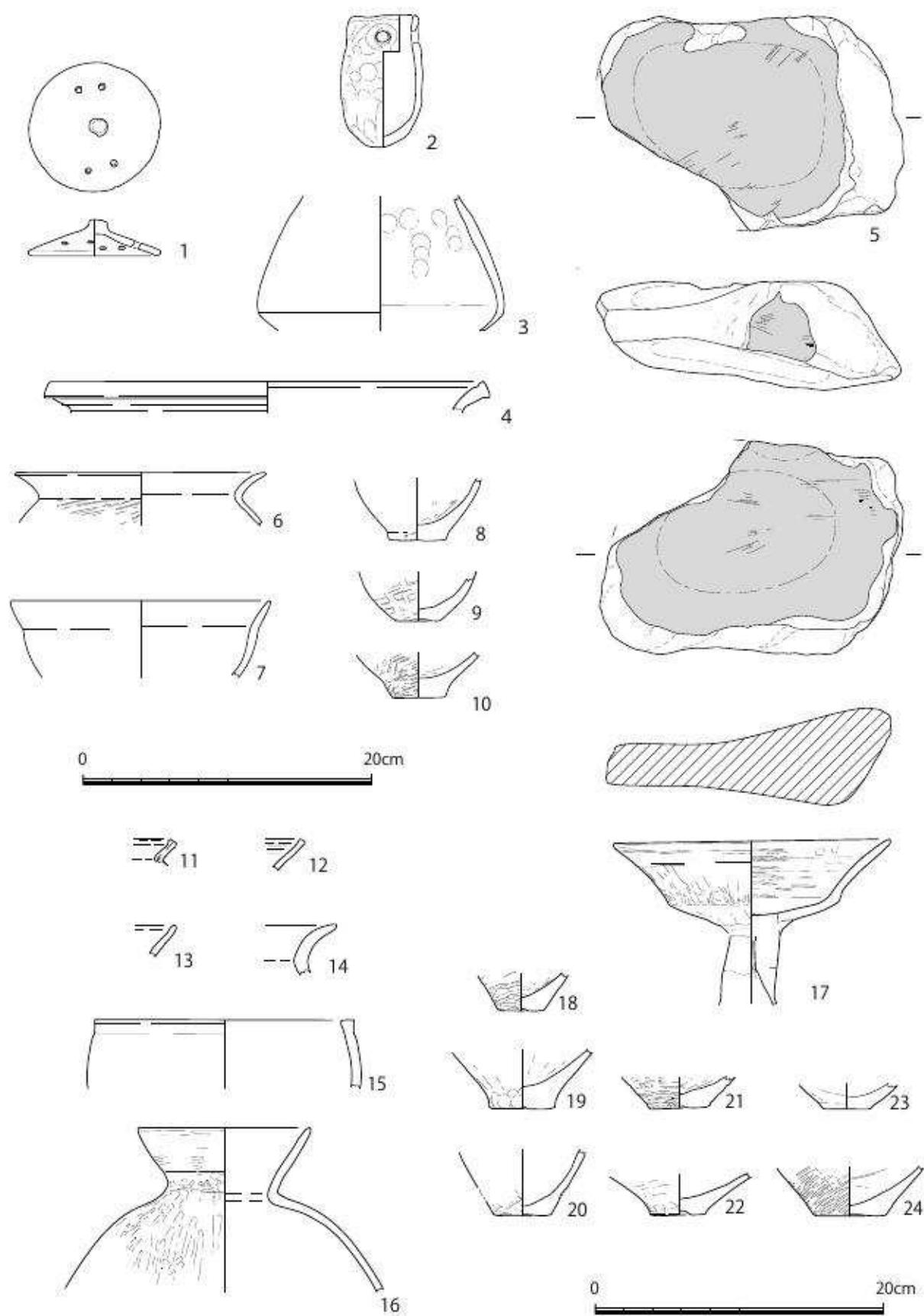
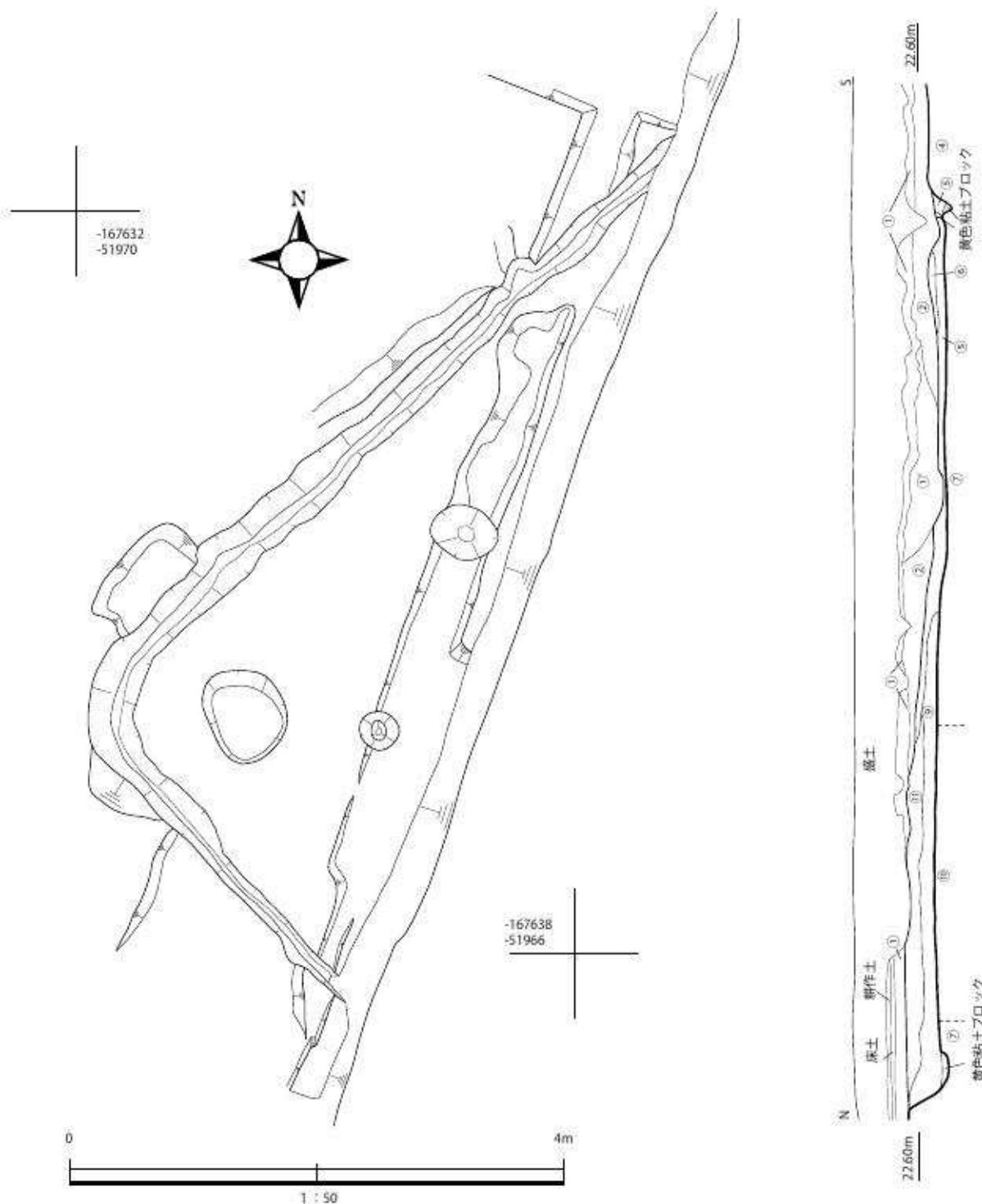


図12 竪穴住居跡65・10・93出土遺物実測図



- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| ① 5Y3/2 オリーブ黒色粘質土（黒灰色土） | ⑥ 10YR4/4 褐色砂質土（竪穴85埋土） |
| ② 10YR3/3 暗褐色砂質土 | ⑦ 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土（竪穴85床） |
| ③ 10YR4/4 褐色砂質土（土器、礫含む 竪穴85埋土） | ⑧ 10YR2/3 黒褐色粘性砂質土（土器、礫多量に含む） |
| ④ 10YR5/6 黄褐色粘性砂質土 | ⑨ 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土（竪穴85埋土） |
| ⑤ 10YR3/2 黑褐色砂質土（竪穴85埋土） | ⑩ 10YR3/2 黑褐色砂礫（竪穴85床） |
| | ⑪ 10YR4/4 褐色砂質土（土器、礫含む 竪穴85埋土） |

図13 竪穴住居跡85平・断面図

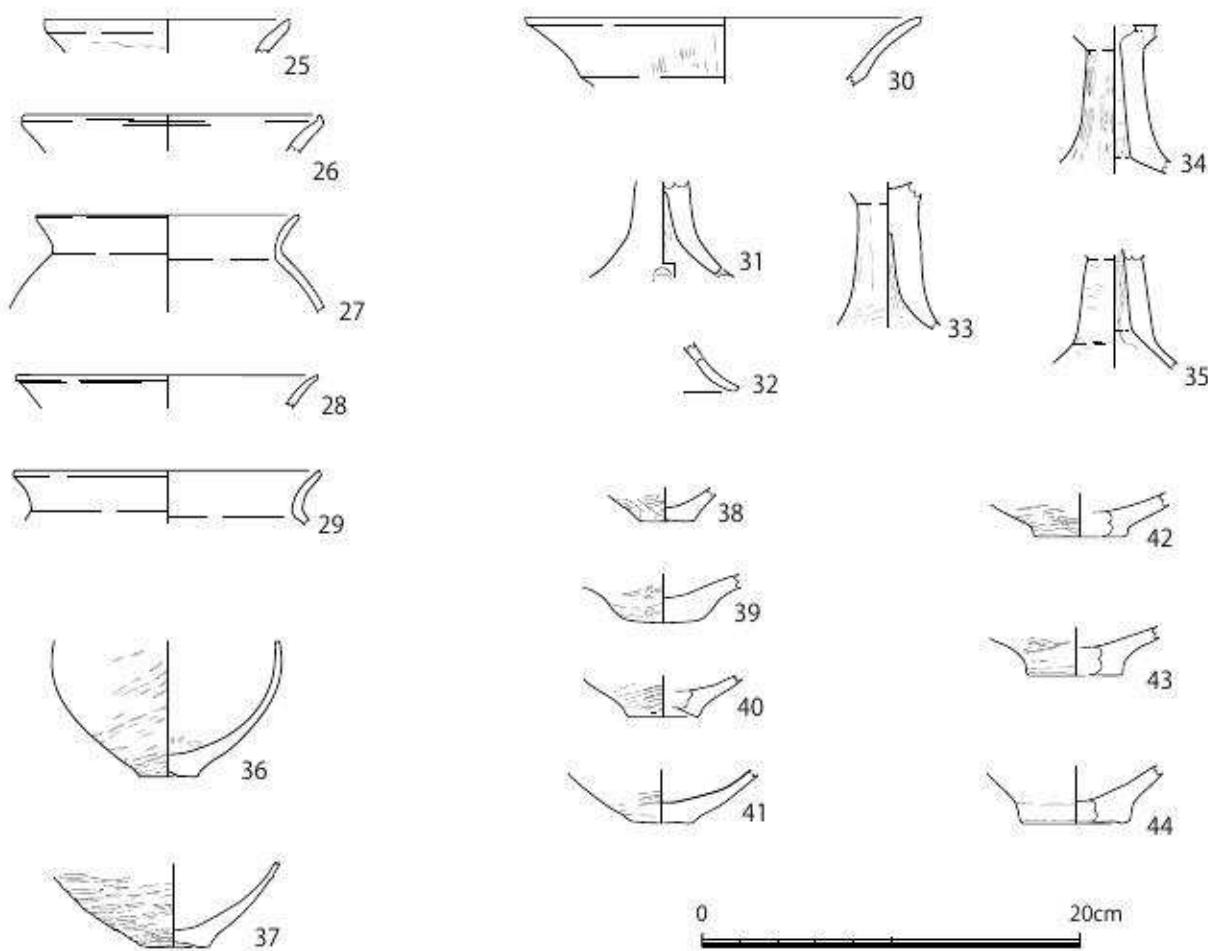


図14 竪穴住居跡85出土遺物実測図

竪穴住居跡 100(図9・22・23・24、図版44)

B・C + 10区にまたがって検出した。住居の大半が、溝70によって削られている。方形プランを呈すると思われるが、規模は不明である。壁溝、柱穴も確認できなかった。しかし、方形プランを有すること、壁が垂直に立ち上ることが、底面が水平であることから竪穴住居跡と考えた。埋土は、褐色シル質砂である。

出土遺物は、住居の埋土の上部から2点出土した。142は土師器の高杯脚柱部である。161は須恵器の杯身である。しかし住居内が、溝70で攪乱されていることを考え合わせるとこれらの土器は溝70に帰属する可能性が高い。

建物跡 1(図15、図版10・11)

A・B - 5 + 0区にまたがって検出した。桁行3間(4.3m)、梁行き1間(3.7m)の東西棟の掘立柱建物である。ピット21・23・25・32・34・36・38・74を柱穴とする建物で、柱穴は直径25~40cmではほぼ円形を呈し、深さは15~30cm、柱痕は直径15cm程度で細い。柱穴の掘方の埋土は黄褐色系の細砂、柱痕は褐色系の細砂である。

出土遺物はピット21・25・34・36・74から弥生土器の細片が出土した。ピット25・36・39からは外面に粗いタタキ目を残す甕の細片が出土した。

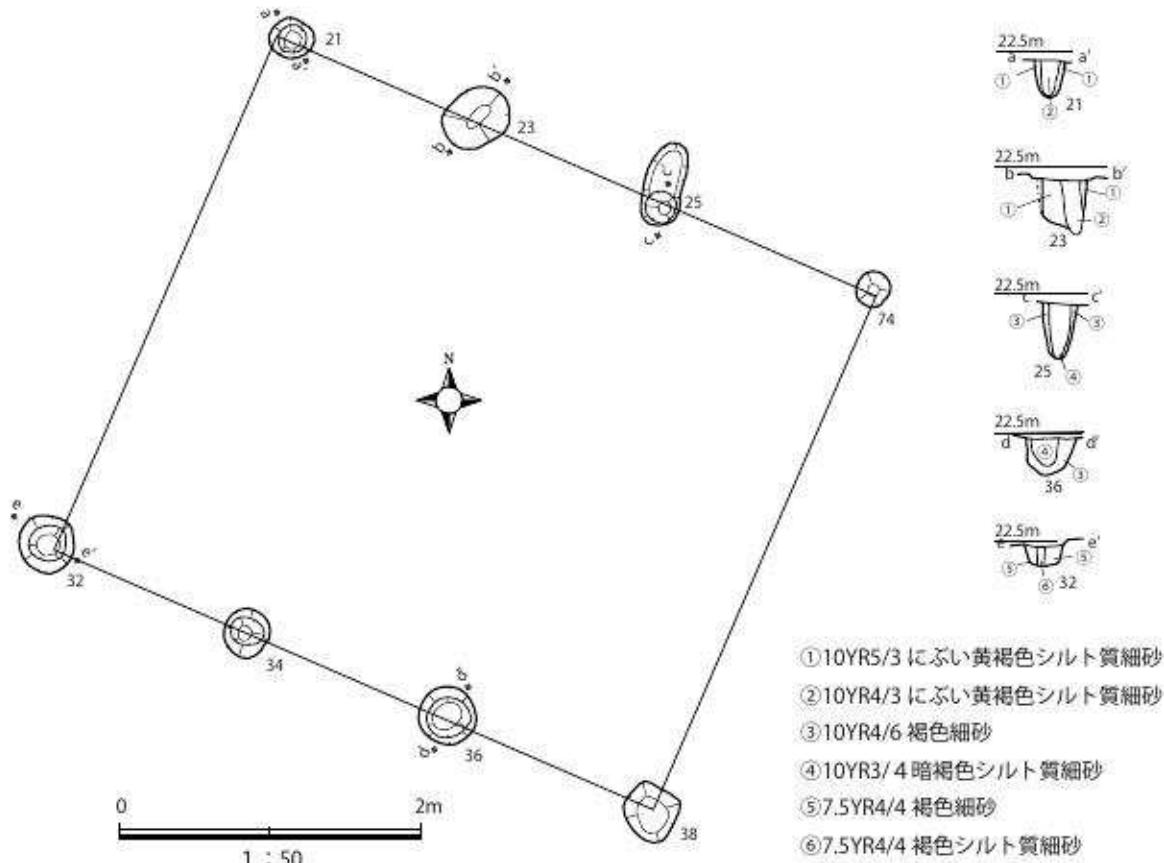


図15 建物跡1平・断面図

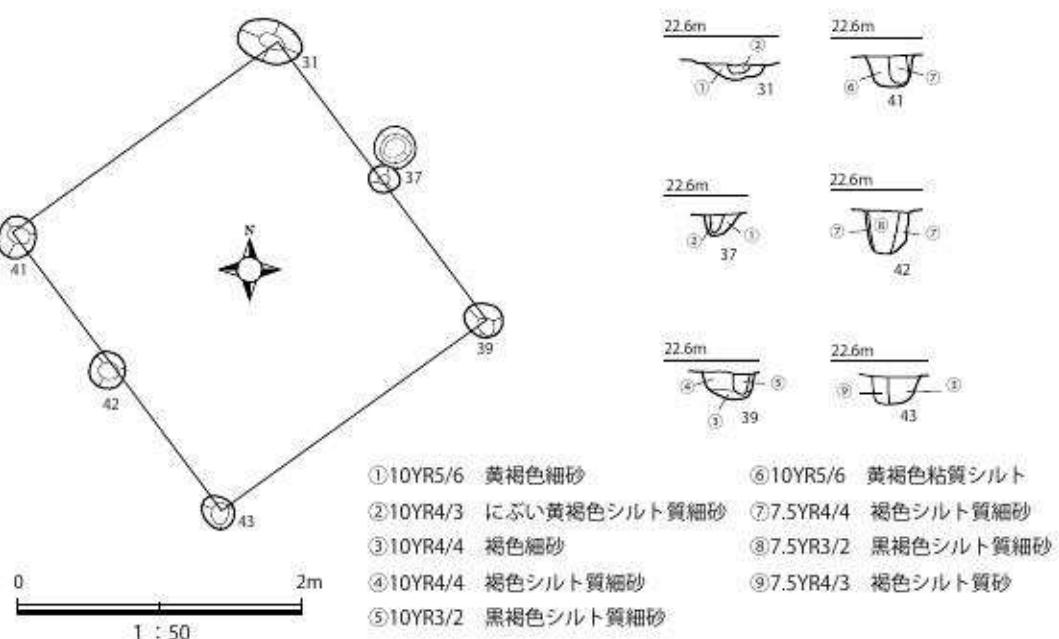


図16 建物跡2平・断面図

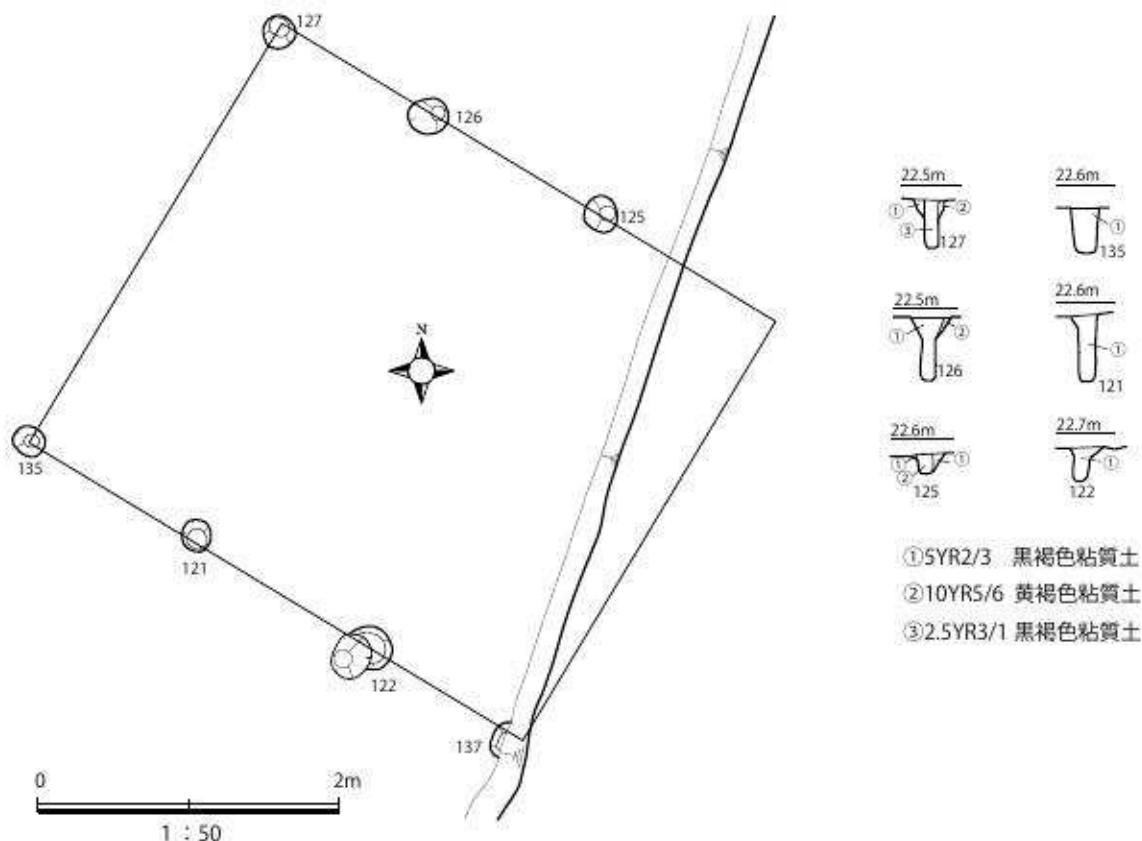


図17 建物跡3平・断面図

建物跡2(図16、図版10・11)

建物跡1の南側でA・B + 5・0区にまたがって検出した。桁行2間(2.4m)、梁行き1間(2.2m)の掘立柱建物で、建物跡1と一部重複するが前後関係は不明である。ピット31・37・39・41・42・43を柱穴とする建物で、柱穴は直径30～40cmでほぼ円形を呈し、深さは15～30cm、柱痕は直径15cm程度で細い。柱穴の掘方の埋土は黄褐色系の細砂、柱痕は褐色系の細砂である。

出土遺物は、ピット39・41・42・43から弥生土器の細片が出土した。ピット39・42からは外面に粗いタタキ目を残し、ススが付着した甕の細片が出土した。

建物跡3(図17、図版10・11)

C + 25・30区にまたがって検出した。桁行3間(3.8m)、梁行き1間(3.2m)の掘立柱建物である。ピット121・122・125～127・135・137を柱穴とする建物で、建物の南東隅の柱穴は調査区外のため不明である。柱穴は直径25～30cmでほぼ円形を呈し、深さは15～40cm、柱痕は建物跡1・2のような明瞭なものはない。掘方の直径とほぼ同様の柱を据えたのかもしれない。柱穴の埋土は褐色系の粘質土である。

出土遺物は、ピット121・122から弥生土器の細片が出土した。外面に粗いタタキ目を残す甕体部の細片が出土した。

ピット51(図9・21、図版51)

竪穴住居跡10の東側、B-5区に位置するピットである。直径は38cm、深さは25cmの円形のピッ

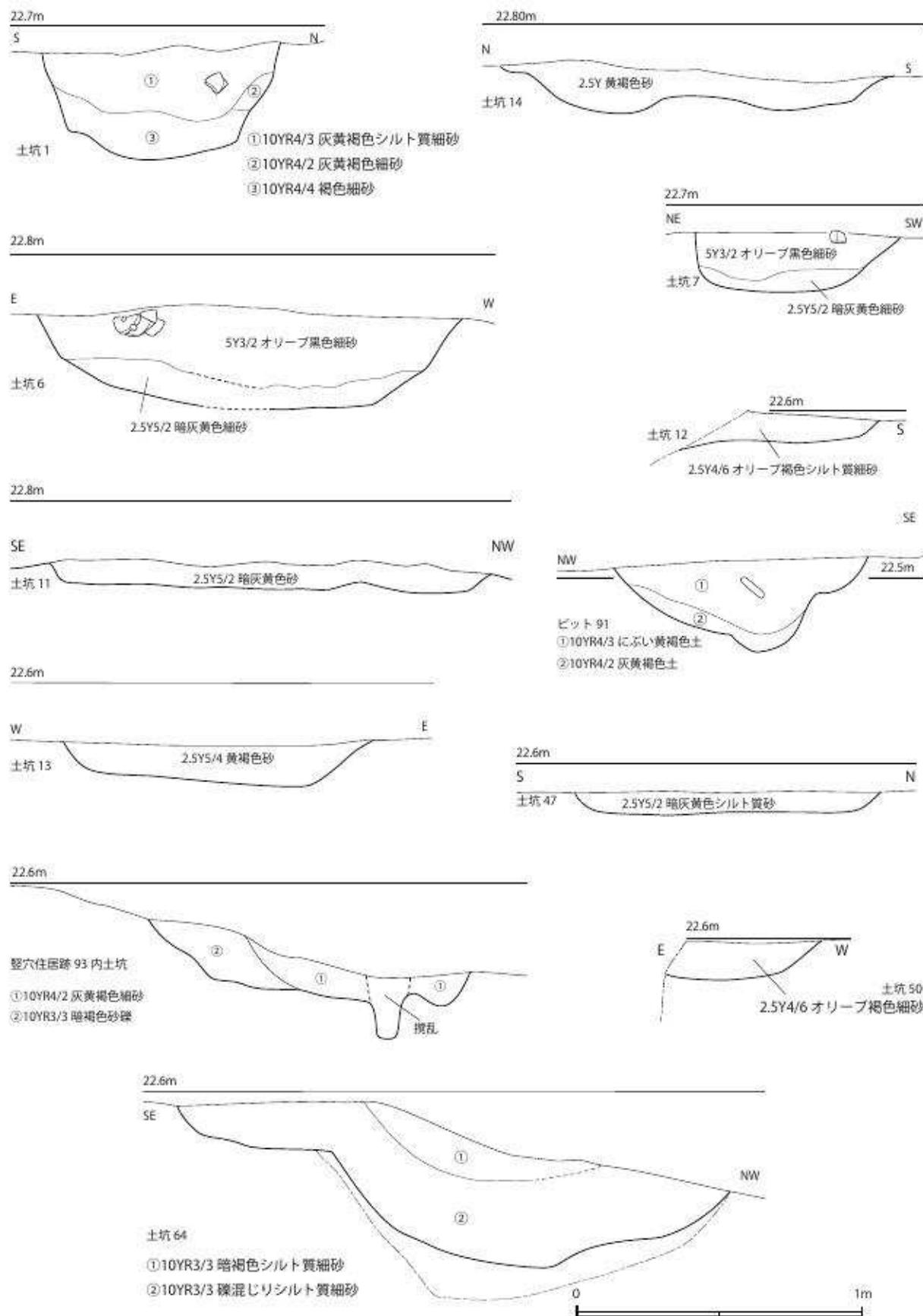


図18 第1区検出土坑断面図

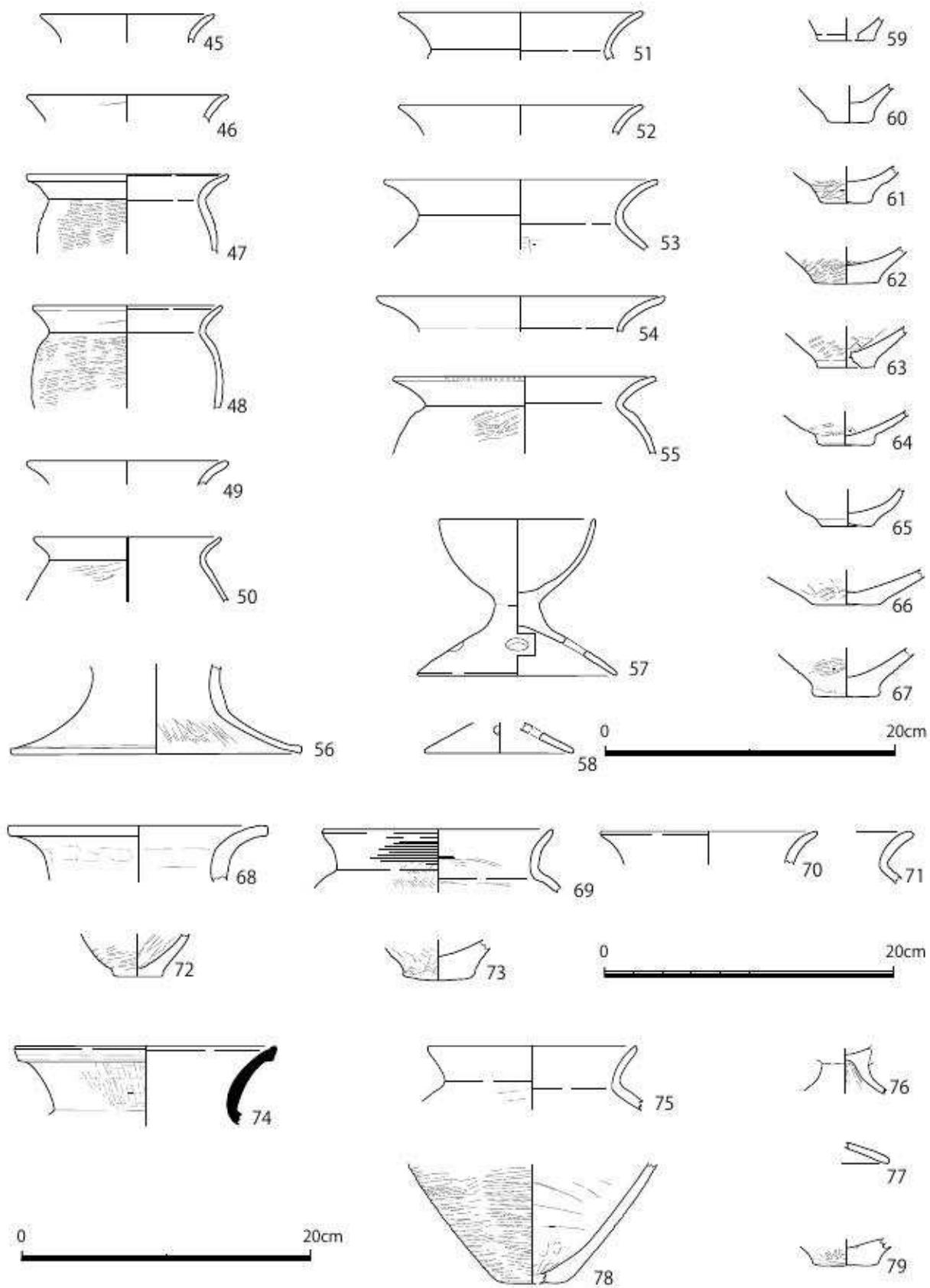


図19 土坑6・7・8・64・107、ピット91出土遺物実測図

トである。埋土は大きく2層に分かれ上層は2.5Y4/4オリーブ褐色細～中砂である。

出土遺物は下層から土器が1点出土した。113は甕の底部で、外面にタタキ目が認められる。

ピット72(図9・21)

建物跡2の北側、A-0区に位置するピットである。直径は25cm、深さは40cmの円形のピットである。

埋土は10YR4/3にぶい黄褐色シルト質細砂である。

出土遺物は土器が1点出土した。116は甕の底部である。

ピット91(図10・18・19、図版17・44・47)

竪穴住居跡65の東側、C-5区に位置するピットである。直径は48cm、深さは10cm程度の円形を

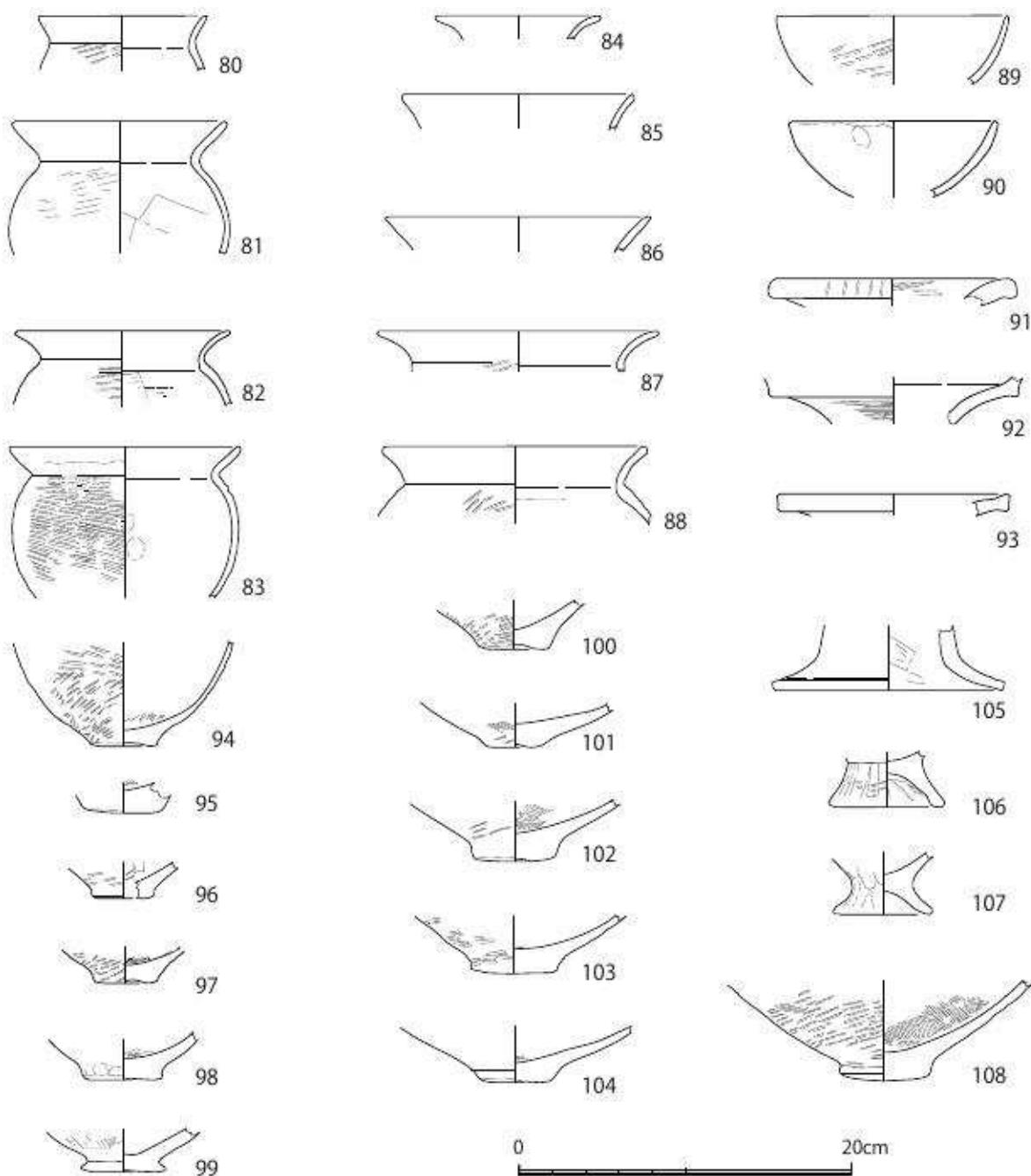


図20 土坑60出土遺物実測図

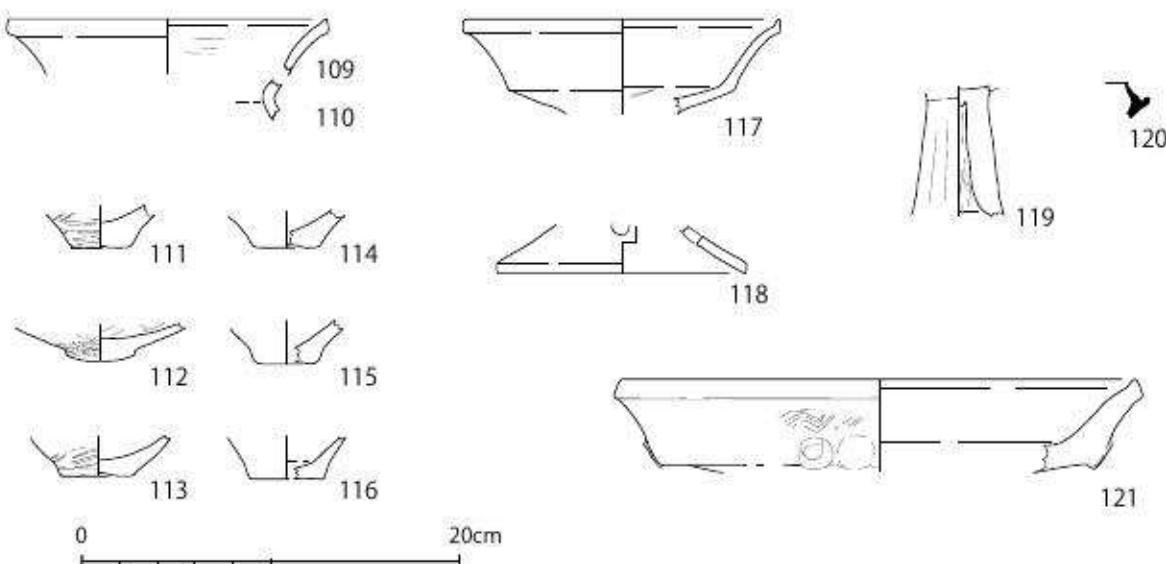


図21 ピット51・72、溝9・97・119出土遺物実測図

呈するピットである。埋土は、上層がにぶい黄褐色シルト質細砂、下層が灰黄褐色土である。遺物の大部分は上層から出土した。

出土遺物は、75は甕の口縁部。78、79は甕の底部である。78は外面にタタキ目が認められ、79は二次焼成を受けてピンク色を呈している。76は高杯である。

土坑1(図9・18・28、図版13)

竪穴住居跡10の西側、A-5区に位置する。楕円形を呈する土坑と思われるが、西壁際で検出した土坑で調査区外に続く。埋土は大きく2層に分かれ、上層は灰黄褐色細砂、下層は褐色細砂である。

出土遺物は、上層より外面に粗いタタキ目をのこす甕の体部や壺の体部と思われる小片を約30点出土したが、図化し得るものはなかった。555はサヌカイト製の石鏃である。

土坑6(図10・18・19、図版12・47)

竪穴住居跡10の南東側、B-C-5区に位置する。方形を呈する土坑である。埋土は大きく2層に分かれ、上層はオリーブ黒色細砂、下層は暗灰黄色細砂である。上層より大量の土器が出土した。大半は小片で一斉に投棄されたような状態で出土した。

出土遺物は45～55は甕の口縁部。47、48、50、55は体部外面にタタキ目が見られる。56は器台である。内外面共に風化が著しいが、脚部内面に若干ハケ調整がみられる。57、58、524、525は高杯である。57は椀型の杯部を有する高杯で、脚部の透かしは円形で4か所である。59～67は甕の底部である。61～64、66、67は外面にタタキ目をのこす。また、51～58は風化が著しいが、色調は明橙色を呈し、胎土もよく似ている。

土坑7(図10・18・19、図版12・51)

土坑6の南側、B-5区に位置する。楕円形に近い不定形である。埋土は上下2層に分かれ、土坑7とほぼ同じである。上層に土器が比較的多く含まれていることも土坑7と同様である。同一の土坑の可能性もあるが、検出時には異なった遺構として捉え、土坑7が切っている。

出土遺物は、68は甕の口縁部である。72は甕の底部、外面にタタキ目がみられる。

土坑8(図9・図版13・48)

豎穴住居跡10の西側、A-10区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長辺約1.5m、短辺約1m、深さ40cm程度で、埋土は1層で5Y3/2オリーブ黒色細砂である。

出土遺物は、69～71は甕の口縁部である。73は甕の底部である。526～531は甕の体部である。いずれも外面に粗いタタキ目を残す。70、71、531、532の色調は明橙色を呈し、砂粒を多く含むよく似た胎土で、接合関係にはないものの同一個体の可能性がある。

土坑11(図9・18、図版14)

調査区の北部B-15区に位置する。平面形は四角形を呈し、土坑の底は平坦である。埋土は暗灰黄色砂である。

出土遺物は、弥生土器と思われる細片が8点出土したが、図化し得るものはなかった。

土坑12(図9・18、図版14)

調査区の北部C-15区に位置する。平面形は楕円形を呈していると思われるが、北側を攪乱を受けて欠損している。埋土はオリーブ褐色シルト質細砂である。

出土遺物は、弥生土器の細片を1点出土した。

土坑13(図9・18、図版14)

土坑12の南東、調査区の北部C-15区に位置する。平面形はほぼ円形を呈していると思われるが、北側を攪乱を受けて欠損している。埋土は黄褐色砂である。

遺物は、出土しなかった。

土坑14(図9・18、図版14)

土坑13の東、調査区の北部C-15区に位置する。平面形は楕円形あるいは長方形を呈していると思われるが、北側を攪乱を受けて欠損している。埋土は黄褐色砂である。

遺物は、出土しなかった。

土坑15(図11)

豎穴住居跡10の南隅、B-5区に位置する。平面形は不定型で豎穴住居跡10を切る。深さは10cm程度で浅く、底は平坦である。埋土は暗灰褐色砂質土である。

遺物は、かなり風化した須恵器の小片が1点出土した。

土坑28(図9、図版13)

建物1の東部、B-5+0にまたがって位置する。建物1と重複関係にあるが、前後関係は不明である。平面形は四角形を呈し、深さは5cm程度で浅い。底は比較的平坦である。埋土はにぶい黄褐色細砂である。遺物は出土しなかった。

土坑47(図10・18、図版16)

豎穴住居跡65の南、C+0区に位置する。平面形は円形に近い不定形、直径40cm前後である。深さは10cm程度で、底は平坦である。埋土は、暗灰黄色シルト質砂である。

出土遺物は弥生土器の小片を4点出土した。タタキ目は認められないが時期は不明である。

土坑48(図10、図版16)

豎穴住居跡65の南、C+0区に位置する。平面形は長方形、長辺65cm、短辺50cmである。深さは

15cm程度で、底は平坦である。埋土は土坑47同様、暗灰黄色シルト質砂である。

遺物は出土しなかった。

土坑50(図9・18)

C-10区に位置する。攪乱土坑に削られて、平面形は不明である。残存部分の深さは15cm程度で、埋土は10YR4/4褐色シルト質砂である。遺物は出土しなかった。

土坑60(図9・20、図版15・49・50)

豊穴住居跡10の北側に接して、B-10区に位置する。平面形は不定形で人為的なものではなく自然の窪地に土器片を多量に投棄した可能性もある。深さは、最も深い所で30cm程度ある。埋土は2層に分かれ、上層は10YR5/3にぶい黄褐色細砂、下層は10YR3/3暗褐色シルト質細砂である。土器は上層に多く含まれていた。

出土遺物は80～88は甕の口縁部あるいは口縁部から体部である。体部の残るもの(80～83・87・88)は外面に粗いタタキ目をのこす。89、90は外形が内湾する鉢である。89は外面にタタキ目をのこす。91～93は壺の口縁部である。91は口縁端部の外面に簾状文を施す。92は複合口縁をもつ壺であるが、上部を欠損している。頸部外面には、横方向のミガキが認められる。94～98、100、102、103、108は甕の底部あるいは底部から体部である。体部の残ものは外面にタタキ目が見られるし、底部のみでも97、100、103のように底部裾までタタキ目をのこすものもある。外面にススが付着するものもある。99、101、104は外面にタタキ目が認められないこと、体部が外に開くことなどから壺の底とした。99は外面にミガキを施し、101はハケ調整が残る。105は器台の脚部である。内面にハケ調整が認められる。106、107は製塙土器の脚台である。106は外面にタタキののち粗いナデを施す。内面にはハケ調整の跡が残る。107は外面に粗いナデがみえる。

土坑61(図9、図版17・50)

建物跡2の西、A-0区に位置する。平面形は楕円形を呈すると思われるが、調査区外にのびるため不明である。埋土は2層に分かれ、上層は10YR5/2灰黄褐色細砂、下層は10YR3/6明黄褐色細砂である。下層には土器が多く含まれる。

出土遺物は、536～542は全て土師器の高杯である。いずれも風化が著しく、外面の調整は残っていない。

土坑63(図9、図版14)

土坑12の南東、調査区の北部C-15区に位置する。平面形は溝状に細長い楕円形を呈していると思われるが、北側を攪乱を受けて欠損している。埋土は10YR4/2灰黄褐色疊混り細砂である。

遺物は、弥生土器の小片が20片ほど出土した。そのうち10数片に外面に粗いタタキ目をのこす甕の体部であった。図化し得るものはない。

土坑64(図9・18・19、図版14・51)

土坑12の北西、調査区の北部B-15区に位置する。平面形は不定形であるが、北西側を攪乱を受けて大きく欠損している。深さも50cm以上の大型の土坑であったと想像できる。埋土は大きく2層に分かれ、上層は10YR3/3暗褐色シルト質細砂、下層は上層に疊が多く含まれる。

出土遺物は、下層から弥生土器の小片が数点出土した。他に須恵器が1点出土した。74は甕の口縁

部である。口縁端部は外側に肥厚している。

土坑107(図9・19・28、図版17・51)

溝70の南部、B + 15区に位置する。上面、側面を後世の擾乱で大きく削平されていて、元來の形状は全く不明である。土坑の深さは5cm程度残存している。埋土は、10YR3/3暗褐色シルト質砂礫である。

出土遺物は、土器は小片を数点出土したが、図化できた77は土師器の高杯脚部1点である。535はサヌカイト製の錐である。端部は欠損している。

土坑111(図9、図版18)

溝70の右岸、B + 10に位置する。方形プランを呈する土坑と思われるが、溝70によって削られ全容は不明である。深さは18cmである。壁が垂直に立ち上ることや底が平坦なことから東側に位置する竪穴住居跡100であることも検討したが、若干方向が異なることや底の高さにも差があることから別の土坑と考えた。埋土は、10YR4/6褐色中砂である。遺物は出土していない。

土坑115～117(図9、図版20)

調査区の南端、A + 40区に位置する。いずれも楕円形の土坑で、深さは土坑115・116は20cm程度、土坑117は40cmとやや深い。土坑の埋土はいずれも黒褐色系の砂礫層を埋土である。遺物は出土しなかった。

溝9(図7・10・21、図版55)

竪穴住居跡65に重複し、C - 5 + 0区に位置する。幅50cm、深さ20cm程度の東西方向の溝で竪穴住居跡65を切っている。埋土は暗褐色シルトである。

出土遺物は、109は甕の口縁部、110は甕の頸部、111、112、114、115は甕の底部で、111、112は外面に粗いタタキ目が認められる。117は土師器の高杯の杯部、118は高杯の脚部で円形の透かしがみえる。

溝70(図9・22～24、図版18・19・51～54)

調査区のほぼ中央付近、A + 5 + 10・B10・C + 10区に位置する。東西方向の直線的な溝である。溝は東側では2段に掘削されていて、上段の溝幅は東端では2.5m程度、中央のトレーニング付近では3.7mである。西端では上段のみであるが溝幅は約3mである。上段の深さは、東端では50cm程度で、底の高さは22.1m、トレーニング付近では深さは35cm、底の高さは22.2m、西端では深さは60cm程度、底の高さは約22.0mである。下段は東端では溝幅1.6m、深さ約40cmで、トレーニング付近では溝幅1m、

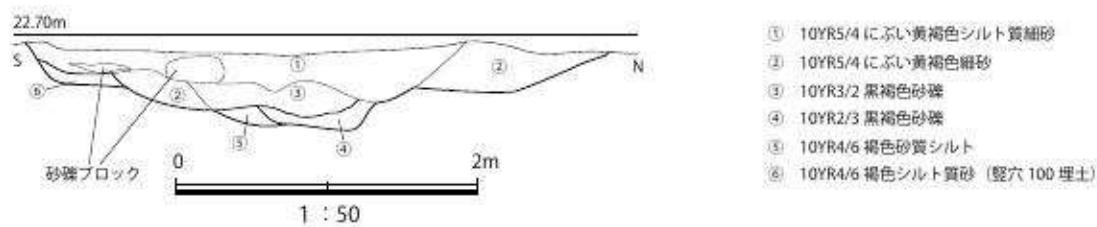


図22 溝70断面図

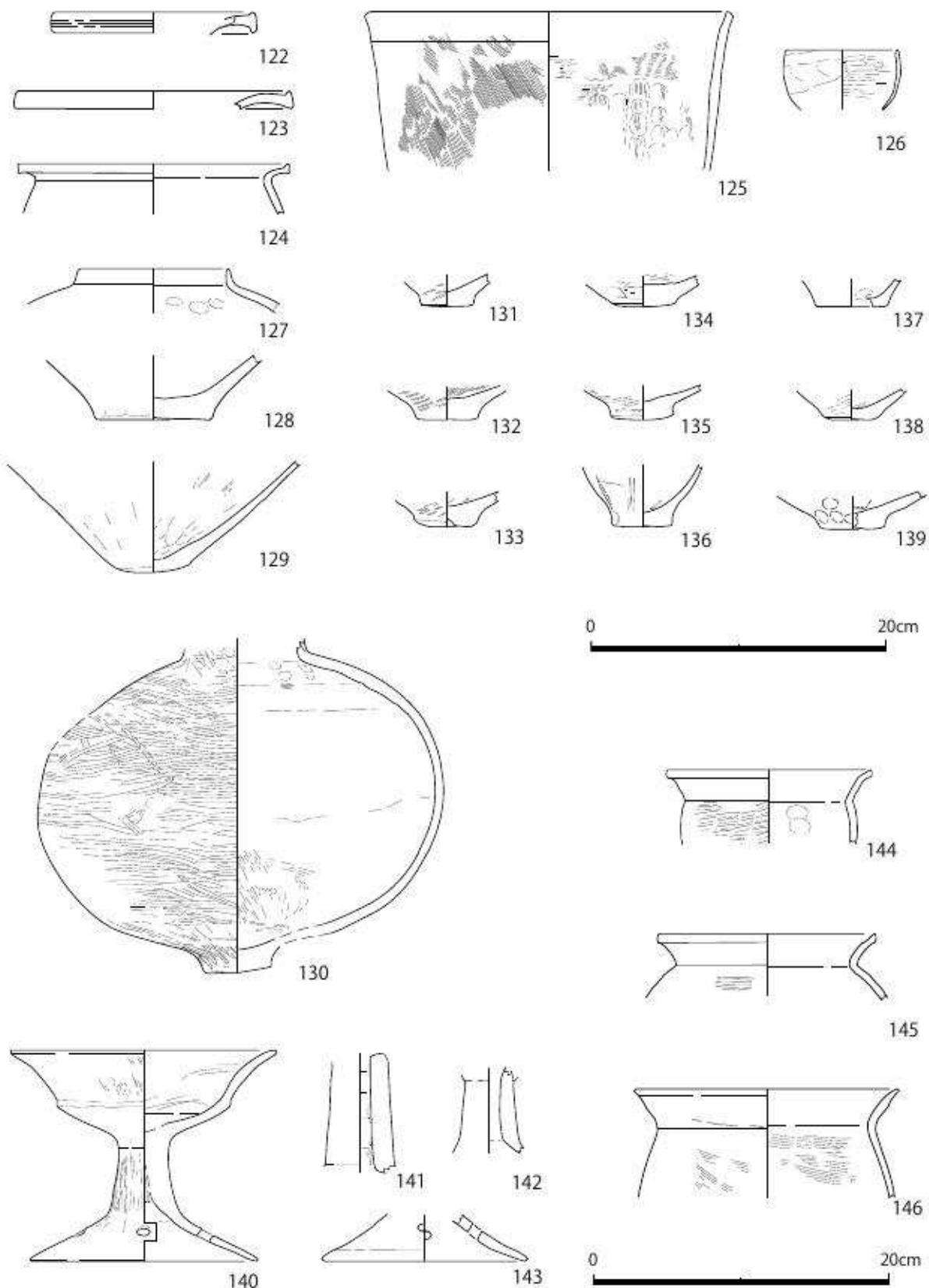


図23 溝70出土遺物実測図(1)

深さ20cmで東端付近ほど明瞭なものではない。ただし、溝70のベースは東端から西へ約5mはシルト層であるが、西に向かって細砂から砂礫層に変化する。このように溝70のベースがシルトから砂礫に変化することが、溝の形状の変化にも影響していると考える。溝70の埋土は砂あるいは砂礫層で、自然堆積の状況を示している。

出土遺物は、弥生時代中期、弥生時代後半から古墳時代前期、古墳時代後期から終末期の土器が大量に出土した。器種別にみると122、123は弥生時代中期の広口壺である。122は口縁部外面に凹線文がみえる。124は弥生土器の甕である。125は土師器の盤である。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかにつまみ上げている。内外面共にハケ調整を施す。色調は内外面共に明橙色である。128は弥生時代中期の壺の底部である。内外面共に風化が著しい。129、131～139は弥生土器の底部である。131～135、138には外面にタタキ目が認められる。126は椀型の製塙土器である。外面は淡灰乳白色、内面は淡灰赤色を呈し、内外面ともケズリで非常に薄く仕上げている。127は土師器の短頸壺である。内外面共に摩滅が激しく、調整は不明である。130は土師器の壺である。頸部から口縁部は欠損している。体部外面は横方向のミガキを施す。内面はナデによって仕上げている。

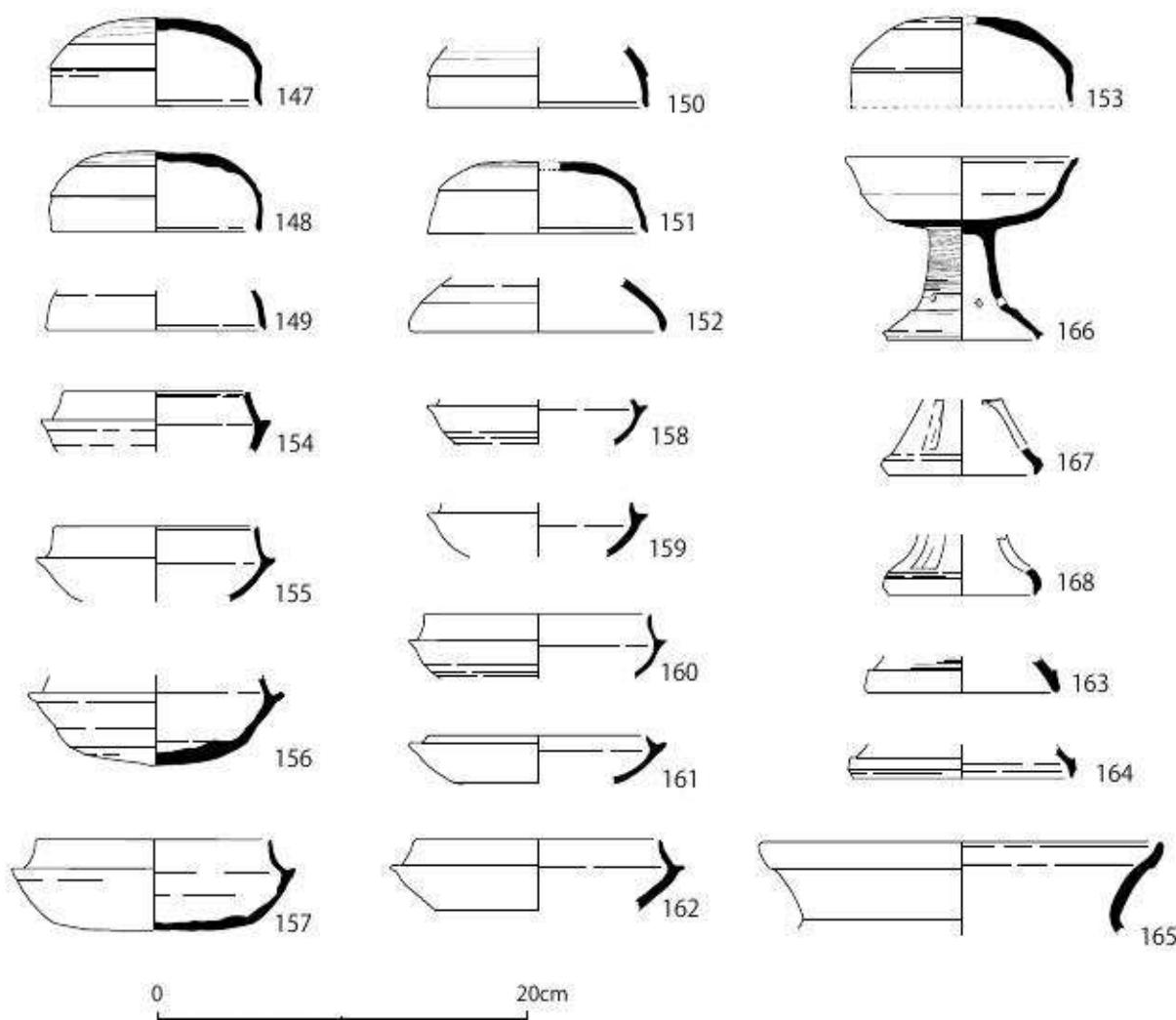


図24 溝70出土遺物実測図(2)

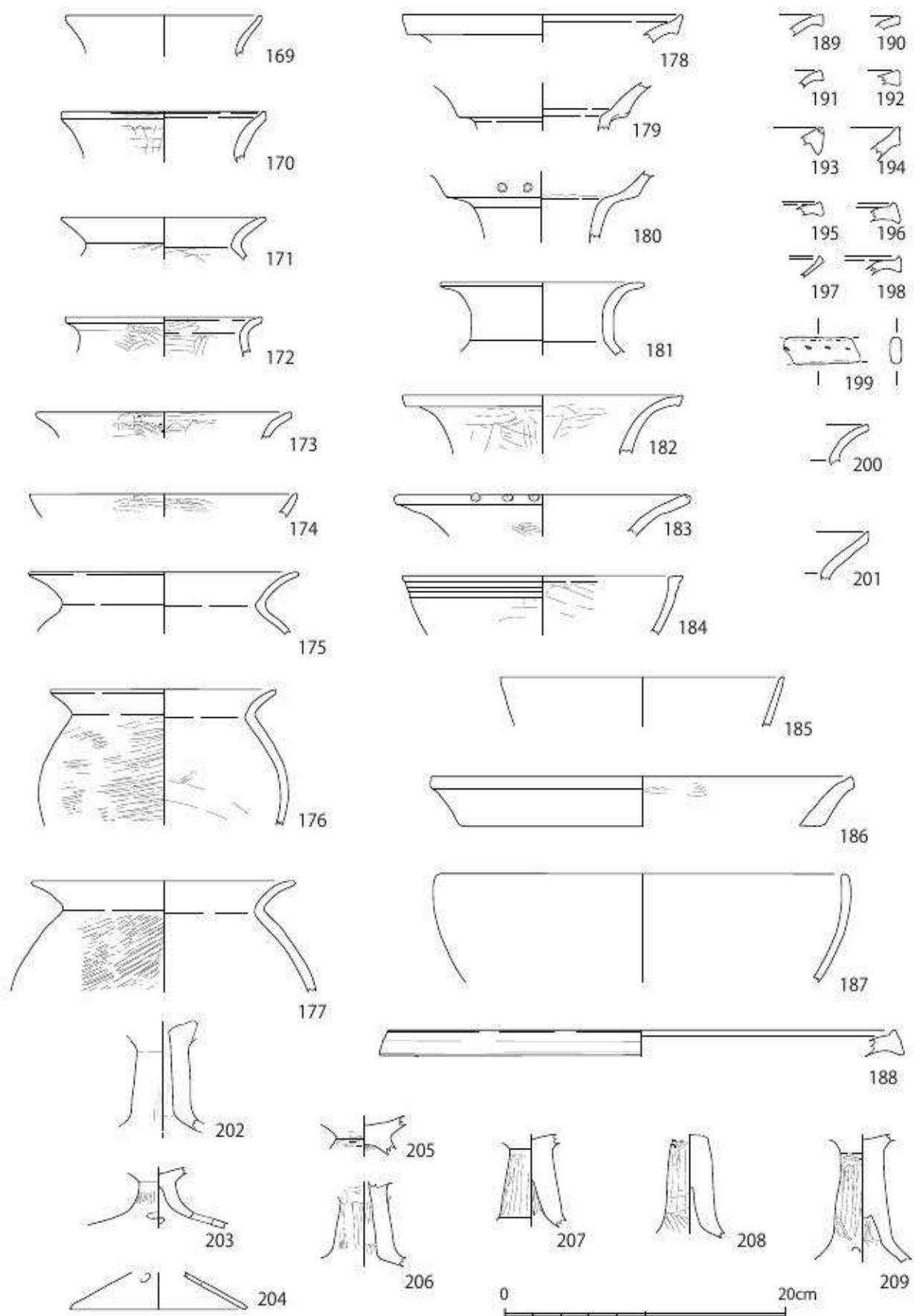


図25 黒灰色出土遺物実測図(1)

140～143は土師器の高杯である。144、145は弥生時代後期後半の時期の甕で、外面に粗いタタキ目をのこす。147～168、543、544は須恵器である。147～153は杯蓋、154～162は杯身である。161は口縁部の立ち上がりが短く、出土した須恵器の中では最も新しい様相を示す。163、164は高杯の脚部、165は甕の口縁部である。166～167は高杯である。166は無蓋高杯で、脚部外面にカキ目が残る。透かしはいびつな円形を呈し、外上方から斜め方向に、棒状のものを突き刺して穿っている。透かし孔の配置は、対角に四方向を意識しているが、3ヵ所しか穿っていない。167、168は方形の透かし孔をもつ脚部である。543は甕の体部で、外面に自然釉がかかる。544は把手である。把手の内側に切り込みを入れて先端を上方に向いている。

溝97(図9・21、図版18・51)

竪穴100の南、C+10区に位置する。幅30cm、深さ20cm程度の小規模な溝である。埋土は茶灰色シルトである。

出土遺物は、須恵器の杯身120の小片を1点出土したが、上部から出土したもので溝70が氾濫した際に紛れ込んだ可能性がある。

溝119(図9・21、図版20・51・55)

第1区の南端、A・B+40に位置する。検出長約7m、幅1.2～1.4m、深さ20cm程度、埋土は

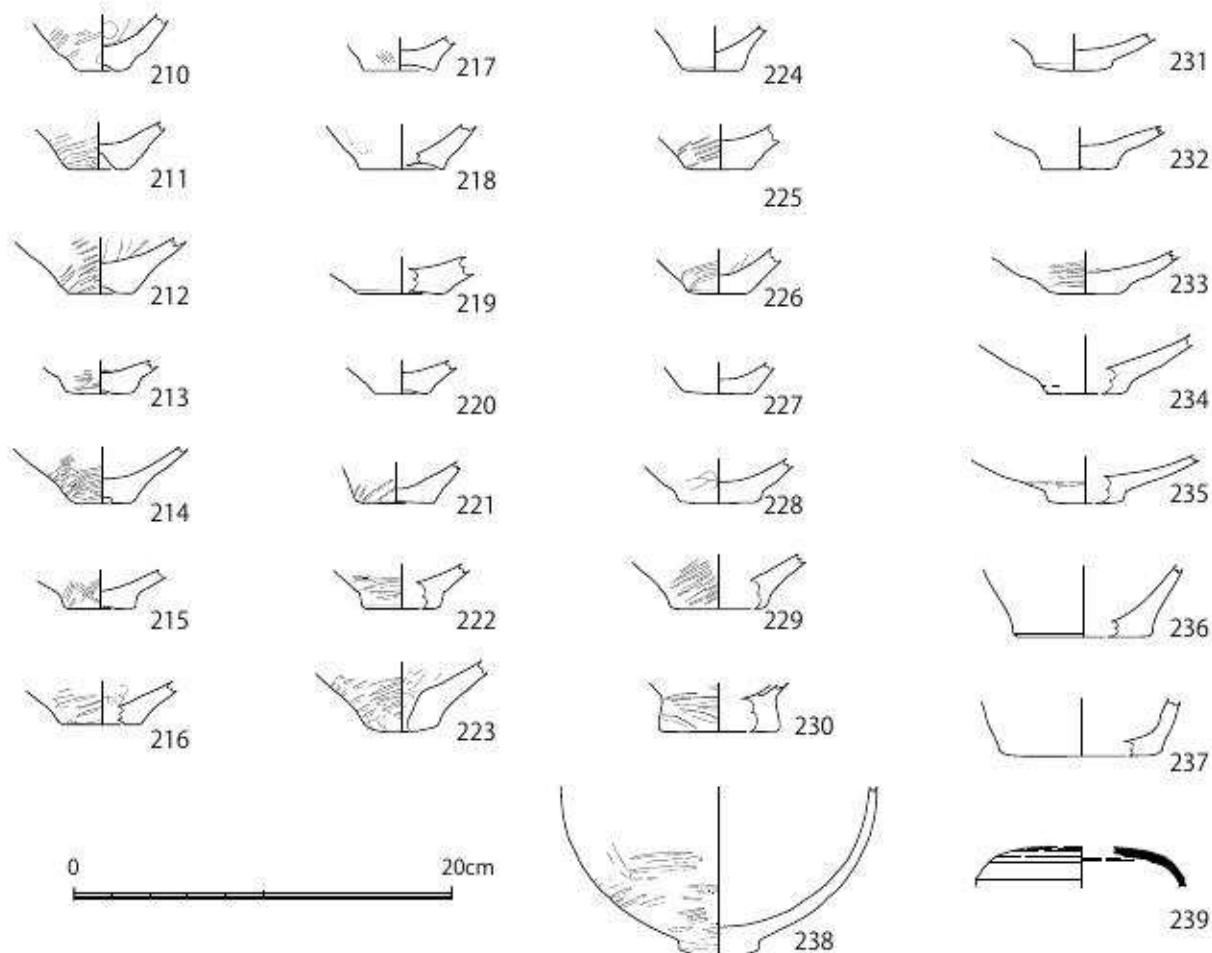


図26 黒灰色出土遺物実測図(2)

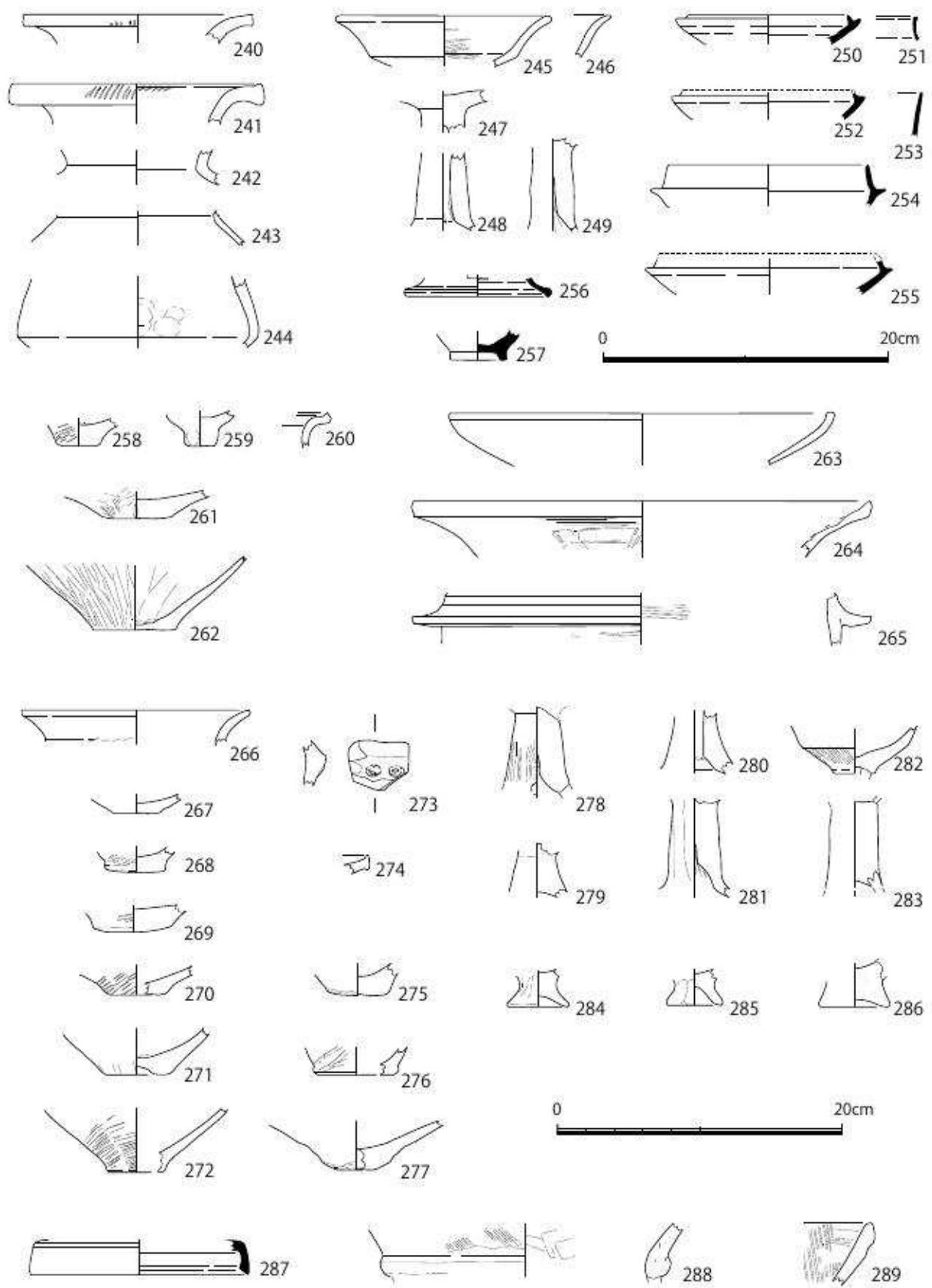


図27 灰色土・床土出土遺物実測図

10YR3/1 黒褐色砂礫の東西方向の深い溝である。西端は調査区外にのびるため不明である。溝119の東にみられる溝114も同一のものかもしれない。埋土はよく似ている。

出土遺物は少なく、土師器の高杯脚柱部119と壺の口縁部121を出土したのみである。121は口縁部外面に波状文と円形浮文が認められるが、風化が激しく調整は不明である。全体に器壁は厚く重量感のある土器で色調は暗茶褐色を呈している。

黒灰色土出土の土器(図25・26・28、図版56・57)

黒灰色土は、A・B - 5 - 10区付近およびC + 15 + 20付近に認められる遺物包含層である。豊穴住居の廃絶後、住居跡とその周辺にできた窪地に多量の土器等が投棄されたことによるものかもしれない。土坑60も不定形であることを考慮すれば、黒灰色土の一部と考えられる。

出土遺物は169～239、545、546は黒灰色土出土の土器、554はサヌカイト製の石鏸、556は同じく不定形刃器である。557は粘板岩製であるが用途不明の石器である。169～177、190、197、200、201は土師器あるいは弥生時代後期後半の甕である。169、170は内外面共に薄いやピンク系の乳白色を呈し、口縁端部をつまみあげている。190、197も端部をつまみ上げるタイプと思われるが、小片のため不明な部分が多い。171、173～177は明橙色を呈し、171、176、177の体部外面には粗いタタキ目がみられる。172は短く外反する口縁部をもつもので、外面にはミガキがある。178～183、188、189、191～196、198は壺の口縁部である。178、182、183、188、189、191～196、198は口縁部外面を拡張する。183は面をもつ口縁部外面に円形浮文を貼り付ける。179、180、186は二重口縁を有する壺と思われる。180は外面に竹管文を施す。181は直立する頸部から外に開く口縁部をもつ壺である。内外面共に風化が激しく調整は不明である。199は把手部分と思われるが、外

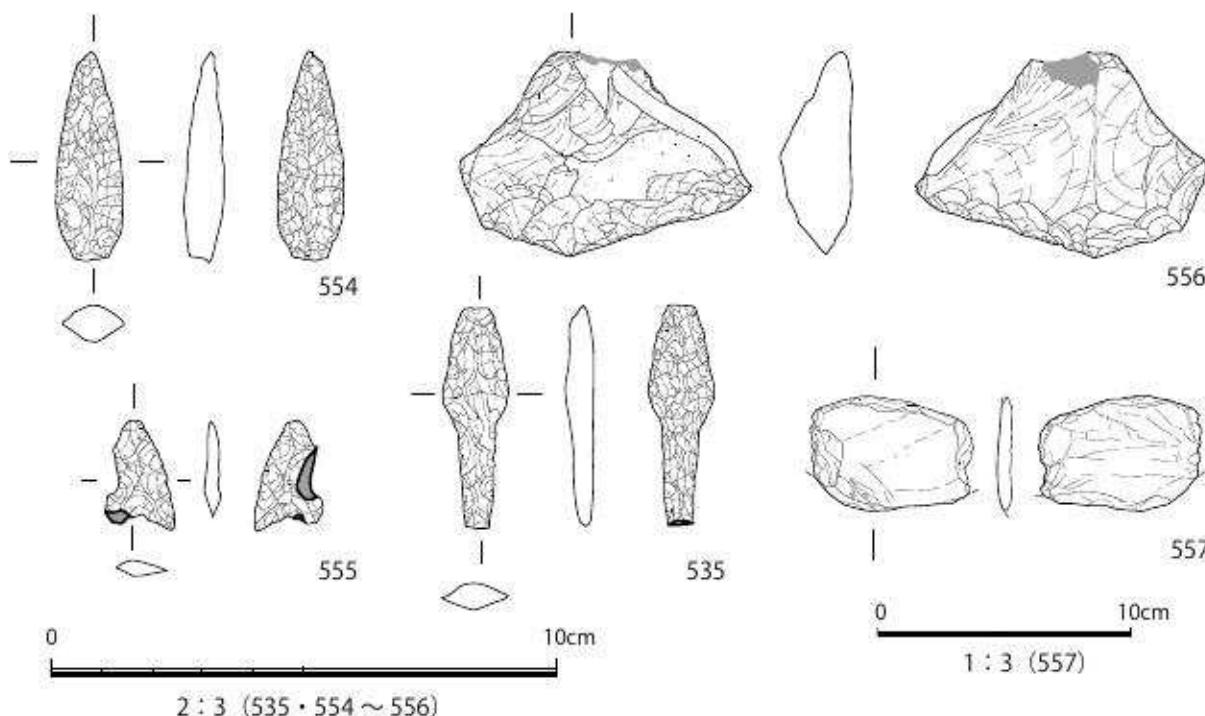


図28 第1区出土石器実測図

面に櫛の先でついたような小さな穴が見られる。184、185は口縁部を上方に開く鉢である。184は口縁端部に面をもち、外面に二条の凹線文が巡る。風化が激しく調整は不明である。187は土師器の鉢である。内外面共に風化が激しく、調整は不明である。202～209は土師器の高杯である。206～209の脚柱部外面にはミガキを施す。203、204には円形の透かし孔が認められる。210～238は底部片である。223は甌の底部で、底部中央に焼成前の穿孔がみられる。その他の底部は、甌あるいは壺と考えられる。236、237は弥生時代中期の壺底部の様相を示す。239は須恵器の杯蓋である。黒灰色土に含まれる大量の土器な中で、唯一の須恵器である。

灰色土及び床土出土の土器(図27・図版57)

灰色土は調査区北部の全面に認められる遺物包含層で、上面に鍬跡が認められたことから中世後期以降の耕作土である。

出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器など下層に残る遺跡群の様相を示していることから、耕作土として開墾したと考えられる。240～244は壺である。240、241は口縁部である。240は口縁部外面の下端に刻み目がみられる。241は口縁部の内側から外面にかけて櫛状の工具を押し当てた櫛歯文がみられる。242、243は頸部である。244は体部片である。いずれも風化が激しく調整は不明である。245～249は土師器の高杯である。258、261は外面に粗いタタキ目を残す甌の底部である。259は底部であるが、小さく不安定である。260は弥生土器甌の口縁部である。262は外面にミガキを施す壺の底部である。250～255は須恵器の杯身である。256は須恵器の高杯脚部である。方形の透かしがみえる。257は壺の高台である。263は土師器鉢の口縁部である。264は土師器甌の口縁部と思われるが、調整は内面が剥離しているため不明である。265は土師質土器の羽釜である。外面にススが付着している。

床土は明橙色粘土あるいは粘質土で、現代の耕作土の一部であるが、土器を多く含んでいるので主要なものだけピックアップして報告する。266は甌の口縁部である。267～272、275～277は底部である。267、271、277は壺、その他は外面に粗いタタキ目が認められ甌である。273、274は壺口縁部で、273は口縁部外面に円形浮文がみられる。278～283は土師器の高杯である。284～286は製塩土器の脚台である。いずれも2次焼成を受け、外面の色調は薄いピンク系の白灰色を呈する。287は須恵器の壺の蓋と考えられる。1点だけであるが、288は朝顔形埴輪の小片である。外面にハケ目による調整、内面に粗いナデが認められるが、風化は激しく全体は丸みを帯びている。289は土師質土器の摺鉢の口縁部である。内面に摺目が認められる。

参考文献

- 大阪府教育委員会 2012『和泉寺跡・府中遺跡』 大阪府埋蔵文化財調査報告2011-3
- 大阪府教育委員会 2013『和泉寺跡・府中遺跡Ⅱ』 大阪府埋蔵文化財調査報告2012-5
- 大阪府教育委員会 2015『和泉寺跡・府中遺跡Ⅲ』 大阪府埋蔵文化財調査報告2014-5
- 大阪府教育委員会 2018『府中遺跡』 大阪府埋蔵文化財調査報告2017-3

第2節 第2区の調査

第2区は平成27・28年度に調査を実施した調査区のうちA・B・C区とD・E区にはさまれた範囲である。将棋の駒に類似した形状の五角形の調査区で、広さは南北約59m、東西約20m、面積は約1200m²である。

調査は掘削土置き場を確保するため、中央で南北に分け、南側をS区、北側をN区とした。遺構の番号はS区が1～、N区は101～から番号を付した。本文では調査で付した遺構番号をそのまま使って記述する。

第1項 基本層序(図29、図版40)

この地区の地表面は標高23.1m前後である。細かく分層した北西壁で説明する。①層(盛土)の上面は標高22.9～23.0mで、層厚は0.2m程度である。③層は床土で、層厚は0～2cmである。

④層の褐色土は⑤層灰黄色土が酸化したものであろう。⑥層は黄色の粗い砂層で、調査区内で部分的に観察された。⑦層(明褐色～黒褐色土)は調査の際に鍵となった堅く締まった土で調査区全体に広がり、鋤痕や里道の側溝が観察される。⑧層や⑨層上面で少量であるが、13世紀頃の瓦器の小片が出土している。⑩層(にぶい黄褐色微砂～シルト)、⑪層(にぶい黄褐色土)、⑫層(明褐色砂～砂礫)、⑬⑭層(褐灰色系の土)は砂礫を多く含む層で、現在調査区の南約600mに位置し、西北西流して大阪湾に注いでいる横尾川の旧河道であった時に堆積した土砂であろう。古墳時代中期頃には流路が移動して、墓域と

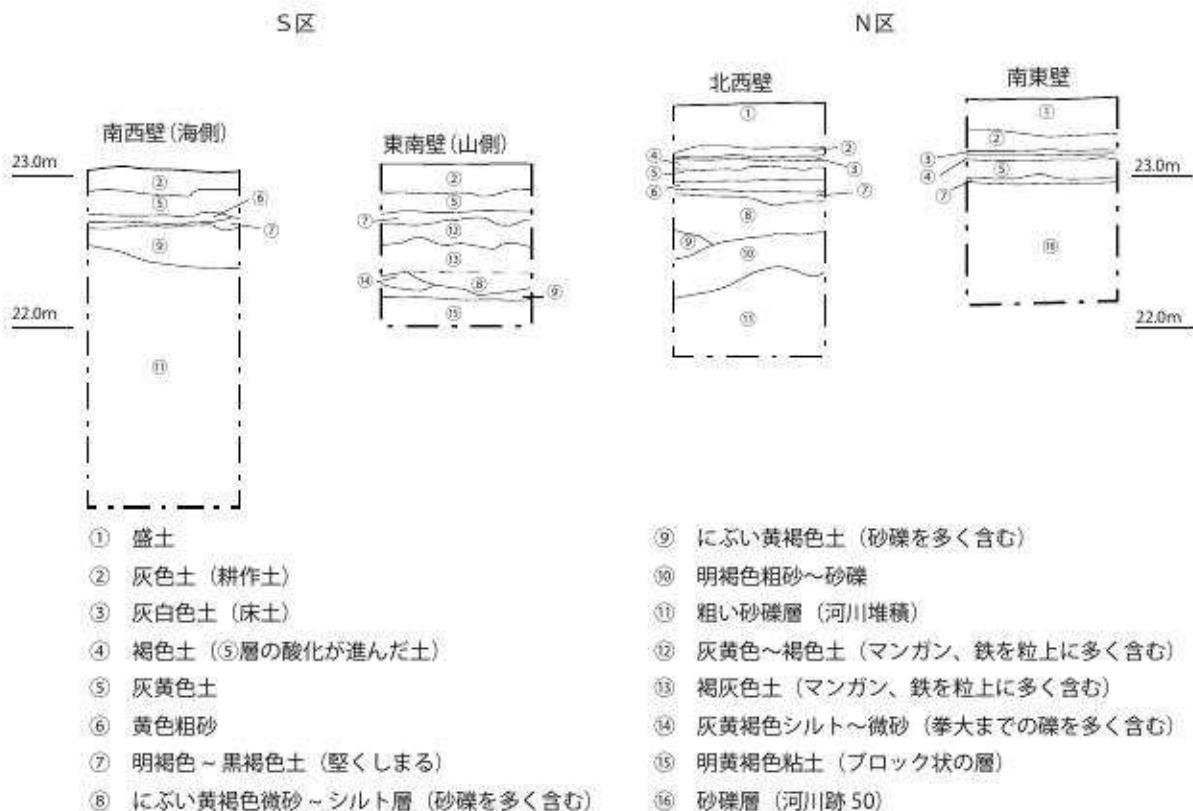


図29 第2区土層断面柱状図

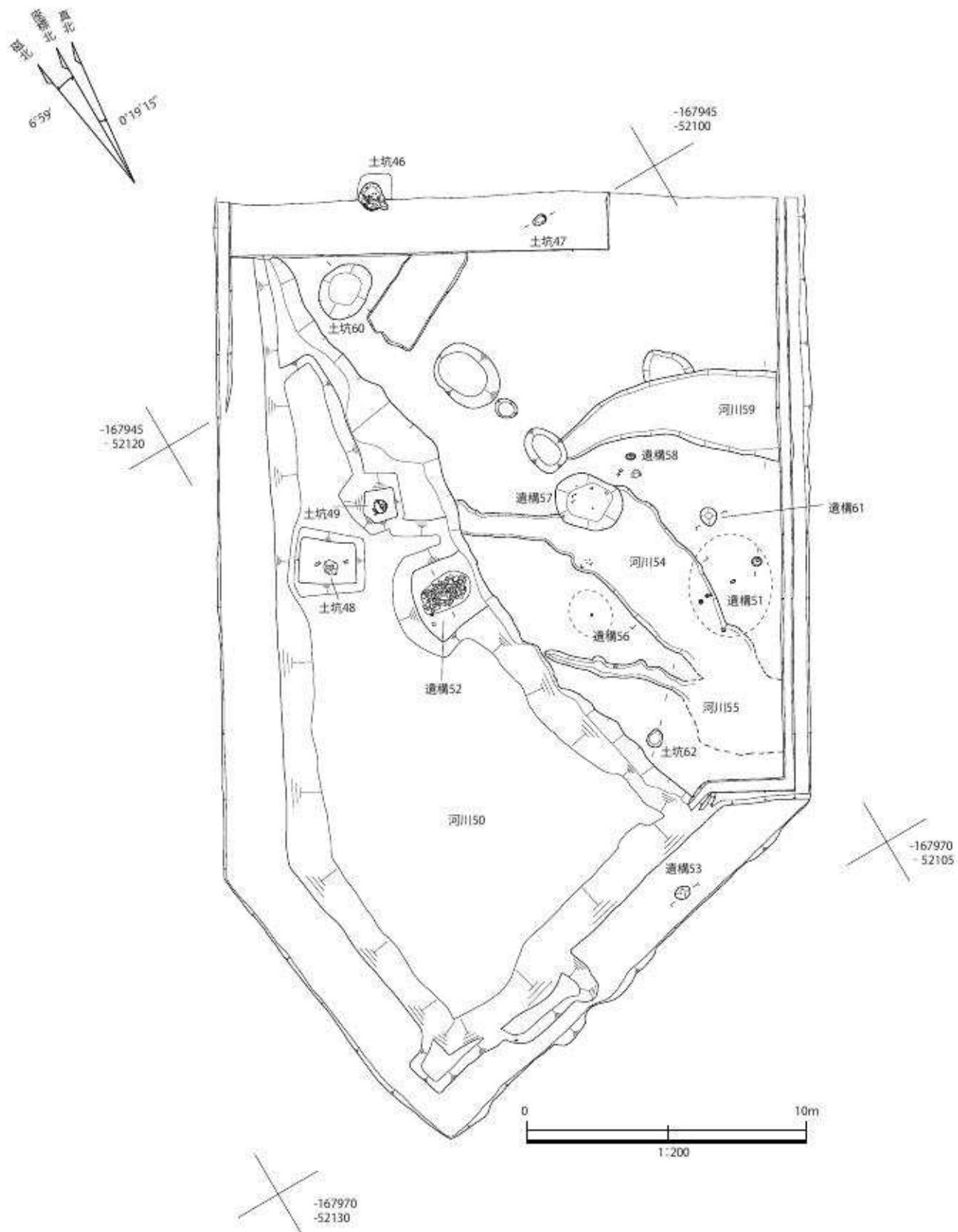


図30 第2区 S 区全体平面図

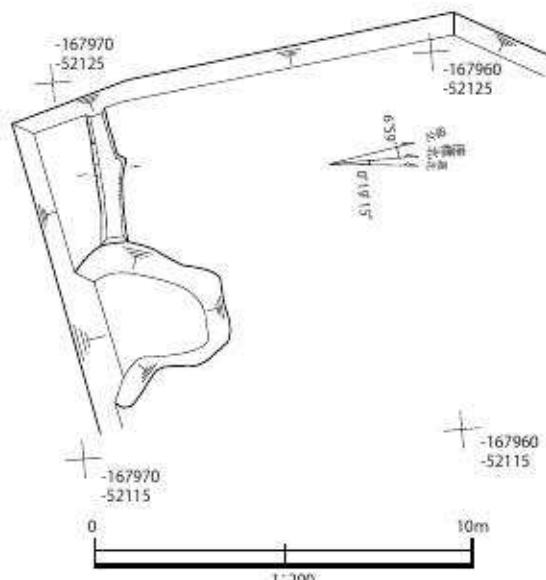


図31 溝45平面図

して利用され、石敷等の埋葬施設や副葬された土器が検出されている。しかし墓壙の輪郭は全く見えなかった。

⑪層は古墳時代前期までの河川跡で、北流している。南東壁の⑯層は砂礫層で、部分的に⑦層直下まで観察される。平成27・28年度や今回の調査で平安時代前期頃の黒色土器が出土しており、北西部で検出した河川跡より新しい。

第2項 検出された遺構と遺物

第1面の遺構(S区) (図版21)

S区のこの面で耕作溝や里道の側溝とみられる溝(溝1~45)を多数検出した。耕作溝は、痕跡だけをとどめるものや重複して幅が広くなっているものが多い。また、

南側は検出面の明褐色土が薄く、輪郭が不明確な耕作溝は掘削しなかったことから、深さのある里道側溝が目立つこととなった。

S区の耕作溝は幅0.2~0.3mのものがほとんどで、検出長は1~18mの範囲におさまる。溝の方向は座標北から5~10°西に振っており、調査区周辺で現在見られる田畠の耕作方向と一致している。

里道の側溝は耕作溝とほぼ直行する方向(東西)に掘削されている。溝の芯々間の距離は約4.5mである。溝の幅は0.4m、深さは0.2mで、埋土は明るい青灰色粘質土であった。

溝45(図31・33、図版21)

調査区の西端で、耕作土、床土を除去した面で検出した東西に走る溝である。南肩は鋭角的であるが、北側は緩い傾斜で掘削されており、幅約2.4m、深さ約0.7mを測る。埋土は下層に灰白色の粘土が薄く堆積しており、湛水状況にあったことを示すが、その上は砂礫層が厚く堆積し、特に北側は溝肩からあふれて1m以上の幅で地山に食い込んで堅く締まっていた。検出範囲で礫層から瓦器の小片が出土している。掘削時期は特定できないが、出土遺物や層位から、中世以降から近世と考えている。

第1面の遺構(N区) (図版32)

N区では幅約2m、厚さ約1mを測る倉庫の鉄筋コンクリートの基礎を残したまま調査を実施した。また、現在南西側は一段低くなっているが、元々は南西の横尾川方向に緩く傾斜していた地形を水田開発時に造成した結果である。

この地区でも里道側溝と耕作溝を検出した。

里道の側溝は、南北方向のもの3条と東西方向のもの1条を検出した。3条は並行し、東西方向の溝で途切れる。S区と同様に現代の耕作方向と一致する。溝の間隔は芯々間で、溝122と溝116は約4m、溝116と溝137は約3.6mを測った。溝の幅と深さは溝122が0.45m、0.1m、溝116は、0.55m、0.05m、溝137は0.4m、0.2mであった。3条の溝の先後関係は、出土遺物が少なく、判断できない。

この3条に直行する溝111は幅約0.35m前後、深さは0.05~0.1mを測る。埋土は黄灰色砂質土で、鎌倉時代から室町時代頃の瓦器小片が出土している。

第2面の遺構(S区) (図30、図版22・23)

土坑46(図32・33、図版23)

S区とN区の境付近で検出した須恵器の甕を埋めた土坑である。土器は口縁部の一部と胴部が残っていた。耕作溝を検出した硬い赤褐色土層が数cm土器内に水平に陥没していたことから、土圧で埋土が締まり、陥没したのであろう。甕は西側が碎けて土坑内や土器内部に拳大までの大きさの破片となって散乱していた。堺市に所在する菱木下遺跡や万崎池遺跡では高い頻度で墓壙が切り合っていることから、新たに墓壙が掘削されたときに破壊されたと考えられる。

土坑の輪郭は判然としないが、土器の東側に灰白色微砂が流入したひび割れがあり、掘方の痕と認識して掘削した結果、歪な形状となった。乾燥によるもので掘方ではないであろう。東北側は土器の10数cm外側で土壤に微妙な色調の変化が見えたことから、土器に沿ってほぼ半円形の輪郭を検出できた。

土器内から13～14世紀頃とみられる瓦器の小片が出土している。陥没時に混入したものであろう。

土坑47(図32、図版23・24)

S区とN区の境付近であるX=−167945m、Y=−52105m付近で検出した土師器の長胴甕を利用した土器棺である。土器の周囲を精査したが土坑の輪郭を確認することはできなかった。

甕は器高38cm、胴径25cmを測るが、遺体が甕より大きかったのか、甕を数個に縦割りしており、土坑の底面は遺体を納められるように約10cmの隙間が空けられていた。甕の胴部は主に両側板と天井部に使用されている。天井部の土器は土圧で割れて内に落ち込んでいた。甕の口縁部には口を塞ぐように須恵器の甕の破片が立てられていた。また、甕の底部には天井部を少し覆うように須恵器の甕の破片が被せられていたが、2点の須恵器片は別個体である。棺の長径にあたる須恵器片間の長さは約0.4m、両側間は0.3mを測った。甕の底部には鉄製の刀子が鋲びて付着した状態で残っていた。棺の大きさから乳児を納めたものであろう。

土坑48(図32、図版25)

S区北西部、河川跡50の範囲にあたるX=−167951.5m、Y=−52117m付近で検出した土器棺である。この棺は河川が土砂の埋積により河原となった後に埋葬されたもので、類例の少ない短頸の甕を棺に使用している。他の遺構同様に土坑の輪郭は確認できなかった。

甕は口縁部を南に向けて寝かせた状態で置かれていた。器高55cm、胴径も55cmを測った。短い頸部には、栓として胴径15cmを測る土師器の長頸壺の口縁部を奥にして、頸部下端まで差し込んでいる。球形の壺の底部は甕の口縁部から少しあみ出している。甕底部は打ち欠かれており、底部から遺体を納めたのであろうが、欠失部を覆う土器や木の蓋は残っていないかった。また、土器は天井部が土圧で割れ、内部に流入していた砂の上に落ち込んでいた。土器棺内に骨や副葬品は残っておらず、周囲と同じ砂が充満していた。また、土器棺の東北0.3mの砂層内で6世紀頃中頃の須恵器杯が出土している。棺よりやや低い位置から出土しており、この土器棺に供献されたものか、別の墓に副葬されたものか、祭祀に使われたものか判断できない。

土坑49(図30、図版26)

土坑48の東北東方、河川跡50を埋積する厚さ約2.5mを測る砂層内で検出した須恵器甕を使った土器棺である。この遺構も土器棺を納めた土坑の輪郭を確認することができなかった。土器は上部が大き

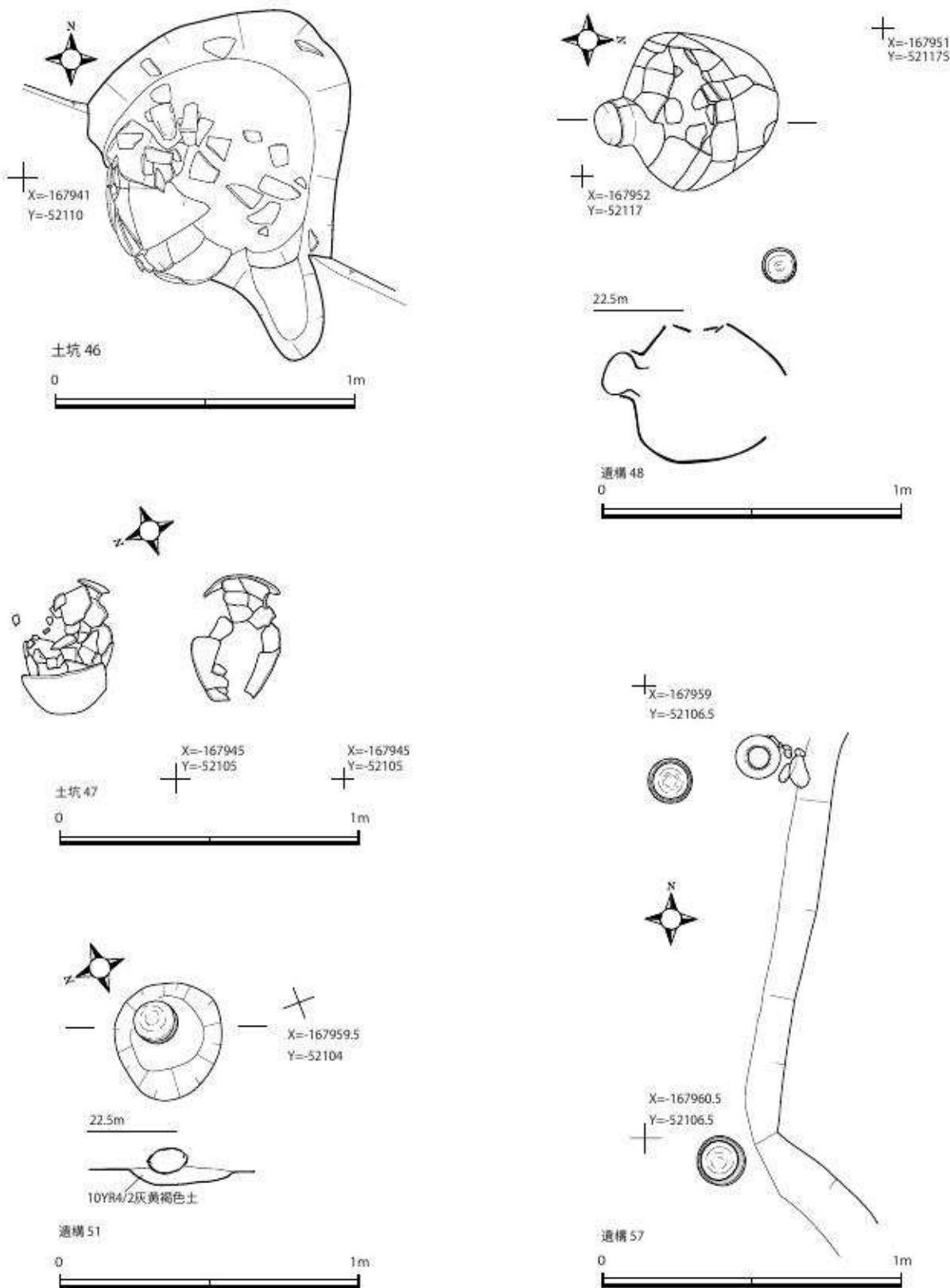


図32 土坑46・47・48、遺構51・57平・断面図

く割れており、検出時には近辺から流されてきた可能性も考えたが、土坑48の検出状況から、この土器も原位置を動いていないと考えている。

棺の大きさは、口縁から底部まで長さ55cm、最大胴径は50cmを測った。頸部は30～40cmと推定される。この棺は口縁部を西に向けて横に寝かせた状態で口縁部の一部と胴部の下半分が残っていた。底部の残存状況から頸部を打ち欠いて遺体を埋納した可能性が高い。また、上部の土器片が底から0.15m～0.2mほど上で出土しており、土器内に砂がある程度流入した後に土圧により陥没し、一部が棺内に残ったものと思われる。口縁部を閉塞するためのものは残っていなかった。

河川跡50(図30、図版22)

河川跡50は府中遺跡が立地する沖積段丘面を下刻して流れていた流路である。土器棺などを検出した遺構面を形成する灰黄色砂質土を切って南南東から北北西に流れており、幅13m以上、深さは3m以上を測る。現地表(標高23.1m)から0.6m下の標高22.5mまでは褐色から黄灰色の砂層で、比較的穏やかな流れであったのか、遺物は少ない。この下は小児の頭大までの礫を含む砂礫層で、この砂礫層を部分的に約2m掘り下げた。下層からは弥生時代中期頃の土器片や摩滅した縄文土器の細片が出土している。また、上層からは弥生時代後期や古墳時代中期の土器が出土しており、4～5世紀頃まで河川として機能していたが、その後流路が移動し、冠水時に細かい砂やシルト質の土砂が堆積する環境になったと考えられる。

今回の調査では調査対象地全体を掘り下げることができず、河川跡の底部を検出することはできなかった。河川は、周囲の地形から、現在調査地の南0.6kmの所を西流している横尾川(大津川)の旧流路や氾濫原と考えられる。N区や里道を隔てて隣接する平成27・28年度調査区では、河川跡から平安時代前期頃の土器も出土しており、調査地周辺は、国府の一画であった可能性も指摘されている地点であるが、平安時代までたびたび河道となるような不安定な環境であったのであろう。

遺構51(図32、図版27)

標高22.7m前後に堆積する堅く締まった明褐色土を除去し、褐色～黄褐色の砂質土を掘り下げていく中で、S区中央の南東端近く、X=-167965m、Y=-52120mで、須恵器の杯身に杯蓋を合わせた状態で検出した遺構である。これらを納めていた土坑は土器の周囲の色調がやや異なっていたことから0.4m×0.35mの楕円形の輪郭をもつものと判断したが、明確な墓壙の堀方を確認することはできなかった。この土器も土壙墓に副葬または供献された可能性が高い。

遺構52(図34、図版28・29)

土坑48の南側、河道の肩部に拳大程度の河原石を蒲鉾形に成形した石積み施設である。積み石はドーム型に残っていたことから、当初は護岸や制水のための施設か、川の祭祀や禊ぎのために築造された足場とも考えた。しかし、積み上げられた河原石を少しずつ除去したところ、それぞれの石は密着せず、空洞があり、その隙間を川砂が埋めていたことから、足場とするには不安定である。蒲鉾形に積まれた河原石を取り除いた底面は、径10～20cmまでの河原石が長方形に敷き詰められており、東西1.85m、南北1.05mを測った。底面の川原石は約130個で、1～2段に隙間無く丁寧に敷き詰められており、その上面の高さは北と西側が標高21.90m、南と東側が標高21.95m前後である。積み石頂部の高さは標高22.45mで、石は4～5段積まれていた。

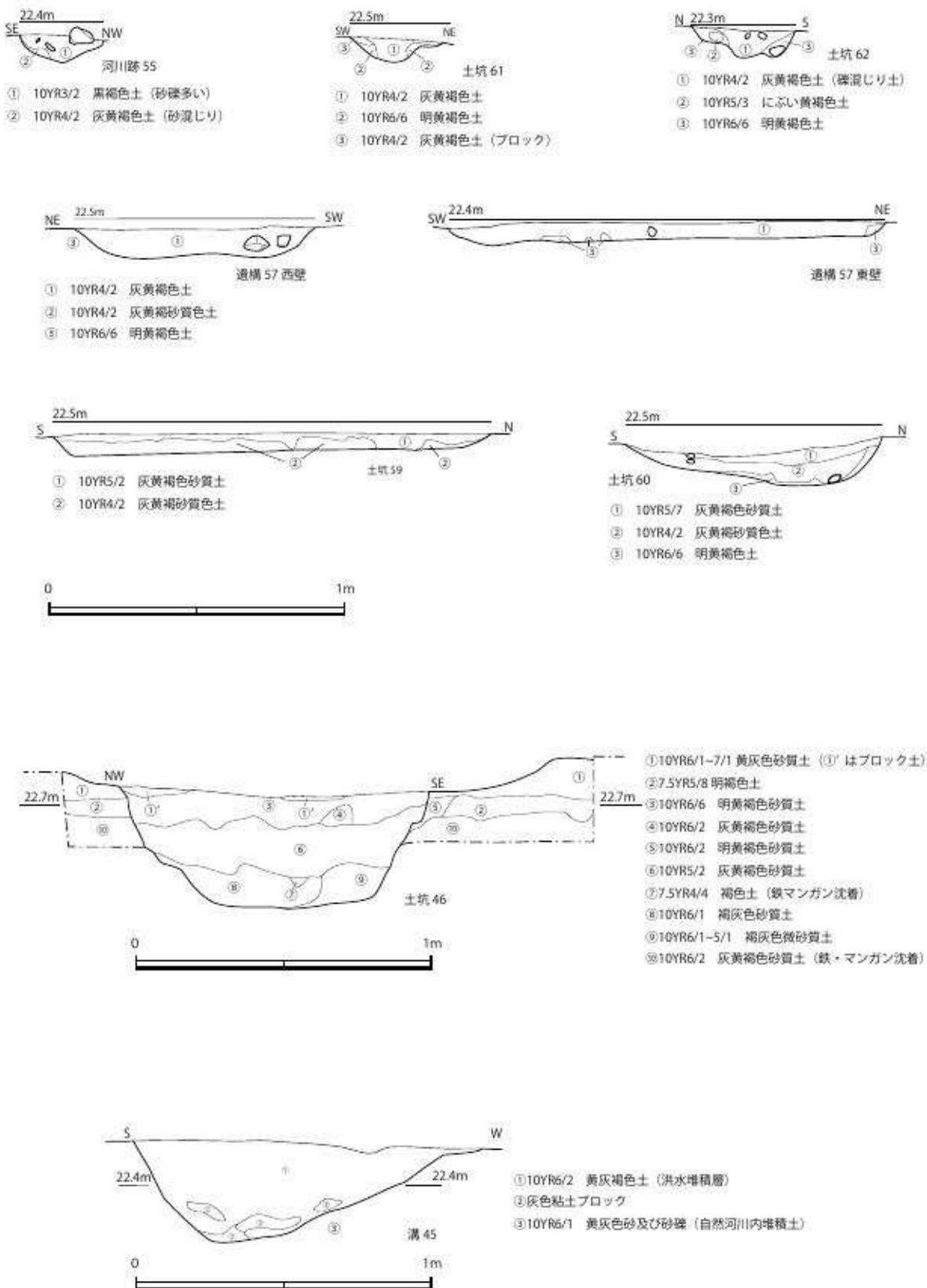


図33 第2区検出土坑・遺構・溝断面図

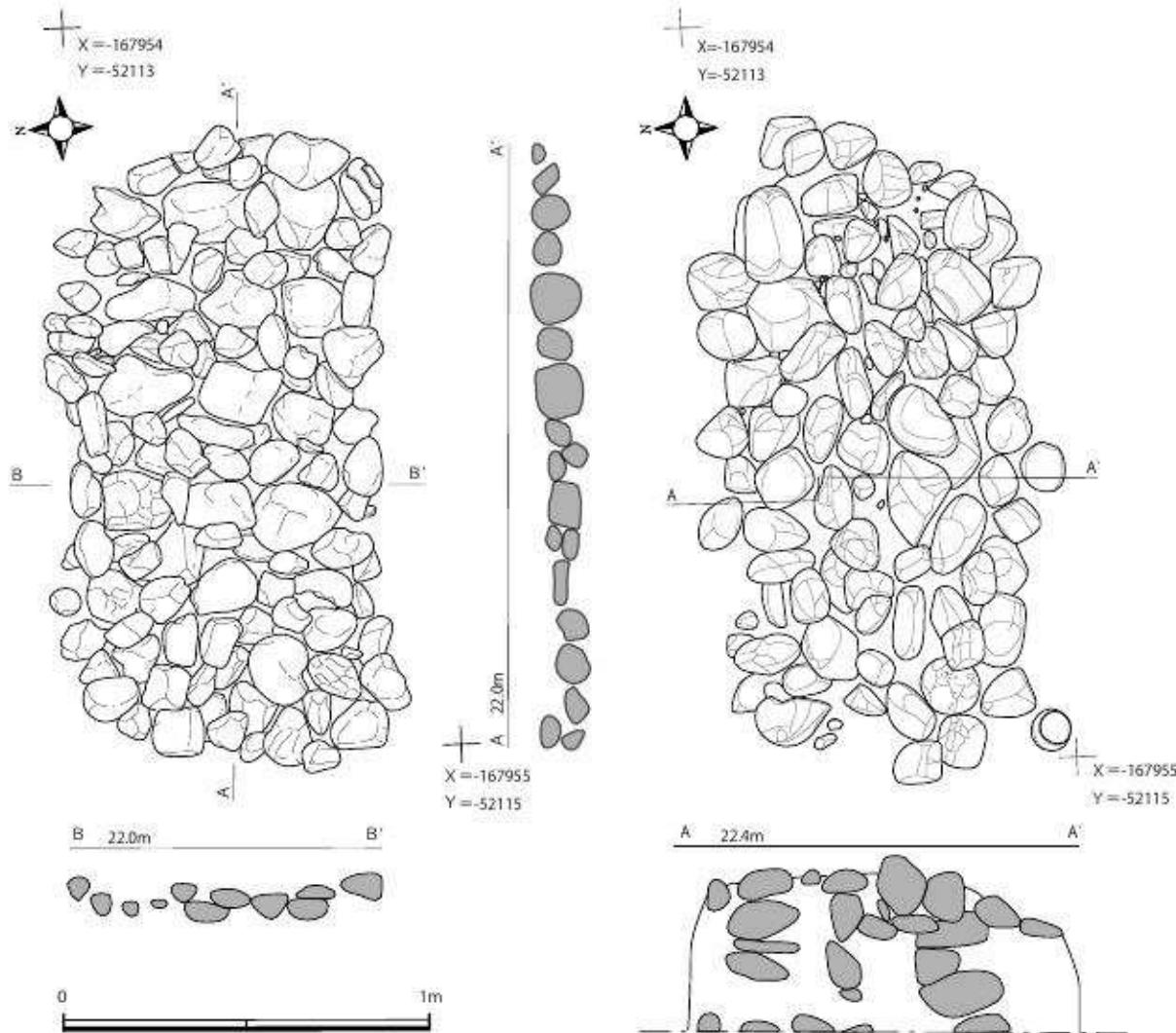


図34 遺構52平・断面図

他の遺構や検出状況からこの遺構は、床面に川原石を敷き詰めた墓で、遺体を埋葬後その上に川原石や土砂を積んでいたものが、遺体の腐食にしたがって隙間に砂が徐々に流れ込んだことにより、石積みが大きく崩れなかつたと推定される。南西の裾部から須恵器の壺が出土しており、石積み後に供献されたと考えられる。

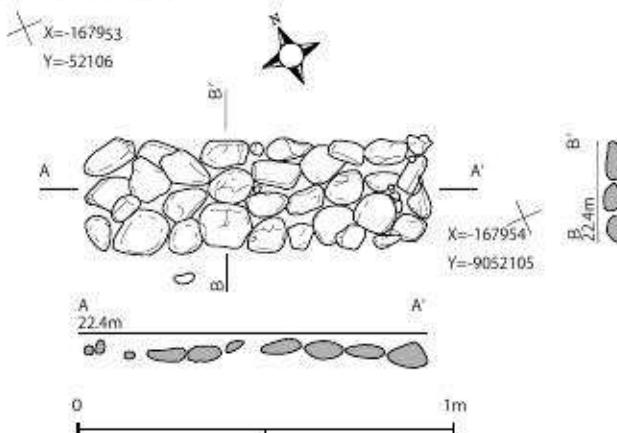


図35 遺構58平・断面図

遺構53(図30)

S区南東端 X = -167968.5 m、Y = -52114 m付近で検出した径0.4 mを測る円形のピットである。堅く締まった褐色土を除去した面で検出した。遺物は出土しなかった。

河川跡55(図30、図版22)

S区東部で検出した流路跡である。堅く締まった褐色土の下、マンガン粒を含む褐灰色砂質土を約0.1 m掘り下げたところで精査し、検出した。幅0.5 m、深さ0.3 mのU字

溝のような流路で、砂礫が堆積していた。洪水で褐灰色砂質土を下刻したものであろう。遺物は出土しなかった。河川跡50の付近で途切れており、直接繋がっていない。

南側の東肩部のX=−167959.2m、Y=−52106.1m付近で須恵器の壺と杯身、X=−167960.5m付近で、須恵器の杯身が出土している。出土状況からそれぞれ墓に副葬されたものと考えられるが、墓壙や人骨等は確認できなかった。

遺構57(図32・33、図版30)

S区の中央部にあたるX=−167954m、Y=−52109m付近で検出した浅い土坑である。平面は梢円形を呈する。埋土は砂礫を含む灰黄褐色土である。須恵器の杯蓋や甕が出土している。

遺構58(図35、図版31)

S区の中央東部、X=−167953.5m、Y=−52106mで検出した墓で、他の遺構と同様に墓壙の輪郭は不明である。褐灰色砂質土を精査中に、0.25m×0.3m、厚さ0.1mほどの河原石の傍らに土師器甕が土砂に押しつぶされた状態で出土した。遺構の輪郭を確認できなかったため、出土状態を記録後、薄く褐灰色土を掘り下げたところ、1～18cmの河原石30数個が0.9m×0.3mの長方形に敷き並べられていた。河原石は大きさ、形状とも不揃いであるが、上面の高さは標高22.35mから標高22.39mまでの範囲内にあり、ほぼ平坦になるように丁寧に敷かれていた。規模は小さいが柏台と判断した。小児の墓と思われるが、土器等の棺材や骨は見つからなかった。河原石は小石が多い。上面に置かれた土師器の甕は底部が欠失しており、打ち欠いて副葬したと思われる。

この石敷の南方0.4mの地点には径0.35m×0.25m×0.15mを測る石のほか、0.15m前後の河原石が数個出土している。堆積土中に大きな石は含まれないことから、人為的に置かれたもので、墓に関わるものと考えられる。

河川跡59(図30)

S区の東部、X=−167953～167956m、Y=−52100～52110mで、第4層の褐灰色砂質土中で検出した北西方向に湾曲して流れる浅い流路である。最も広いところで幅1.6m、深さ0.2mを測る。流路は褐灰色砂質土が堆積する過程で形成されたものである。埋土は灰黄褐色砂質土で、地山の灰褐色土と区別がつきにくいが、砂粒の混入度合いが高く、拳大までの礫石が混入していた。地面のやや窪んだ所を浸食して流れた流路であろう。

土坑60(図30・33)

S区の北部、X=−167943m、Y=−52113mで検出した東西にやや長い梢円形土坑である。長径2.25m、短径1.6m、深さ0.2mを測る。埋土は拳大までの河原石を含む灰黄褐色砂質土で、遺物は出土しなかった。

遺構61(図30・33)

河川跡59と遺構51の間、X=−167957m、Y=−52105m付近で検出した土坑である。梢円形を呈し、長径1.0m、短径0.65m、深さ0.15mを測る。埋土は灰黄褐色土であった。遺物は出土しなかった。

土坑62(図30・33)

河川跡50の南東肩部、X=−167963m、Y=−52111m近くで検出した梢円形の土坑で、長径1.1m、

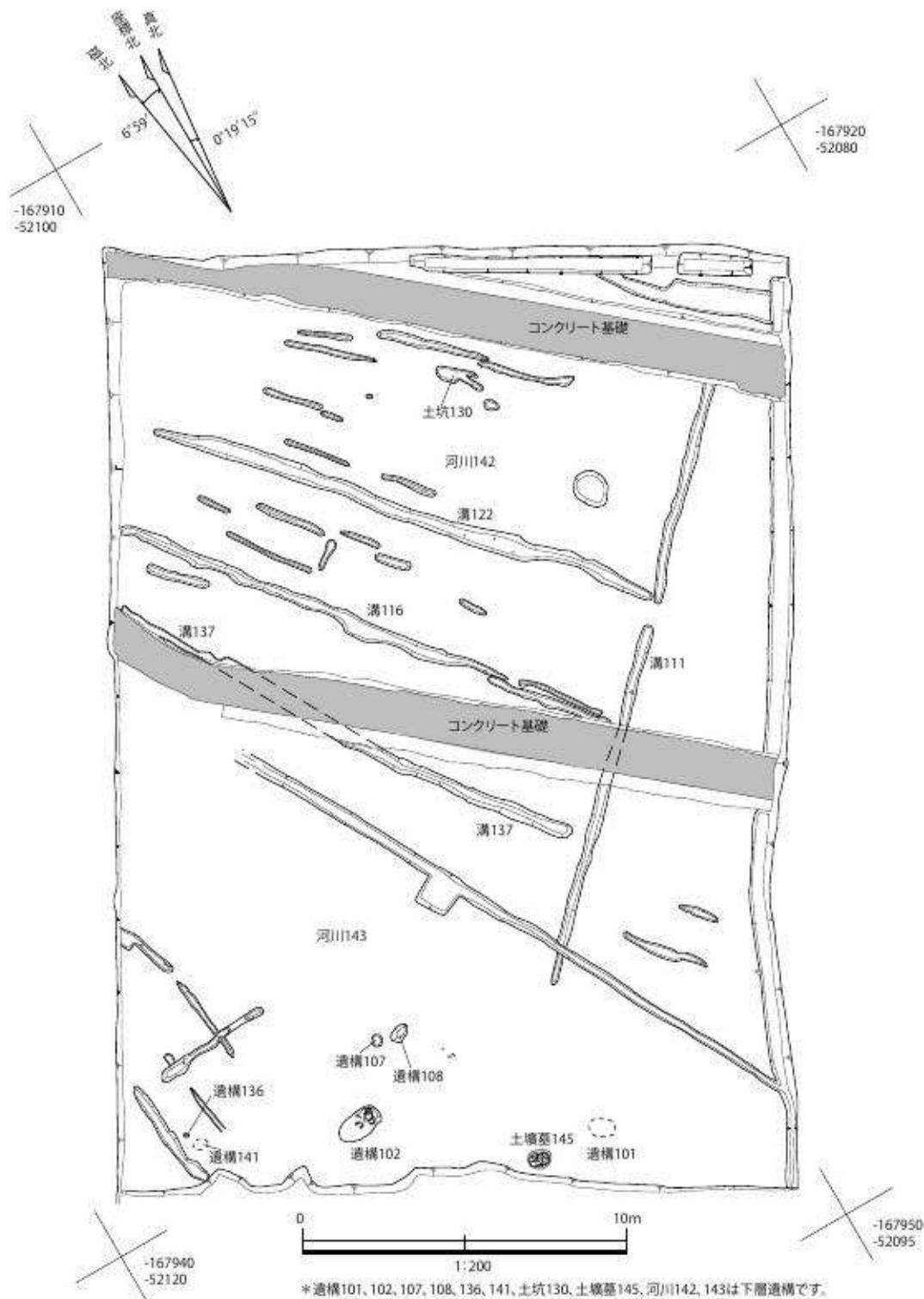


図36 第2区N区全体平面図

短径0.6mを測る。埋土は礫石混じりの灰黄褐色土とにぶい黄褐色土で、いずれも砂を含んでいる。遺物は出土しなかったが、形状から墓壙の可能性が高い。

第2面の遺構(N区) (図36、図版33)

N区は平成27・28年度調査でも検出された平安時代の河川跡が過半を占める。この河川により墓壙

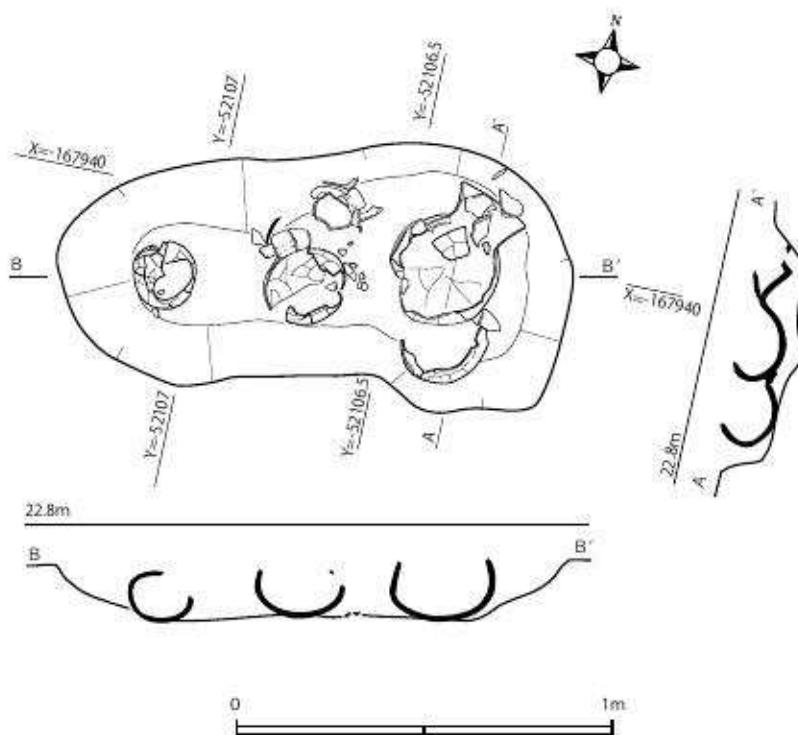


図37 土坑102平・断面図

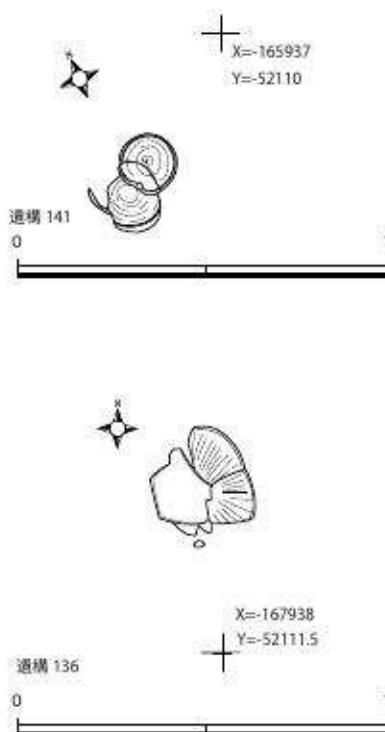


図38 遺構136・141平・断面図

や土坑が検出された褐灰色砂質土が浸食されたため、南部を除いて古墳時代の遺構は検出されない。その南部は⑦層の堅く縮まった明褐色～黒褐色土の下に堆積する褐灰色砂質土で、墓壙と考えられる遺構を検出した。

遺構101(図36、図版34)

N区の南端付近で、標高22.8m前後に堆積する固く縮まった明褐色土を除去し、褐灰色土を薄く掘り下げたところで検出した飛鳥時代の土器が出土した遺構である。土坑の輪郭は確認できなかつたが土壤墓に伴う可能性がある。

遺構102(図37、図版35)

N区のX=-167940m、Y=-52106m付近で、標高22.8m前後に堆積する固く縮まった明褐色土を除去し、褐灰色土を薄く掘り下げた標高22.7mの高さで検出した土坑である。土師器の壺や甕が出土したことから周囲を精査したが、土坑の輪郭を確認できなかつた。深さは検出面から約0.15mであった。図37は土器の周囲を掘り広げ、その輪郭を描いたもので、土坑の輪郭ではない。

土器は壺と甕で、やや長い口頸部を持つ壺は口縁部を北に寝かせた状態であった。壺の底部と重なって置かれていた甕も、口縁を北に寝かせた状態であった。西側の土器は二重口縁の壺で、口縁部が土圧で割っていた。その北側の土器は小型の壺である。また、この土坑の南方1mのところで土師器甕が碎けた状態で出土しており、それを含めてひとつの大きな土坑である可能性がある。出土した土器はS区の状況から墓に副葬された可能性が高い。この一帯が墓域となる、その初期に営まれた墓壙であろうか。

遺構107(図36)

N区の南部のX=-167945m、Y=-52100m付近で検出した円形のピットである。深さ0.1mを測り、埋土は灰白色微砂とにぶい赤褐色微砂の混ざった土で、遺物は出土しなかつた。

遺構108(図36)

遺構107の東側で検出した楕円形の土坑で、長径0.75m、短径0.45m、深さ0.1mを測る。底面は

凸凹している。埋土は黄灰色微砂と鈍い赤褐色微砂が混ざった土で、遺物は出土しなかった。

遺構136(図38)

N区の南西部のX=−167937.8m、Y=−52111.5mの褐灰色土中で出土した土師器杯である。これを納めた遺構の輪郭は確認できなかったが、完形に近いことから、墓に副葬された可能性がある。

遺構141(図38)

N区の南西端のX=−167936.8m、Y=−52110.4m付近で、標高22.7m前後に堆積する褐灰色土の掘削中に出土した須恵器で、杯蓋と杯身である。杯蓋も杯身も口縁部を下に向いているが、膨らみの小さい杯蓋の天井部に、杯身の口縁部が少し重なった状態で出土した。墓の副葬品か供献品と思われる。周囲を精査したが、墓壙の輪郭を確認することはできなかった。杯蓋は青灰色、杯身は灰白色で胎土の色は異なるが、ほぼ同じ時期のものである。

この他にも調査中に褐灰色土から完形や完形に近い須恵器の杯蓋や杯身、壺が出土している。墓に副葬されたものが多いと思われるが、墓壙の輪郭や他の副葬品が確認できないこと、調査区全体を掘り下げる途上で出土したことから、出土位置を記録していないものが多い。

土壙墓145(図39、図版37・38・39)

N区南端部のX=−67943.5m、Y=−52102.5mで検出した、割った陶質土器の甕を覆いとする土壙墓である。この遺構も標高22.6m前後に堆積する褐灰色砂質土の掘削中に、陶質土器の甕の破片が重なって露出したことから墓壙と判断し、周りを精査して埋土の色調や土質の差の把握に努めたが、土坑の輪郭と認識できる差を見いだすことはできなかった。

甕は一片10～25cm程度の大きさに割られ、10数片が長辺約65cm、短辺45cmの楕円形に、口縁部

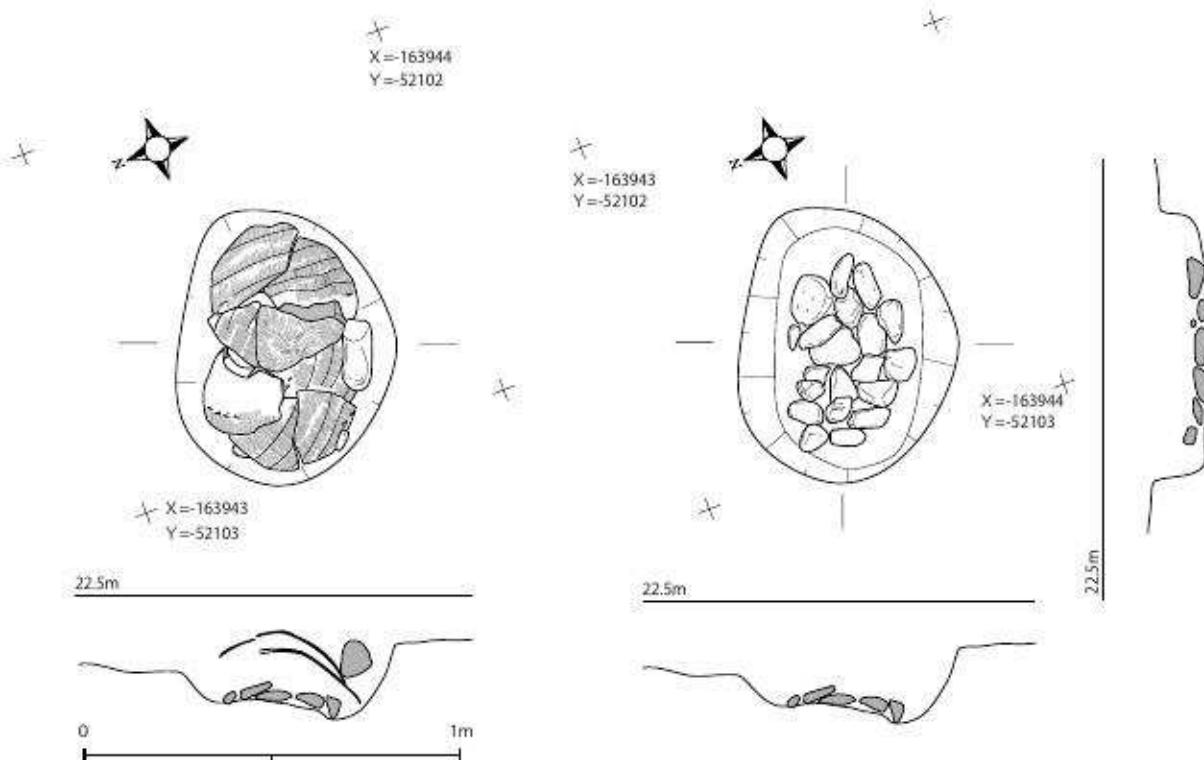


図39 土壙墓145平・断面図

を東に向か部分的に重なるように、隙間無く置き重ねられていた。土器と下に並べられた石敷の間は直接接しておらず、5～10cmの隙間があったことから陶質土器は遺体を覆う蓋と判断した。遺体が腐食する過程で周囲の土砂が徐々に侵入し、蓋の土器があまりズレなかったのであろう。

石敷は、長径7cmから15cm位までの川原石を約20個敷き並べたもので、梢円形に近い形で並べられ、長辺0.55m、短辺0.35mを測り、上面は標高22.20から標高22.25mの範囲内にある。石敷きの上面はやや凸凹がある。土坑47のような棺の小口部分を塞ぐ土器等は確認できなかった。S区の遺構53、遺構58と比較すると、遺構58と長さでは0.4m短いが幅はほぼ同じである。遺構58では土師器甕が1点供献されていたが、土壙墓145では副葬品や供献品は確認できなかった。

この石敷のすぐ下方で、幅1～2cm、長さ約1.5mに渡って「く」字形に湾曲する白い筋のようなものを検出した。動物の骨のように見えたが、節が無く、人間の骨格には該当するような部位はない。種の同定を委託した結果、筋は葦などの植物が完全に灰化したものであった。灰化して炭素がなく、年代測定は不可能であった。土壙墓145の周辺では他に植物遺体は全く検出されなかった。また、周辺の埋土である褐灰色土内でも炭化物は検出されていない。野火でもこのように完全に灰化した植物が残るこ

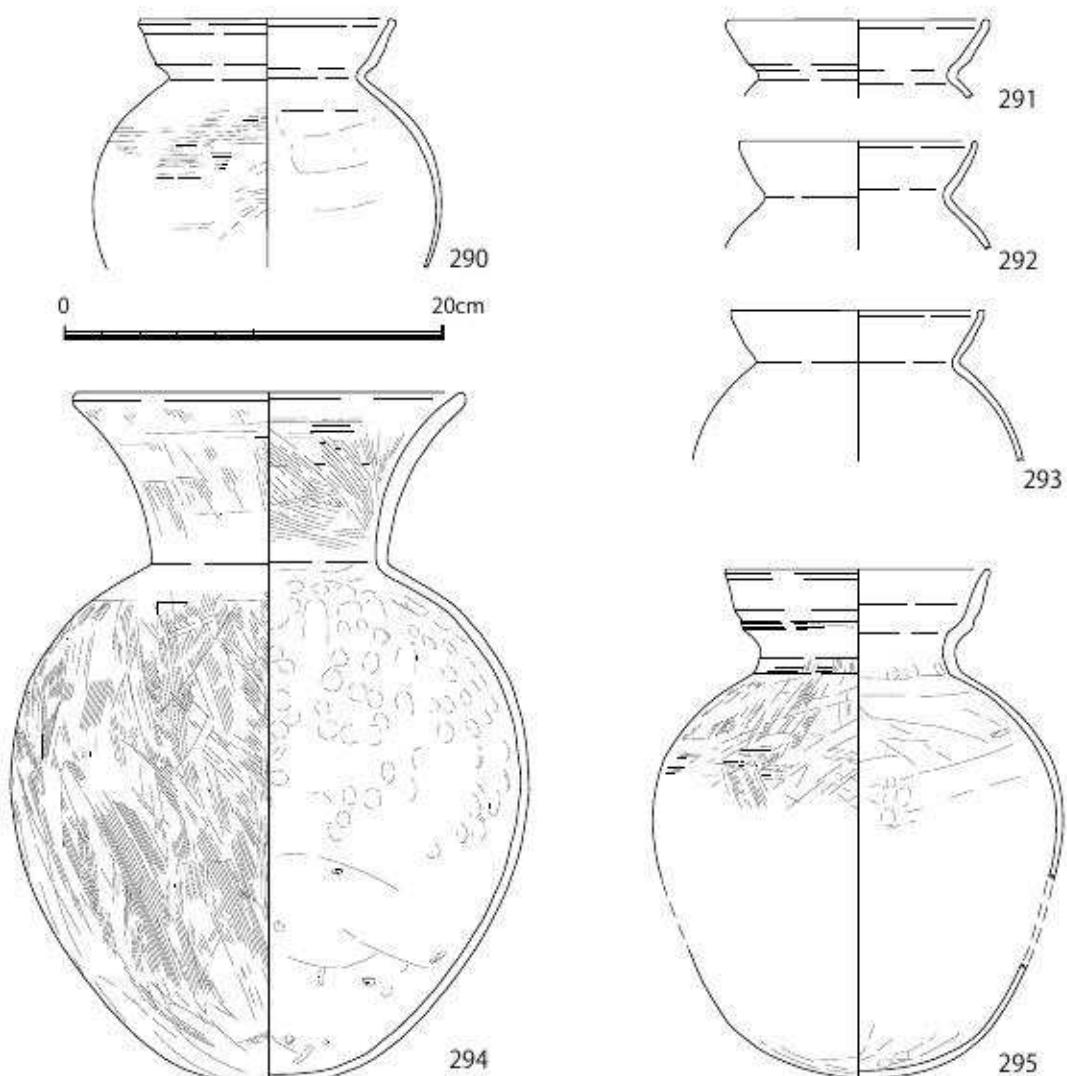


図40 遺構102出土遺物実測図

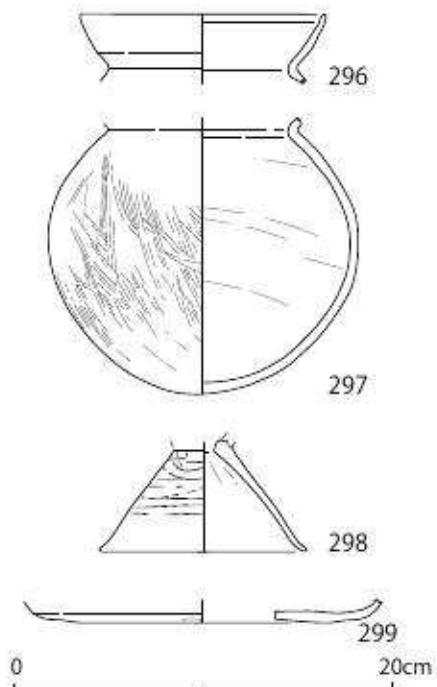


図41 遺構101出土遺物実測図

第2区の出土遺物

遺構102(図40、図版58)

290～293は布留式の甕である。290の胴部の外面調整は横方向のハケが観察できるが、他は風化が著しい。294は肩部に最大径をもつ壺で口縁部は内外面、胴部外面はハケ調整である。内面は指オサエが顕著である。295は二重口縁壺で胴部外面には斜め方向のハケ調整、内面には指オサエの上に、板ナデ痕が観察できる。

遺構101(図41、図版61)

296は布留式甕の口縁部、297布留式甕の頸部から胴部外面にハケ調整が観察できる。298は小型器台の脚部。外面に細かいミガキが観察できる。299は土師器の皿の底部。7世紀の頃のものである。

遺構145(図42、図版59)

300は陶質土器の甕。外反して開く口縁部外面に段を作り、先端は細く尖り気味になる。頸部より下は厚さ5～6mmの粘土板を貼り合わせて胴部から底部まで作り、さらにその上に同じ程度の厚さの粘土板を重ねて底部から頸部まで造られている。粘土板を型に押し当て、さらにその上にもう一枚粘土板を重ね、細い溝を彫ったタタキ板で成形し、次に型から外して胴底部の内面をナデ整形し、頸部をすぼめて、口縁部を成形している。肩部外面には時計回りに鳥足文タタキが施されている。2枚目の粘土板を重ねた時に空気を追い出せなかっただけ、肩部や底部、胴部に焼成時に空気が膨らんで爆ぜたり大きな隙間が残ったりしている。型を使って2枚の粘土板を重ね合わせて作る土器は、この時期にはほとんど見られない。

土坑47・49、遺構51・136、河川跡54(図43、図版60～63)

301は長胴の土師器の甕。平底に近い丸みをもった底から膨らみの小さい胴部を作り、頸部の絞りも弱い。口縁部は頸部から外反して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。口縁部はヨコナデ、体部外面

とは極めて珍しいとのことである。

河川跡142・143(図36)

調査区北東部にある、平成27・28年度調査で検出した東北方向に流れる河川跡の続きである。流路の方向から、信太山丘陵と觀音寺山遺跡が立地する和泉山脈から北西に延びる丘陵(現・和泉市弥生町)に挟まれた標高20～25mの段丘面を下刻して流れ横尾川の旧河道と考えられる。河川跡は変遷を繰り返しており、左岸肩ははっきりしないが、調査区に隣接する倉庫の基礎付近で6世紀から7世紀世紀の墓域となっていた褐灰色土が途切れ、川砂利や礫と粗い砂層が広がるので、調査区南東のX=-167940m、Y=-52093mとX=-167930m、Y=-52110mを結ぶラインが左岸の肩部になる。河道はローリングを受けた川原石や粗い砂が標高+22.5m前後まで堆積しており、須恵器や土師器が出土しているが、S区の河川跡50と比較すると量は少ない。

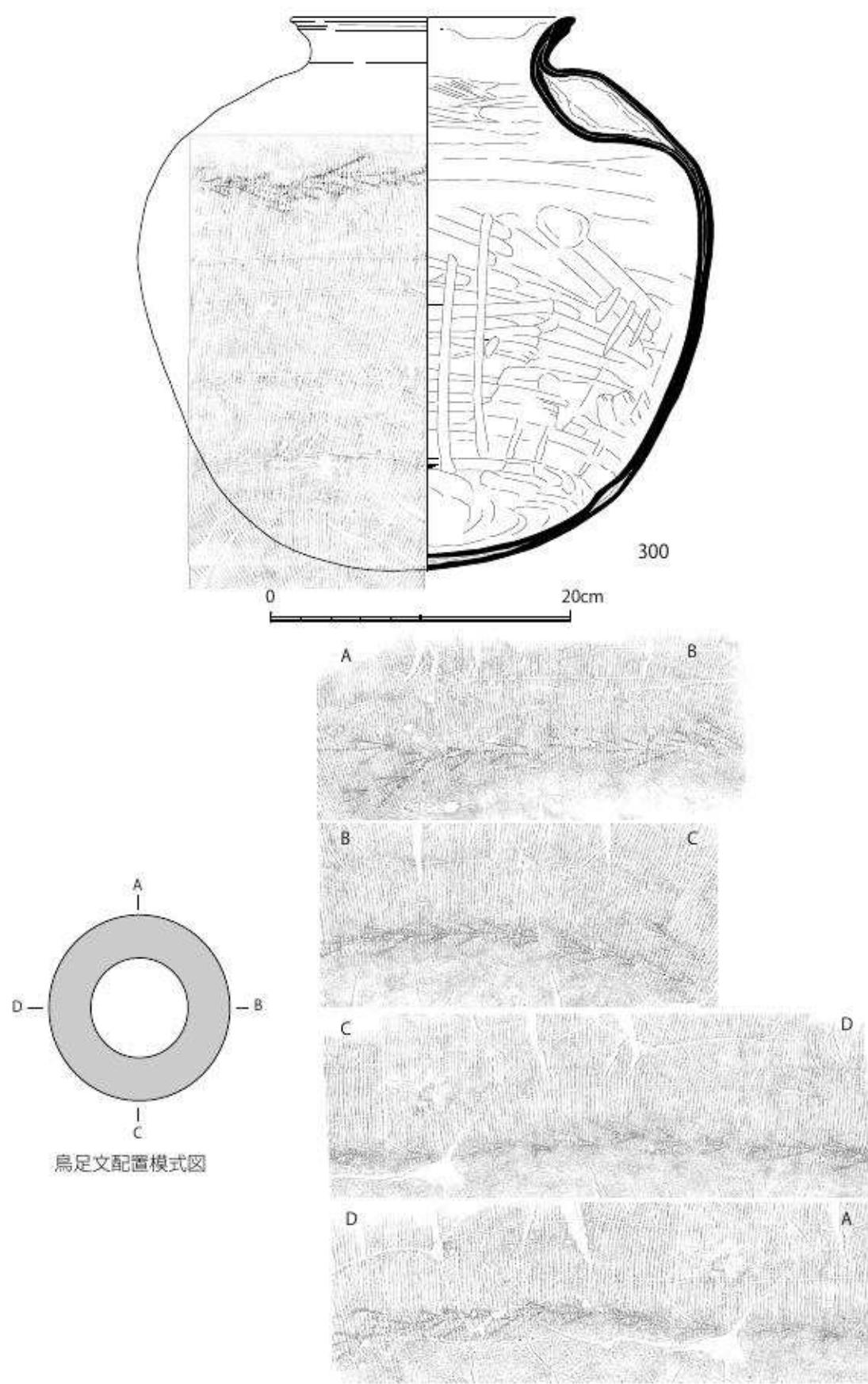


図42 土壙墓145出土遺物実測図

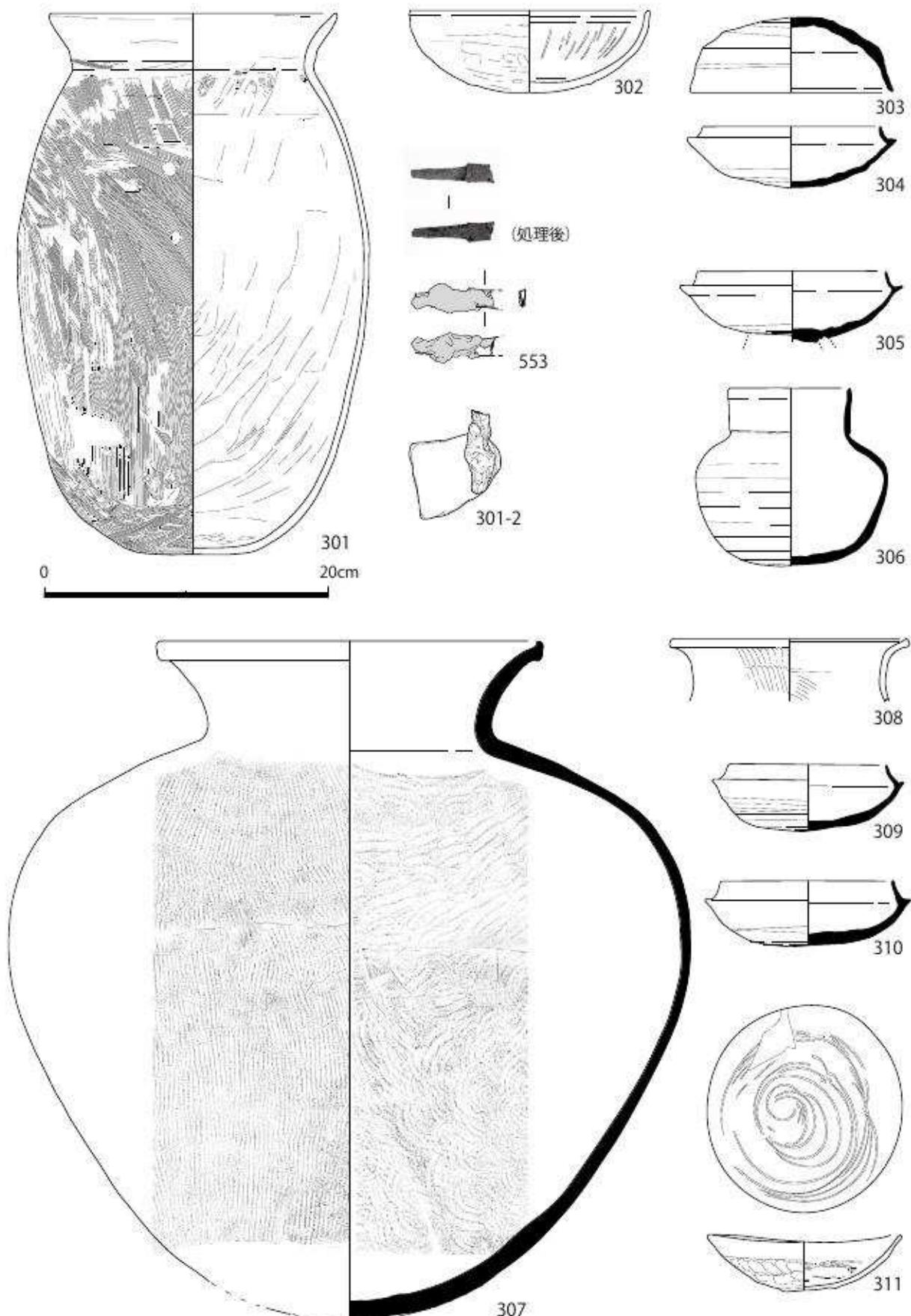


図43 土坑47・49、遺構51・136、河川跡54出土遺物実測図

は指オサエの上から縦方向のハケ目、内面は底部に指オサエ、胴部は、ヘラケズリに近い粘土を掻き取るようなイタナデ、頸部には横方向のハケメが観察される。553は鉄製の刀子で、鍔がすんで膨らみ、土器にこびり付いていた。元の大きさは不明である。現状で、長さは4cm、幅は約2cmを測る。土坑47の土器棺から出土。548、549は須恵器の甕の体部片で、301をの小口を覆うように置かれていた。302は土師器の杯で、半球形である。口縁部外面は強くヨコナデする。体部内面は放射状のヘラミガキ。

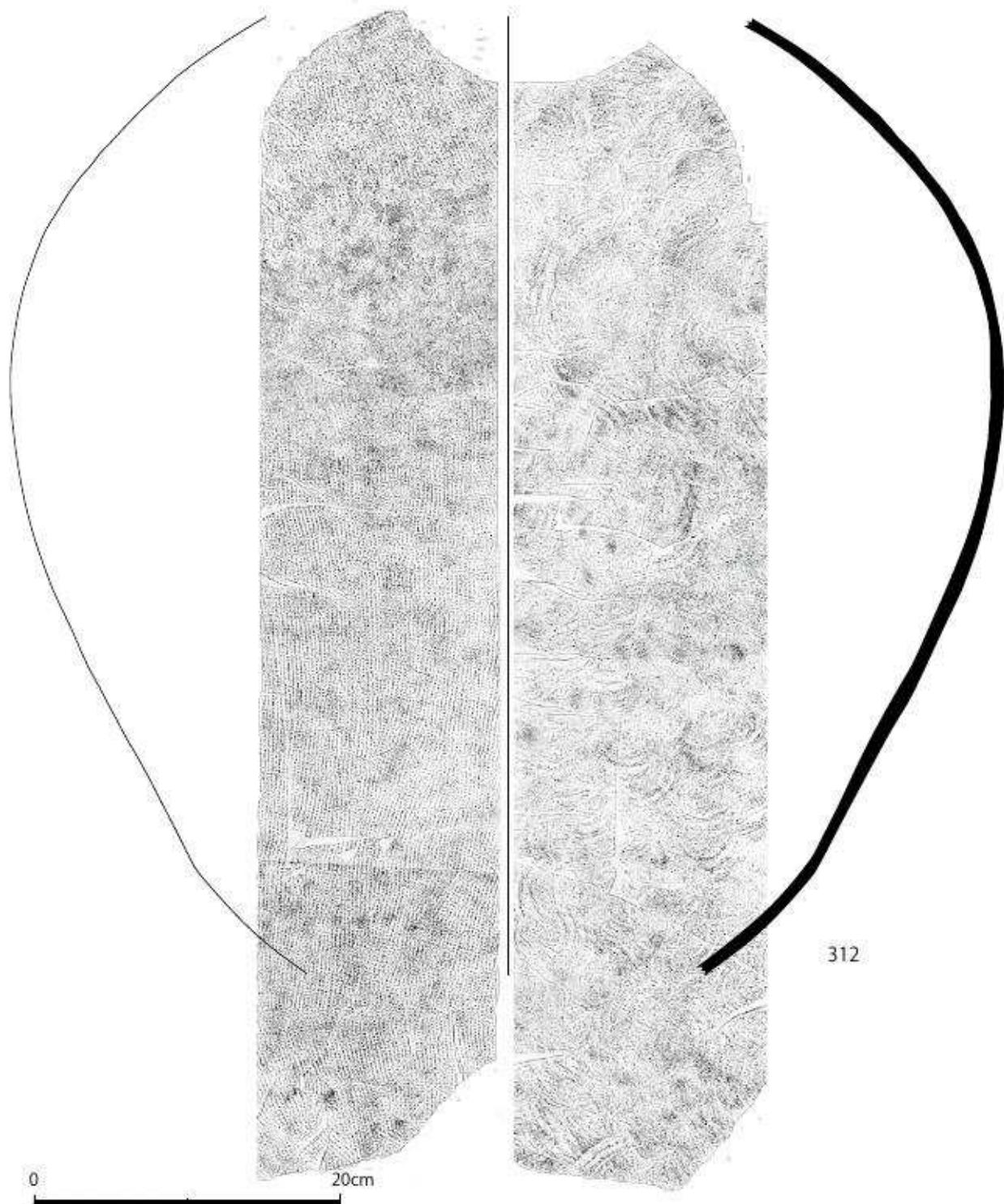


図44 土坑46出土遺物実測図

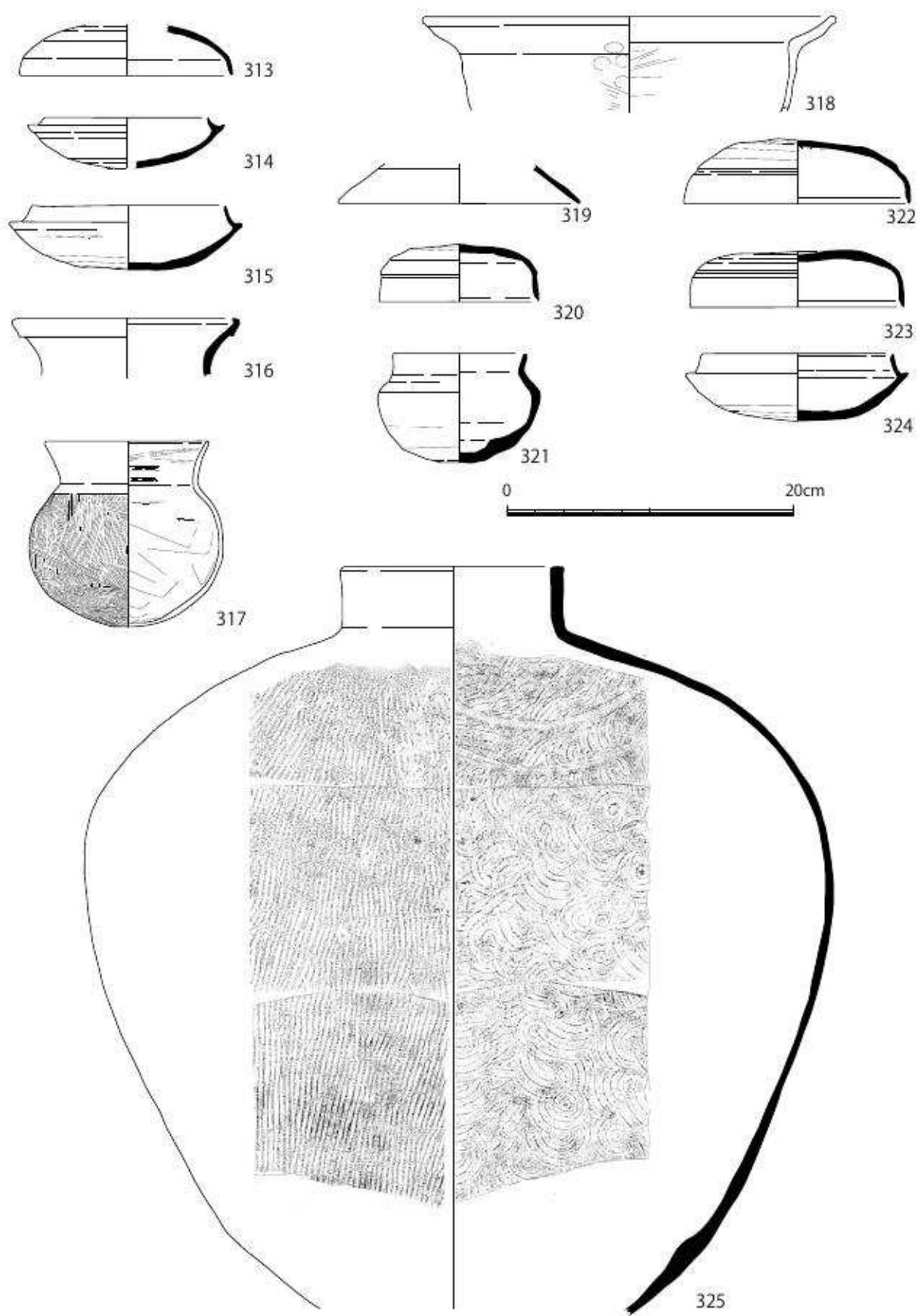


図45 土坑48、遺構52・56・57・141出土遺物実測図

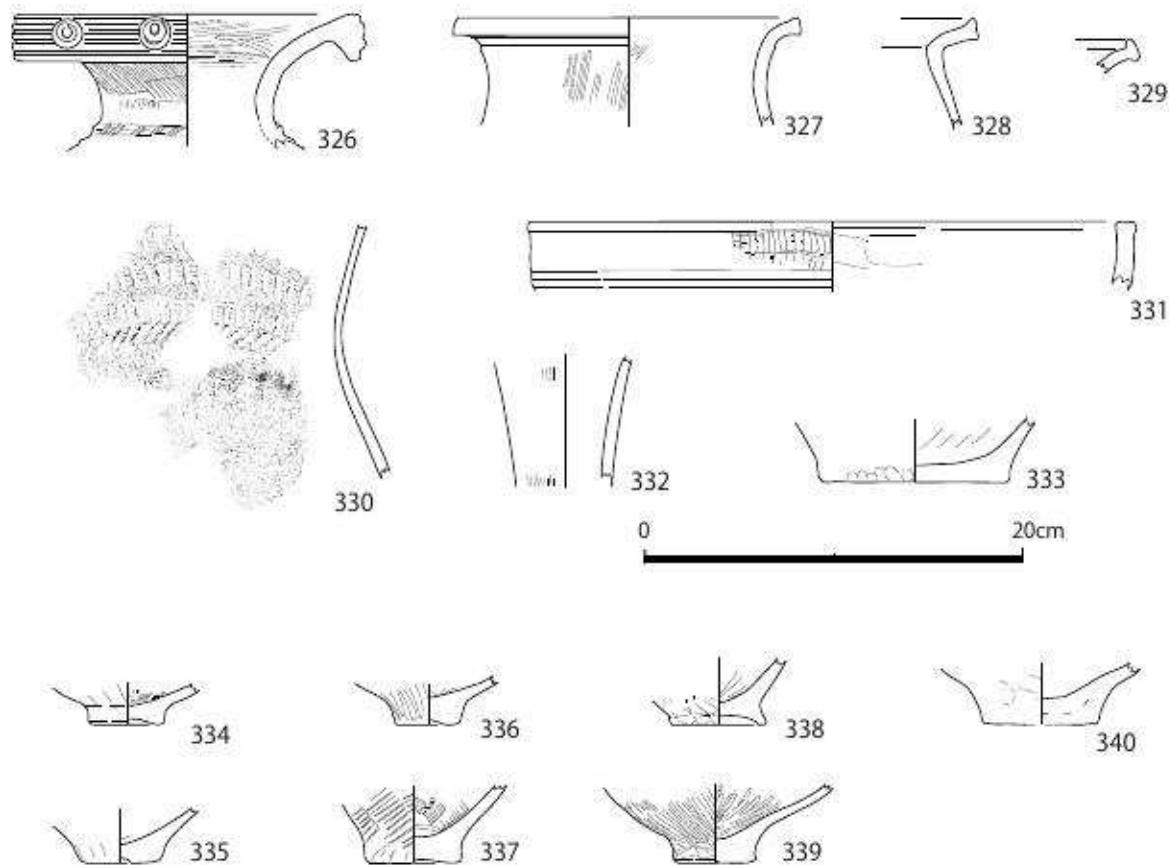


図46 河川跡50出土遺物実測図(1)

底部外面は主に横方向のヘラミガキである。遺構136出土。303、304は須恵器の蓋、杯で、重なった状態で出土した。303の天井部の3/4は回転ヘラケズリ、天井部の1/4と口縁部は回転ナデ。天井部と口縁部の境にヘラ描きの沈線を巡らせる。口径14.2cm。304は杯身で、口縁部は内傾して立ち上がる。杯部外面の1/3は回転ナデ、底部の2/3は回転ヘラケズリである。遺構51出土。305は高杯で、口縁部は内傾、湾曲して短く立ち上がる。杯部外面の回転ナデの範囲が広い。脚部を欠くが3方に透かし孔が観察される。306は須恵器の壺で、肩の張った胴部から短く立ち上がる口頸部をつくる。底部は回転ヘラケズリ。口頸部を含めた胴部と内面は回転ナデで整形する。口径8.5cm、器高12.7cm。305、306は、河川跡54出土。307は須恵器の甕で、棺に使用されていた。開いて立ち上がる胴部上半に最大径があり、張りのある肩部から締まった頸部をつくる。口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部は摘まみ上げて垂直の外面を強くヨコナデする。体部は肩の張った胴部からすぼまったく底部を作る。胴部は細い縦方向のタタキ、内面は2種の同心円文の当て具痕を残す。復元口径27.4cm、器高483cm。308は壺の口縁部。まっすぐ立ち上がる頸部から短く外反する口縁部を作る。309、310は須恵器の杯身でⅡ-3~4段階頃のもの。307~310は土坑49出土。311は瓦器椀で、器高が低く、内面は見込みから口縁部の近くまで粗い渦巻き状の暗文を巡らせる。底部は小さな粘土紐を貼り付けた高台が辛うじて残る。土坑49近くの河川跡の埋土の砂層内から出土したが、他に同時期の遺物は出土していない。

土坑46(図44、図版59)

312は須恵器の甕の胴部で、体部外面は縦方向のタタキ目が見られ、内面は同心円の当て具の痕をナデている。口縁部~頸部、底部を欠損している。

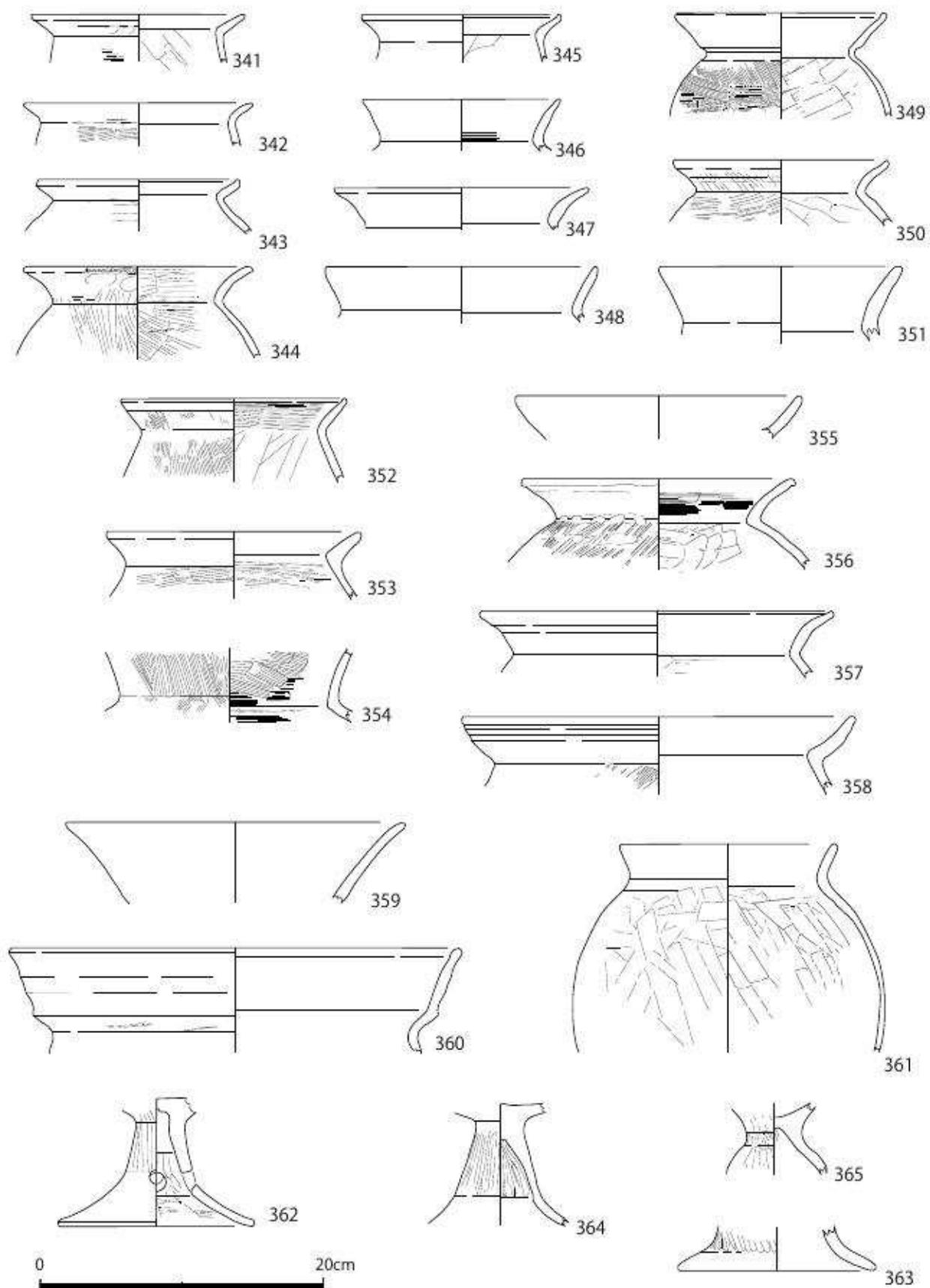


図47 河川跡50出土遺物実測図(2)

土坑48、遺構52・56・57・141(図45、図版60・62・63)

313は須恵器の杯蓋で、口縁部と天井部を分ける段がなくなるII-5段階頃のもの。314、315は須恵器の杯身で、口縁部は内傾して短く立ち上がる。II-3~4段階頃。316は須恵器の甕の口縁部で、口縁端部は水平な面をつくる。313~316は遺構57出土。317は土師器の壺で、やや開き気味に立ち上がる口縁部はナデ、小さく膨らむ胴部外面は細かいハケ目、内面は板ナデで調整する。土坑48土器棺の「栓」として使用されていた。318は土師器の鉢で、口縁部は外湾して開き、端部は僅かに丸く肥厚させる。遺構52出土。319は須恵器の脚部で、遺構56出土。320は須恵器の杯蓋で、土坑48付近から出土。I-5段階頃のもの。321は須恵器の短頸壺。マキアゲミズビキ成形で、内面に粘土を巻き上げた凹凸が残る。胴部は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ。II-2~3段階頃に類例がある。遺構52の石敷棺部から出土。322、323は須恵器の杯蓋で、天井部下端に弱く沈線を巡らせる。324は須恵器の杯身で、口縁部は内傾して短く立ち上がる。回転ナデの範囲が広い。II-4段階頃。322~324は遺構141出土。325は須恵器の短頸甕。口頸部は短く垂直に立ち上がり、口縁端部は水平な面をつくる。口頸部はヨコナデ調整。体部は張りのある肩部からなめらかに窄まる胴部をつくる。外面は縦方向の細かいタタキ目、内面は同心円の当て具の痕を残す。土坑48の土器棺。

河川跡50(図46~図49、図版64・65)

河川跡50からは縄文土器から古墳時代の土器まで出土している。縄文土器は細片で、図化できるものは無かった。326は弥生時代後期の壺の口縁部。締まった頸部から外反して開く口縁をつくり、端部は垂下して拡張する。口縁部外面に4条の沈線と円形浮紋を貼り付ける。327は壺、328、329は甕の口縁部。330は壺の頸部で、簾状紋を描く。茶黒色で、生駒西麓産の土器である。331は壺の口縁部で、簾状紋と2条の凹線紋を施す。和泉地域の胎土である。332は長頸壺の口縁部。333~340は底部破片で、333は弥生時代中期、334~339は弥生後期頃のもの。341~348は弥生時代の甕で、341、342は体部にタタキ目が残る。343は河内地域の胎土で、胴部が膨らむ弥生時代中期の甕。344は内外面をナデで、口縁部内面はヨコナデで調整する。350、352、353は弥生時代の甕の口縁部で、352は中期のもの。351は壺の口縁部、355は鉢の口縁部。356~358は甕の口縁部で、体部外面に粗いタタキ目が残る。354は頸部、接合痕が残る。349は頸部を強くヨコナデし口縁端部を肥厚させる。胴部外面は

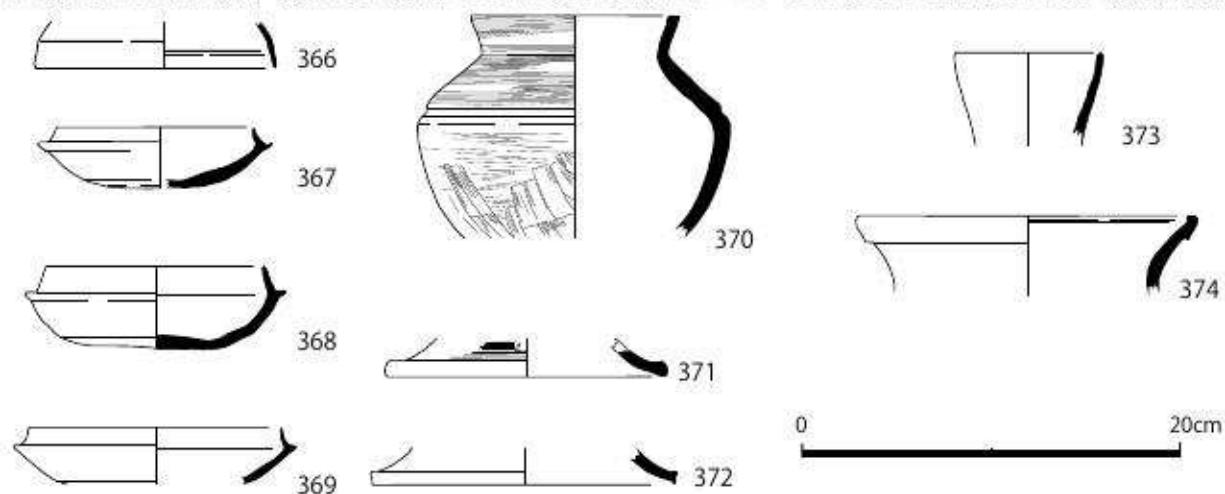


図48 河川跡50出土遺物実測図(3)

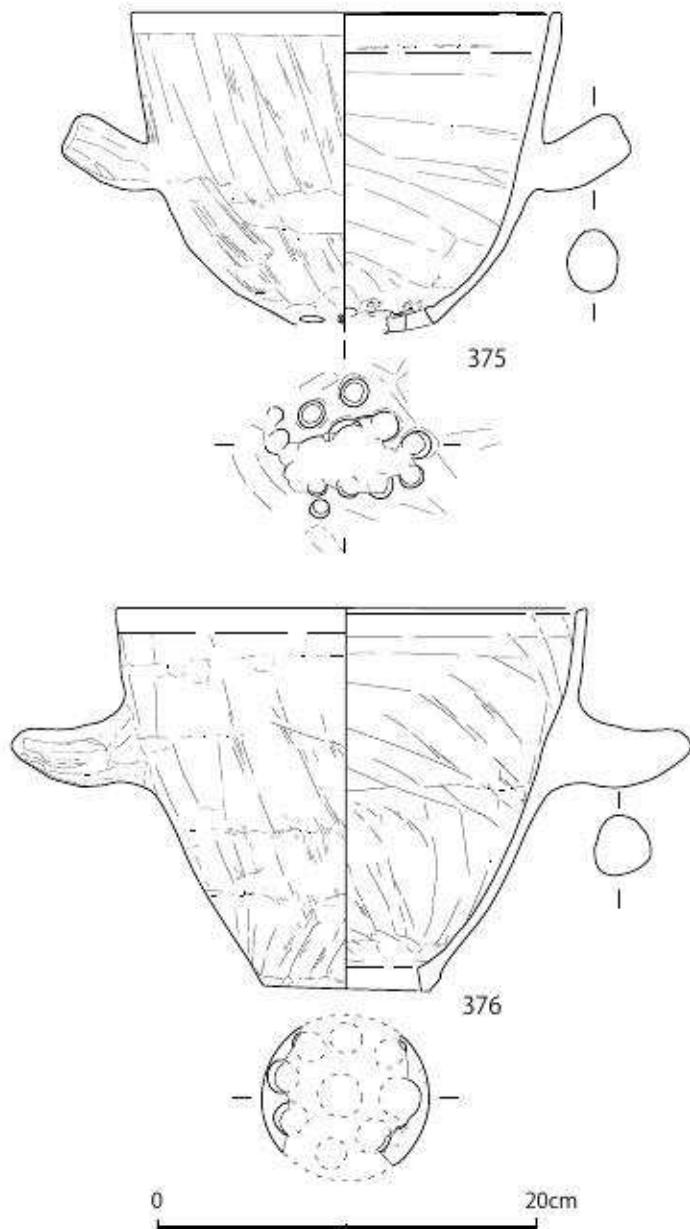


図49 河川跡50出土遺物実測図(4)

ハケ目、内面はヘラケズリする布留式の甕。359は高杯の口縁部。360は二重口縁の壺。361は短く開く口縁部をもつ甕である。362～365は高杯の脚部で、古墳時代のもの。366～374は須恵器。366は杯蓋。天井部下端に稜の痕跡をつくる。367～369は杯身で、口縁部は短く内傾する。底部外面は回転ヘラケズリ、杯部の回転ナデの範囲が広い。370は短頸壺で、肩部外面は肩部にカキ目、胴部下半は下から上へヘラケズリ。肩部下端に沈線を1条巡らせる。371、372は脚部破片。373は短く開く壺の口縁部。374は須恵器の甕の口縁部である。375、376は土師器の甕で韓式系のもの。375は底部に10数個の円い透し孔を開ける。底部は丸底に近い。把手は稜をつくるがあまい。端部は面をつくる。外面は斜め縦方向、内面は横方向の板ナデ、口縁部はヨコナデで仕上げる。口径22.5cm、器高17cm前後を測る。376は平底の底部の外周に沿って、9個または10個の透かし孔をあける。体部外面は縦方向の強い板ナデ、内面は横方向の板ナデで調整するが、積み上げた粘土の接合痕が各所に残る。胎土は375が橙色から黄褐色、376は橙色である。

河川跡142・143(図50、図版66)

N区の下層は河川跡であるが、調査区に隣接する倉庫の基礎の影響で河川の肩を明確に検出できなかった。砂礫と土砂の状態から基礎から北側を河川跡142、南側を河川跡143として遺物を取り上げた。

377、378は壺の口縁部、379は壺か鉢の口縁部である。380は甕で、肩部にタタキ目が残る。384は鉢。胴部内面に板ナデののち指オサエ。381、382は古墳時代初めの小型壺、383は甕の口縁部である。385～387は底部で、弥生時代後期のもの。388は壺の体部。389は製塩土器の脚部である。390～392は高杯の脚柱部、脚部である。390は杯部を円盤充填している。393、394は弥生時代の壺の口頸部。394は頸部の内面に密なヘラミガキを施す。395、398は黒色土器Aで、395は口縁端部内面を強くヨコナデして浅い沈線をつくる。398は高台で、見込みに密なヘラミガキを施す。396、397は須恵器の杯蓋と杯身で、杯蓋は平らな天井から外弯する口縁部をつくる。杯身は口縁部の立ち上がりが短く内傾

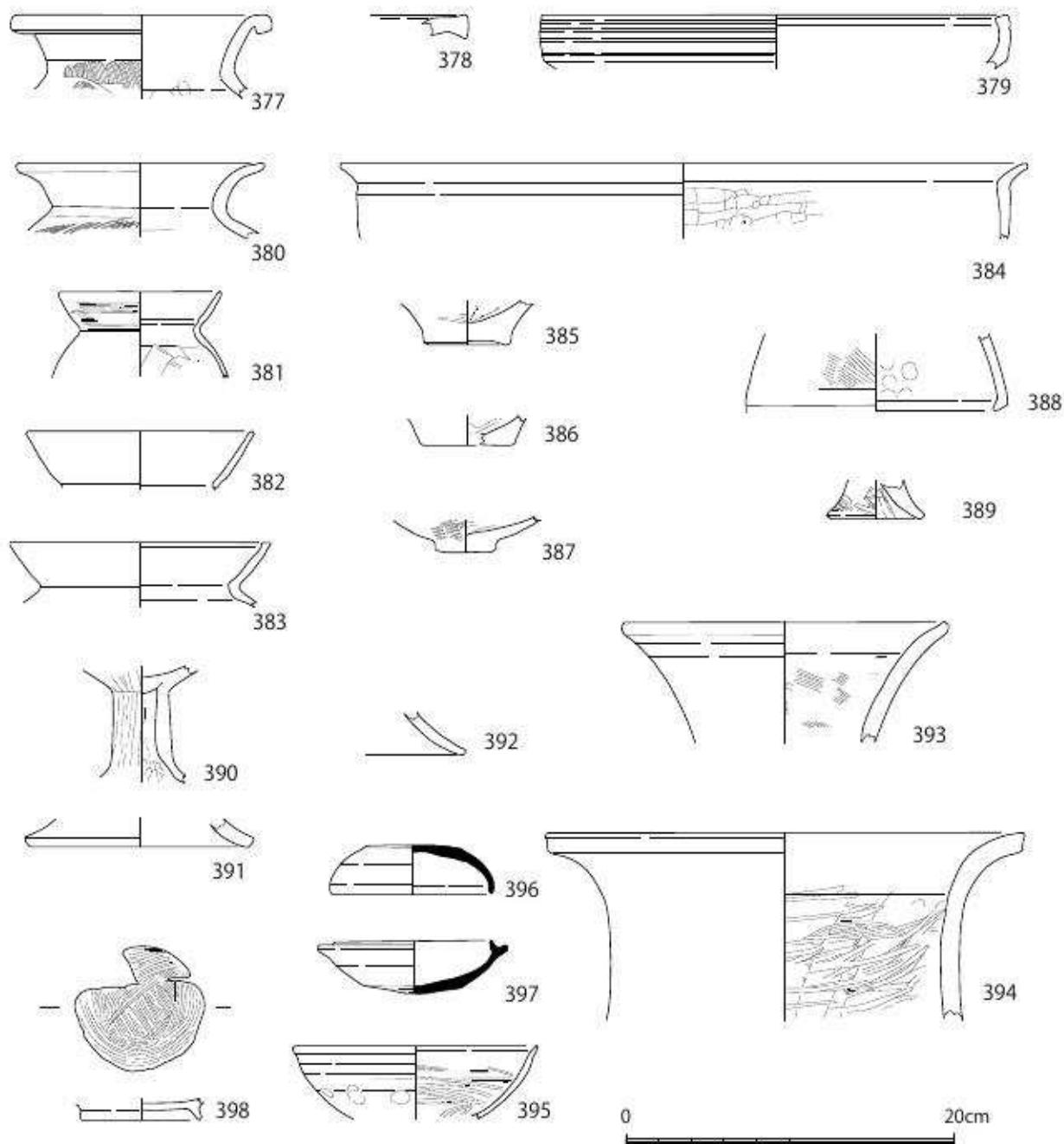


図50 河川跡142・143出土遺物実測図

するII—5段階頃のもの。

灰褐色土・黄灰色土(遺物包含層)出土の遺物(図51～図53、図版63・67・68)

399～401、404～408は甕の口縁部で、丸く外反させるものと「く」字形に折り曲げるものがある。399は口縁端部を上につまんで丸くおさめる。402は高杯の口縁部で、杯部内面に放射状の暗文を描く。口縁部外面は強くヨコナデして棱をつくる。杯部外面は横方向のヘラケズリで調整している。堅緻な焼成で、搬入品である。403は皿の口縁部で口縁端部をつまんで円くおさめる。402、403は奈良時代のものである。調査地の約300m西に「御館山」の字名が残り、国庁の一画と推定されているが、後世に削平されたのか、和泉国が設置された奈良時代の遺構や遺物は殆ど出土していない。小破片であるが注

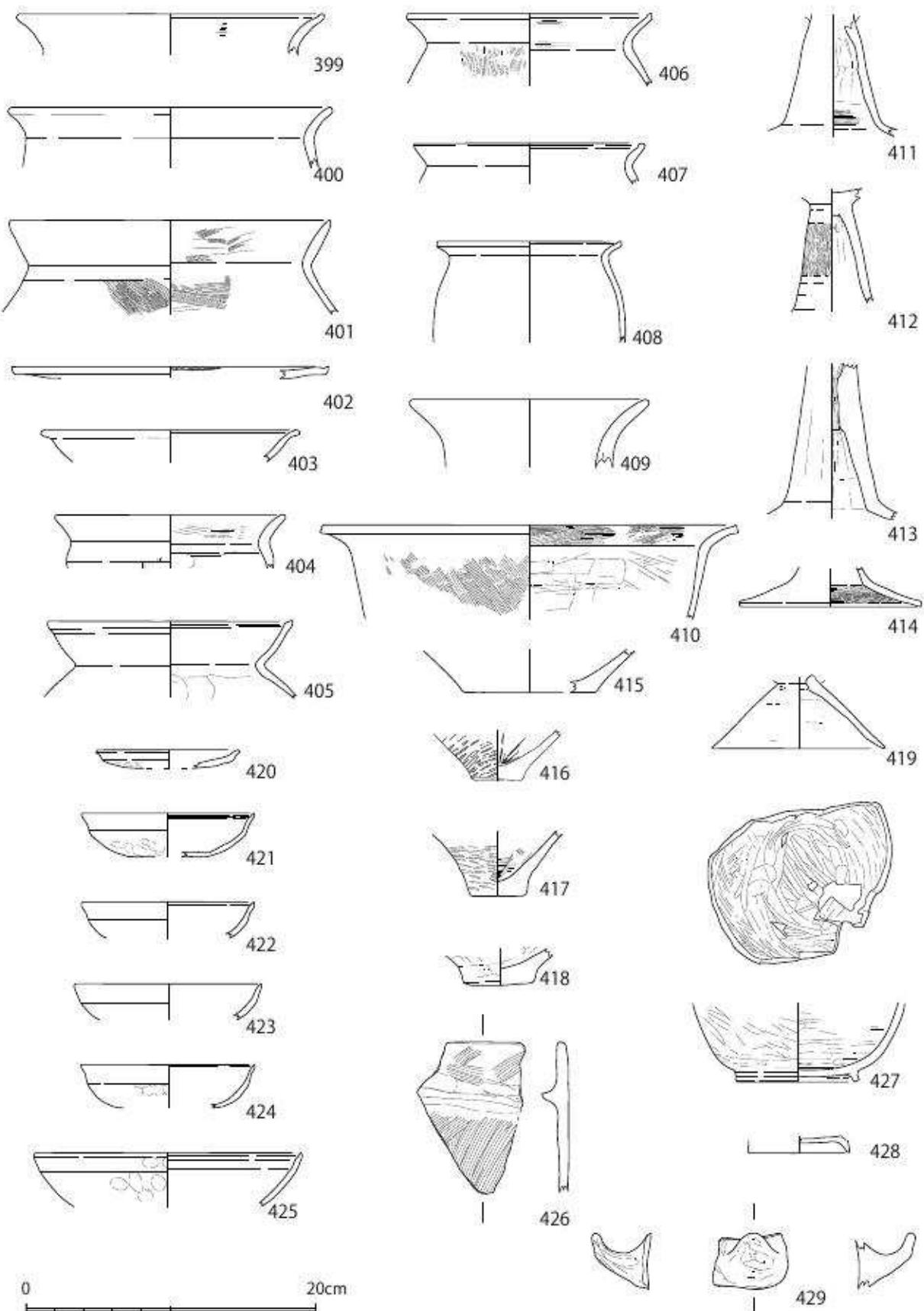


図51 灰褐色土出土遺物実測図(1)

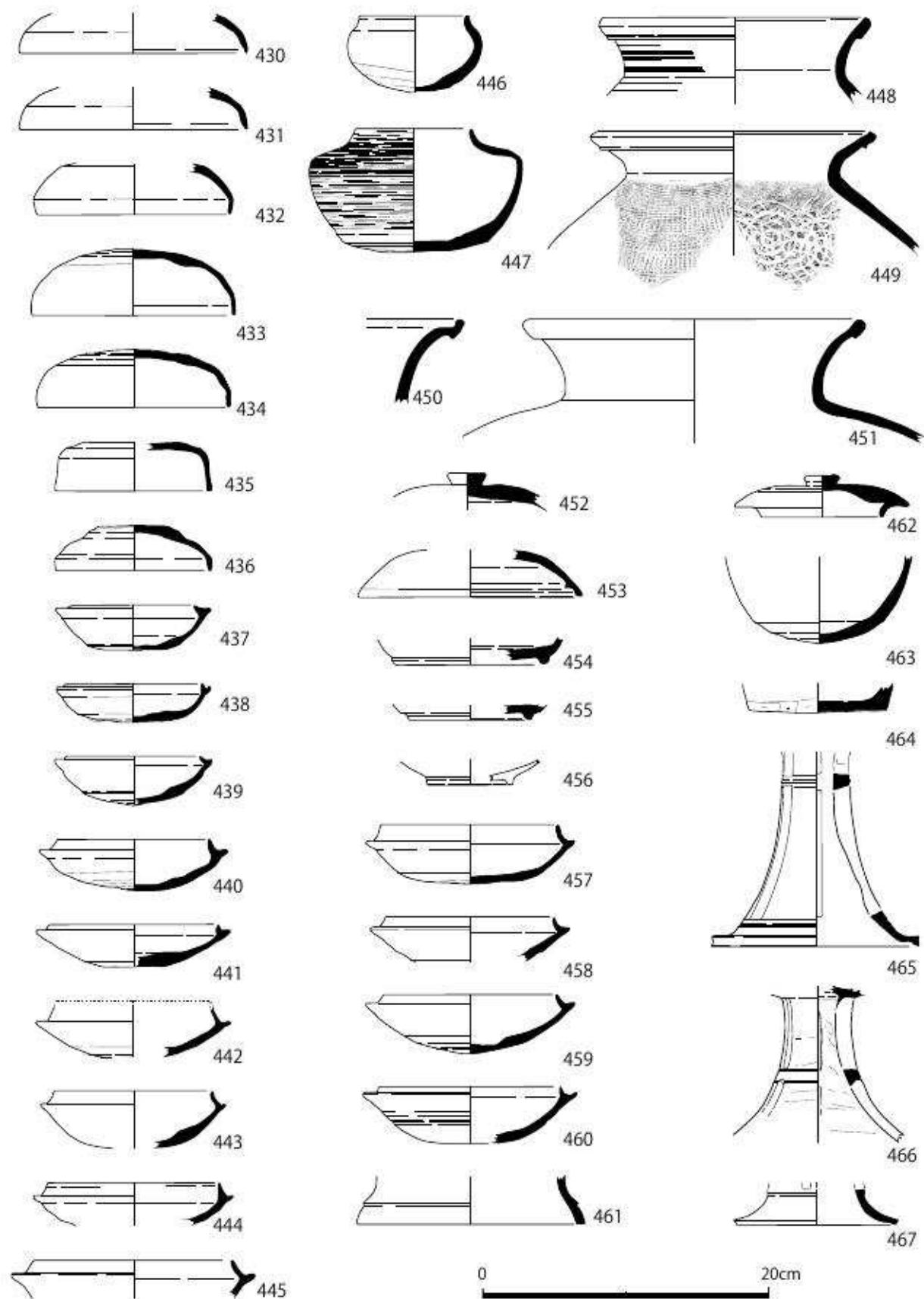


図52 灰褐色土出土遺物実測図(2)

目される。409は壺の口縁部で弥生時代後期のもの。410は鉢で、胴部外面はハケメ、内面は板ナデで調整する。411～414は高杯の脚部で、古墳時代のもの。415～418は底部で、415は弥生時代中期の壺、416～418は弥生時代後期の甕である。419は古墳時代の小型器台の脚部である。420は平安時代の小皿で、胎土は赤い。421～424は杯の小破片で、421、423は体部外面に指頭痕が残る。424は薄茶色の胎土で、河内地域のもの。これらは平安時代中期頃のもの。425、427、428は黒色土器Aで、427は大型の椀で、体部内面に密なヘラミガキを施す。428は高台部分で、内面は摩耗しており、整形を観察できない。429は土師器の把手、426は移動式竈の破片である。430～467は須恵器である。430～434、436、452、453は杯蓋で、天井部は丸みをもつが、下端の稜がなくなるII-3～4段階頃のもの。430、431は復元口径15.8cm。436はII-5～6段階のもの。435、462は壺の蓋で、435は8～9世紀のもの。462はかえりが口縁端部より下に伸びる。II-5段階頃のものにも類例があるが、もう少し下るかもしれない。452はつまみ部分。453は内面に小さなかえりを持つIII-3段階頃のもの。437～445、457～460は古墳時代の杯身で、口縁部が内傾して短く立ち上がり、底部の1/3前後を回転ヘラケズリする、II-3～6段階のものが多い。438は立ち上がりが短く、受け部が小さくV字形である。完形で、底部外面はケズリが小範囲で、粘土紐のマキアゲ痕がいびつに残る。454、455は杯の高台である。456は、平安京近郊窯産の硬陶の縁釉陶器で、輪高台を有する椀である。高台内部は無釉である。446、447は短頸壺で、447は体部にカキ目、底部はヘラケズリが薄く残る。448、449、451は甕で、口頸部を外反させ、448、451は口縁端部を外に折り曲げ面をつくる。頸部外面はヨコナデ調整。449は口縁端部をわずかに摘まみ上げる。胴部外面は縦方向の細かいタタキ目の後にカキ目調整する。450は開いて立ち上がる口縁端部を大きく外反させ、上下に拡張して面をつくる長頸壺の口縁部で、IV-3～4段階頃のもの。461は器台の脚部である。463は壺の底部で、底部外面は回転ヘラケズリ、胴部は内外面とも回転ナデ調整。464は平底の底部で、底面との境をヘラケズリする。465～467は長脚2段の高杯脚部で、465は外反して開いた脚端部を下に屈曲させ、強くヨコナデして面をつくる。

468は遺構50の肩付近から出土した小型丸底壺で、胴部外面はヘラケズリに近い粗いヨコナデ、口縁部は幅の狭い原体によるヨコナデである。器面全体に爪や工具の小さな当たり痕が残る。469は壺の口縁部で、N区の河川跡の砂礫層の上部から出土。470は口縁部が屈曲して開く複合口縁の甕で、頸部は内外面ともハケ目、口縁部はヨコナデで調整する。古墳時代中期のもの。平安時代の河川跡の上層から出土。471は壺であろう。胴部の器壁が厚い。平安時代の河川跡の最上層から出土。472～475は「く」字形に外反する甕の口縁部。472は口縁端部内面に肥厚が微かに残る。473は口縁部が僅かに屈曲して開き、外面を強くヨコナデして複合口縁風につくる。474は頸部の破片で、古墳時代のもの。475は小片であるが「く」字形に短く折れ曲がる口縁端部をわずかに拡張させて面をつくる。平安時代のもの。492、495はタタキ目の残る弥生時代後期後半から古墳時代初頭の底部。496は同時期の壺か、鉢の底部である。494は高杯の脚部。476～491は須恵器である。476～479は6世紀中葉から7世紀初め頃の杯蓋で、丸みをもった天井部からなだらかに口縁端部に至る。479は口縁部が屈曲し、端部は内傾する面をつくる。II-3段階のもの。480～482は杯身で、口縁部は短く内傾して立ち上がる。480はII-6段階のもので、口縁部の立ち上がりが受部より僅かに高い程度である。器形も小型化している。

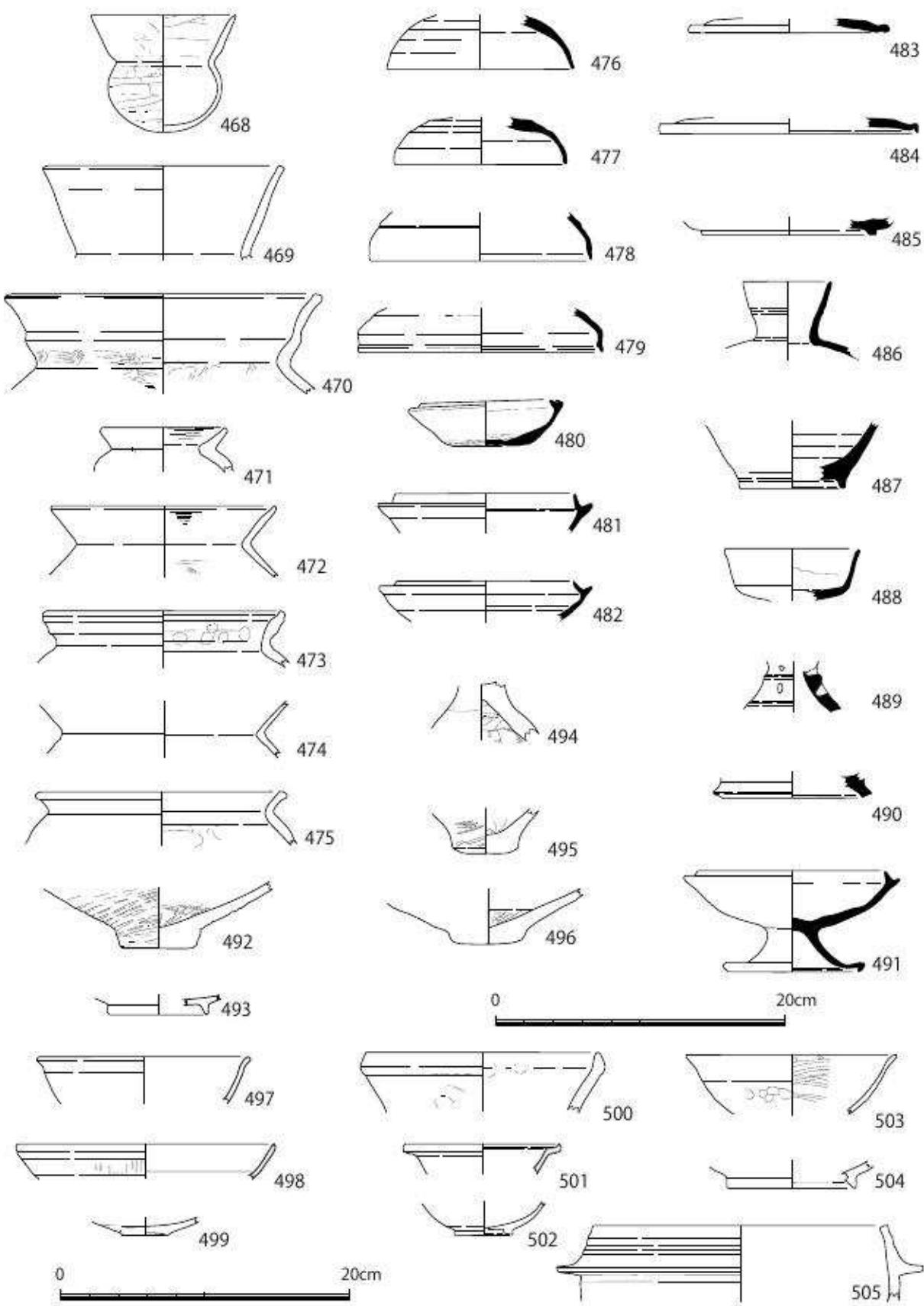


図53 黄灰色土出土遺物実測図

483、484は杯蓋で、口縁端部を屈曲させる奈良時代後葉のもの。485は杯の高台。486は壺の口縁部。487は壺の高台。488は杯身か、高杯の杯部である。489は初期須恵器の脚部で、刺突痕を残す。断面はセピア色を呈す。490はおそらく杯の高台であろうが、円面鏡の脚の可能性もある。491は短く内傾する口縁部を持つ杯にラッパ状に広がる脚端部が屈曲する短脚の高杯で、II-6段階頃のもの。493は土師器の椀の高台である。497～499、501、502は磁器の小片で、客土層や遺物包含層から出土したもの。497、498、550は青磁碗で、498は体部に櫛目が残る。499は白磁の底部で、底面は無釉である。502は青磁碗で、口縁部が屈曲して受部をつくる。蓋がつくのである。502は青磁碗の底部で、高台部は無釉である。500は土師器で、甕の口縁部であろう。口縁端部をつまみ上げ、僅かに拡張させる口縁下面にヘラを当てて面をつくる。胎土に風化したチャートの微細片を多く含んでいる。503は瓦器椀で、内面はやや密なミガキが残る。口縁部はヨコナデ、体部に指頭痕が残る。504は黒色土器Aで、椀の高台部の破片である。505は瓦質の羽釜で口縁部の段差がヨコナデ調整により甘くなっている。551は平瓦で布目が残る。552は窯で使用する支脚であろう。

黒色土器は平安時代前期、その他の瓦器や磁器類は小破片で時期を絞れないが、鎌倉時代のものとして大過ないであろう。

古墳時代の土壙墓について

第2区では土器棺3基と石敷の墓3基を検出した。このほかに、完形や完形に近い残りの土器が数多く出土している。これらの土器は副葬されたか、墓壙そばに供献されたと考えているが、墓壙の輪郭や木棺等の痕跡を見つけることができなかった。遺物から古墳時代前期から7世紀代頃の墓が多数あったと考えられる。土器では、土師器は4世紀末から5世紀前半の土師器が複数埋納された土壙、甕棺、口縁を塞ぐために使用された壺、遺構57の石敷の上から出土した甕などがあるが、須恵器では、大甕を棺に用いたものが3基、蓋(覆い)に用いられたものが1基あり、陶邑に近いことを感じさせる。

古墳時代の一般集落構成員の墓として、集落周辺で木棺墓や土器棺墓、棺に納めずそのまま葬る土壙墓の存在が知られている。昭和40年代には高槻市の今城塚古墳の北方にある狐塚古墓群で、4基の方墳(方形周溝墓)とその西側で約600基の土壙墓が検出され、古墳に葬られない一般集落民の群集土壙墓として注目された(森浩一他『大阪府史』第1巻)。

近辺の遺跡での土壙墓群の類例として、調査地の北東約4.5kmに位置する菱木下遺跡と万崎池遺跡、やや離れるが東北東約19kmに位置する藤井寺市の道明寺遺跡を紹介する。

菱木下遺跡は堺市西区菱木に、万崎池遺跡は菱木下遺跡の東側に隣接する。共に府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査で、古墳時代から平安時代初頭の土壙墓群が検出されている(芝野他「西浦橋遺跡・菱木下遺跡・万崎池遺跡・太平寺遺跡発掘調査報告書」)。菱木下遺跡では第II区と第III区にまたがる38m×42m(約1600m²)の範囲で、古墳時代から奈良時代までの380基以上からなる土壙墓群が確認されている。土壙墓群は、西側1区で確認された住居域から約150m離れており、集落の外縁部と考えられる。微地形は幅約40mの浅いなだらかな谷部で、西側平坦面とは0.2m、東側台地部とは0.8mの比高差がある。僅かな高さの差であるが、水捌けが悪く堅穴住居や掘立柱建物には適さない場所を墓地に選んでいたことが窺える。土壙墓群中央には幅約10mの空白地帯があり、南北に通る墓道があったと考えられている。また、墓域の北は調査区外に広がるが、南及び東西は調査区内と考えられている。

墓壙の規模は長径1mから1.5mを測るもののが最も多い(約61%)が、1m未満(約13%)のものから長径1.5mを超えるもの(約26%)もあり、調査者は幼児から成人まで集落民をあまねく埋葬したと考えている。副葬品のある土壙墓は25基で、全体の7%に満たないが、土壙の切り合いから副葬品をもつものは初期に造られたものに多い傾向があるとされる。また、遺体を大型須恵器で覆ったものが10基、遺体の下に須恵器を敷いたものが1基見つかっている。この中で複数の副葬土器を持つのは1基、須恵器で覆った墓壙に須恵器杯身を副葬したものが1基ある。

菱木下遺跡では西側第1区の集落、II、III区の土壙墓群、金環や埴輪が出土し、古墳の存在を窺わせる古字名が広範囲に残ることから、調査区外に群集墳があったと推定している。また、住居跡が少ないとことから、土壙墓群や群集墳は、近隣集落の共同墓地として形成された可能性も考えている。また、土壙墓群は副葬品も殆どもたないことから一般集落民が埋葬されたと推定している。

菱木下遺跡の東に隣接する万崎池遺跡でも第IV調査区東端から第V調査区西端で土壙墓群が検出されている。IV区の土壙墓群は、東へゆるやかに傾斜する谷部にあり、IV区では24m×12m、約290m²の範囲で約280基、V区では45m×18mの約800m²の範囲で約180基の、約460基が検出されている。

IV区をみると、土壙墓は相互に切り合っているものが多いが、平面形は楕円や隅丸方形、円形のものがある。墓壙の規模は菱木下遺跡と同様に切り合っているものが多いが、長径が0.5m以下から2m近いものまである。長径1m以下が約76%、1~1.5mが約23%、1.5m以上が約1%である。出土遺物は、IV区で須恵器が出土した土壙墓は53基(約20%)であるが、切り合いによる破片の移動があり、副葬品をもつ墓はさらに少ないと考えられる。また複数の土壙墓で出土位置から須恵器の杯や提瓶、俵壺、甕が枕として使用されたと推測される。一方V区西端では、台地の北側斜面から浅い埋積谷を選地して、円形や楕円形、隅丸方形を呈する土壙墓が約200基造営されている。このうち長径が分かるのは179基あり、1m以下が88基(49%)、1~1.5mが67基(37%)、1.5m以上が24基(?)でIV区と比べて1m以上のものが多い。V区は弥生時代の遺物のみが出土した土壙墓があるが、須恵器出土土壙墓と変わりがないことから、あえて弥生時代の土坑とせず、須恵器出現以前の可能性の高い土壙墓としている。V区では5世紀後半から平安時代初めの須恵器が出土しているが、6世紀後半ものが多い。また、土壙の底に棺状に据えるもの、破片を枕状に置くもの、土壙上層にはほぼ完形のものを置くものなどがある。須恵器で遺体を覆ったり、枕を置くのは須恵器生産地に近いこの地域の特徴であろうか。

次に、府中遺跡の東北東約19kmにある、藤井寺市道明寺に所在する土師ノ里遺跡の古墳時代の墓域を紹介する。調査地は国府台地の一画、誉田山古墳と仲津山古墳の間にあり、約900m東を北流する石川までなだらかに傾斜している。

府営道明寺南住宅建て替えに伴って発掘調査が実施され、帆立貝式古墳2基と小型方墳4基、古墳時代から平安時代頃の土壙墓9基、埴輪棺墓36基、木棺墓3基、火葬墓18基と土壙墓と考えられる密集土坑が約300基検出されている。ともに帆立貝式古墳の盾塚古墳、鞍塚古墳は5世紀前葉から中葉の築造。方形墳は5世紀前葉1基、5世紀後半2基、時期不明1基である。円筒埴輪棺では、31基中4基で時期が特定でき、5世紀後葉から末が2基、7世紀が2基である。7基が検出された土器棺墓は、8世紀代が6基、9世紀後葉~10世紀1基となっており、奈良時代から平安時代に、土釜や土鍋、甕などの土器が棺として利用されている。火葬墓は16基中3基で時期が分かっており、8世紀後葉2基、

9世紀後葉～10世紀1基である。僧侶や地域の上層階級の葬送方法であろうか。

9基の土壙墓では4基で時期が比定されており、古墳の築造時期と重なるのは1基、残りは7世紀前葉と後葉が各1基、9世紀後葉頃が1基で、埴輪棺や土器棺と同じである。

上記の土壙墓以外に、誉田山古墳と仲津山古墳の間の東側の東西50m、南北30m以上の範囲で、約300基の土壙が検出されている。土壙の多くに重複関係がある。完形の土器が出土した土壙もあるが、出土遺物は少ない。土壙の時期は、墓域と重複していること、羽釜棺、火葬墓、木棺墓などが営まれた時期とある程度重なることから、7世紀代以降とされる。

しかし、上記したように、仲津山古墳や誉田山古墳、鞍塚古墳、盾塚古墳、方形墳が5世紀前葉とされること、円筒埴輪棺や木棺墓も5世紀代に営まれたものもあることからこれらの土壙墓群も5世紀頃から営まれたと考えることも可能であろう。

このように、仲津山古墳や誉田山古墳、盾塚、鞍塚の周辺は造墓地として古墳時代中期から平安時代まで、古墳や土器棺墓、土壙墓や火葬墓など様々な形態の墓が営まれていた。この地域に集落が立地するのは、鞍塚古墳の西側で平安時代前葉の掘立柱建物が1棟検出されているほかは、主に中世以降であり、古墳時代から平安時代まで数百年にわたって造墓地という共通認識が広くあったのであろう。

一方、菱木下遺跡や万崎池遺跡は時期が限られることもあるが、副葬品を伴うものも少なく、比較的均質である。首長層は古墳に葬られ、一般集落民の共同墓地的なものであったのであろう。

200基以上の土壙墓群が検出された各遺跡をみると、大小の古墳が群在する中にある土師ノ里遺跡を除いて菱木下遺跡や太平寺遺跡では、集落近辺の低地に近い場所が選ばれている。また殆どの土壙墓が切り合っており、集落内の集団により埋葬される場所が決まっていた可能性が高い。土壙の規模が記されている菱木下遺跡や太平寺遺跡では、伸展葬とみられる長径2mに達するような土壙墓は少なく、1.5m前後のものが多く、棺に納められず、屈葬に近い体勢で埋葬されたと考えられる。

今回の府中遺跡第2区の調査では、5世紀前半頃に北流する河川跡を検出した。調査地の南約600mの所を北西に流れている楨尾川の分流か支流と考えられ、調査地ではほぼ北流している。5世紀前半には流路が移動し、調査地一帯は河原となっていたが、砂質土で保水力が低く、耕作には適していなかったと思われる。その地が菱木下遺跡や万崎池遺跡の浅い谷部が墓地として利用されたのと同じように集落民の墓地となったのであろう。調査では、石敷墓や土器棺墓を多数検出したが、墓壙の掘形を全く把握することができなかった。菱木下遺跡、万崎池遺跡とも土壙墓に土器が副葬されていたのは10%以下である。当遺跡でも大差がないと考えれば、副葬土器を持たず、遺体だけが埋葬された土壙墓が数十基は営まれていたであろう。

今回3カ所で見つかった石敷棺台については、土坑49は長径が約1.5mあり、成人用と思われるが、他の2カ所は共に長径0.6mであり、小児の棺台と思われる。土器を碎いて蓋にしていることから、木棺等に納めず、そのまま棺台に乗せたと考えられる。古墳では石室の水捌けに川原石を敷き詰めることは多々あるが、土壙墓ではあまり例を見ない埋葬方法であり、副葬土器もあることからも有力者の子供の墓と考えてよいであろう。

古墳時代の和泉地域では、一般集落民は共同墓地が集落近辺にあり、家族や集団単位で埋葬場所が決められていたのであろう。このため土壙同士が数カ所で切り合うようになったのであろう。

第3節 府中遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

三辻利一・犬木 努

第1項 はじめに

土器は最もありふれた考古遺物の一つである。したがって、土器の伝播、流通を通して、過去を再現する研究は考古学にとっては極めて重要な研究といえる。土器の伝播、流通の研究を進めるためには、生産地の土器の間に地域差があることを実証しておかなければならぬ。しかしながら、これまでのところ、土器型式や製作技法などの考古学的方法のみならず、元素分析や鉱物分析などの自然科学的方法でも、地域差に関する基礎研究は十分に行われていない。土器は「もの」である。「もの」を研究対象とする自然学者も土器の産地問題の研究に参加することになった。

古代土器の中で生産地である窯跡が全国各地に残っているのは古代最大の窯業生産の産物である須恵器だけである。しかも、行政発掘によって、多数の須恵器窯跡が全国各地で発掘調査されており、そこから出土した大量の須恵器破片が全国各地の教育委員会に保管されている。窯跡出土須恵器ほど、産地問題に関する基礎研究の絶好の分析対象となる土器はない。このことに気がついた三辻は全国各地の窯跡出土須恵器を40余年間にわたって大量に分析し、窯跡のみならず、窯跡群間にも地域差があることを実証した。さらに、窯跡群の後背地の地質を構成する花崗岩類の岩片試料を大量に分析し、花崗岩類にも地域差があることを実証した。

地域差の原因は花崗岩類を構成する主成分鉱物、長石類である。造岩鉱物を構成する長石類は斜長石、カリ長石、曹長石の3長石類である。斜長石に富む花崗閃緑岩には、Caが比較的多く、Kは比較的少ない。これに対して、カリ長石に富む花崗岩にはCaは比較的少なく、Kは比較的多い。花崗閃緑岩と花崗岩を併せて「花崗岩類」と呼ぶ。「花崗岩類」はK-Ca、Rb-Srの両分布図上で「花崗岩類のベルト帯」を形成し、地域差を示した。また、全国各地の窯跡群出土須恵器は「土器領域」の第2象限から第3象限を経て、第4象限にかけて双曲線状に分布し、後背地の花崗岩類の化学特性に対応した。このことから、窯跡群出土須恵器の地域差の原因も母岩の長石類であると考えられた。この地域差を活用すれば、元素分析法による土器の産地問題の研究を推進することができる。

これまでに集積してきた基礎データを使って、府中遺跡出土須恵器の産地を探ってみた結果を報告する。

第2項 分析法

須恵器片試料は表面を研磨し、自然灰釉などの表面付着物を除去したのち、タンゲステンカーバイド製の乳鉢で100メッシュ以下に粉碎した。粉末試料は塩化ビニル製のリングを枠にして、電動圧縮機で高圧をかけてプレスし、内径20mm、厚さ3mmの鋸剤試料を作成し、蛍光X線分析用の試料とした。

蛍光X線分析には、大阪大谷大学に設置されている理学電機製 RIX2100(波長分散型)を使用した。この装置には50試料が同時に搭載できる自動試料交換器が連結されており、完全自動分析ができる装

置である。

分析値は同じ日に測定された岩石標準試料 JG-1 の各元素の蛍光 X 線強度で標準化した値で表示された。これを JG-1 による標準化値と呼ぶ。もちろん、他の岩石標準試料を使って、測定された蛍光 X 線強度と含有量の間に直線性があることも確認されている。JG-1 による標準化法は土器の産地問題の研究には不可欠である。検量線法でいちいち含有量を求める必要はない。

データ解析には、「不均質系の分析化学」の考え方が必要である。伝統的な「均質系の分析化学」の考え方では土器の産地問題の研究を進めることは困難である。なぜならば、産地となる窯跡、窯跡群出土須恵器の試料集団が不均質系であるからである。当然、母集団となる窯跡群の須恵器全体も不均質系である。

第3項 分析結果

表2には、今回分析した4点の試料の分析値をまとめてある。このデータをもとに、K-Ca、Rb-Sr の両分布図と、K-Rb、Ca-Sr の両相関図上で地域差を比較した。

図55には、K-Ca、Rb-Sr の両分布図を示す。比較対照の領域として、陶邑窯跡群、朝鮮半島大伽耶・高靈の内谷洞窯跡群の領域を採用した。いずれも、窯跡群出土の多数の須恵器試料を包含するようにして領域は描かれている。一方、一須賀領域については大阪府野中古墳出土の多数の試料を包含するようにして描かれているが、大阪府一須賀窯跡群出土の少数の試料もこの領域によく対応することが確認されている。



図54 試料 No. 4 の写真

その結果、No.1 の試料は両分布図で陶邑領域や内谷洞領域には対応せず、むしろ、一須賀領域に対応すると考えられる。Fe の含有量も多く、Fe 因子でも陶邑群には対応しない。野中古墳出土須恵器と同様、一須賀窯跡群で作られた須恵器である可能性が高い。試料 No.2 と No.3 は全因子で類似しており、同じ生産地の製品である。両分布図での分布位置から、陶邑産の須恵器である可能性が高い。試料 No.4 は No.2、3 とは胎土が少し異なるが、両分布図で一応、

陶邑領域に対応しており、陶邑産の可能性も否定で

表2 府中遺跡出土 韓式系土器・須恵器 蛍光 X 線分析データ

三辻研No	試料 No	種別	出土遺構・ 地層	掲載 番号	分析値					
					K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
30-577	1	陶質 土器	第2区 土壤墓145	図42- 300	0.455	0.231	4.17	0.521	0.393	0.196
30-578	2	須恵器 甕	第2区 土坑48	図45- 325	0.443	0.081	2.70	0.554	0.279	0.195
30-579	3	須恵器 甕	第1区 溝70	図24- 165	0.413	0.089	1.96	0.527	0.264	0.180
30-580	4	須恵器 蓋杯	第2区 黄灰色土	図54- 855	0.381	0.167	2.77	0.467	0.372	0.263

きない。

さらに、図56には、K-Rb、Ca-Sr の両相関図を示してある。K-Rb 相関図では陶邑、内谷洞、一須賀窯跡群の差異は明確ではないが、Ca-Sr 相関図では、花崗岩地域と花崗閃緑岩地域では分布に明らかな地域差がある。花崗岩地域の窯跡出土須恵器は勾配(1:3)の直線沿いに、その下側の領域に分布するのに対して、花崗閃緑岩地域の窯跡出土須恵器は勾配(1:1)と(1:3)の直線の間の領域に分布する。

参考までに、図57には、陶邑・大野池地区の窯跡群出土須恵器の両相関図を示す。試料集団は勾配(1:1)の直線の下側の領域に分布していることがわかる。

他方、図59には野中古墳出土須恵器、図58には内谷洞窯跡群出土の陶質土器の両相関図を示す。いずれも、試料集団は勾配(1:1)と(1:3)の直線の間に挟まれた領域に分布しており、陶邑産の須恵器の試料集団の分布位置とは異なる。陶邑群と野中群、内谷洞群との分布に地域差があることがわかる。

この結果と図56の府中遺跡出土須恵器の両相関図を比較すると、試料No.2、3は両相関図でも陶邑群に対応することが理解される。他方、試料No.1は陶邑群には対応しない。陶邑産の須恵器でないこ

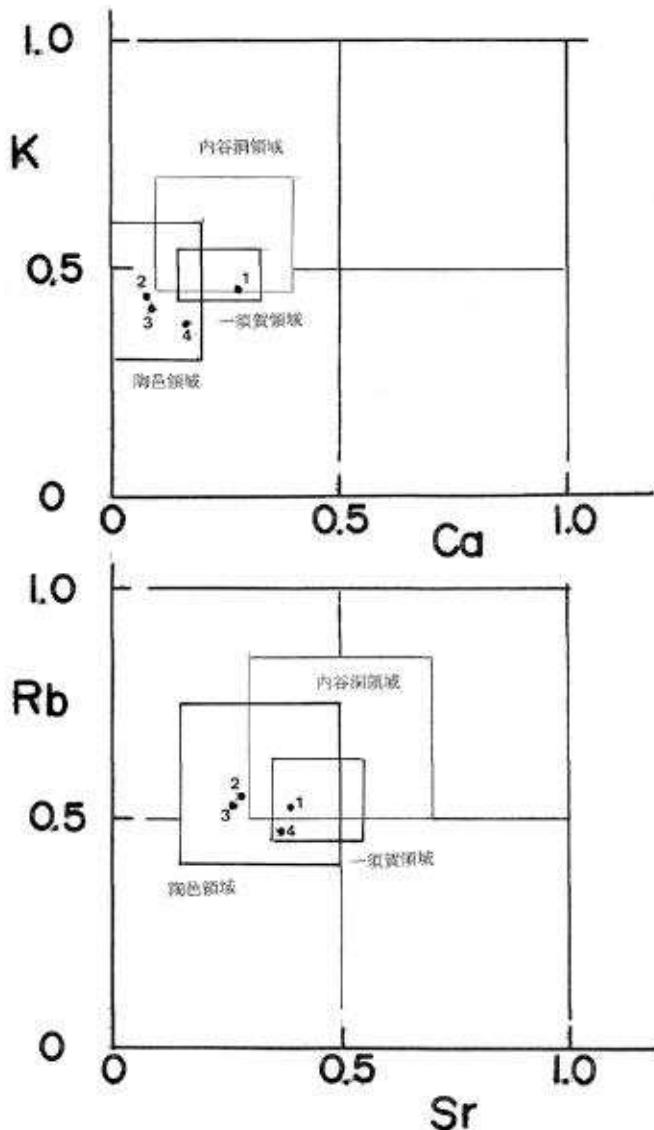


図55 府中遺跡出土須恵器の両分布図

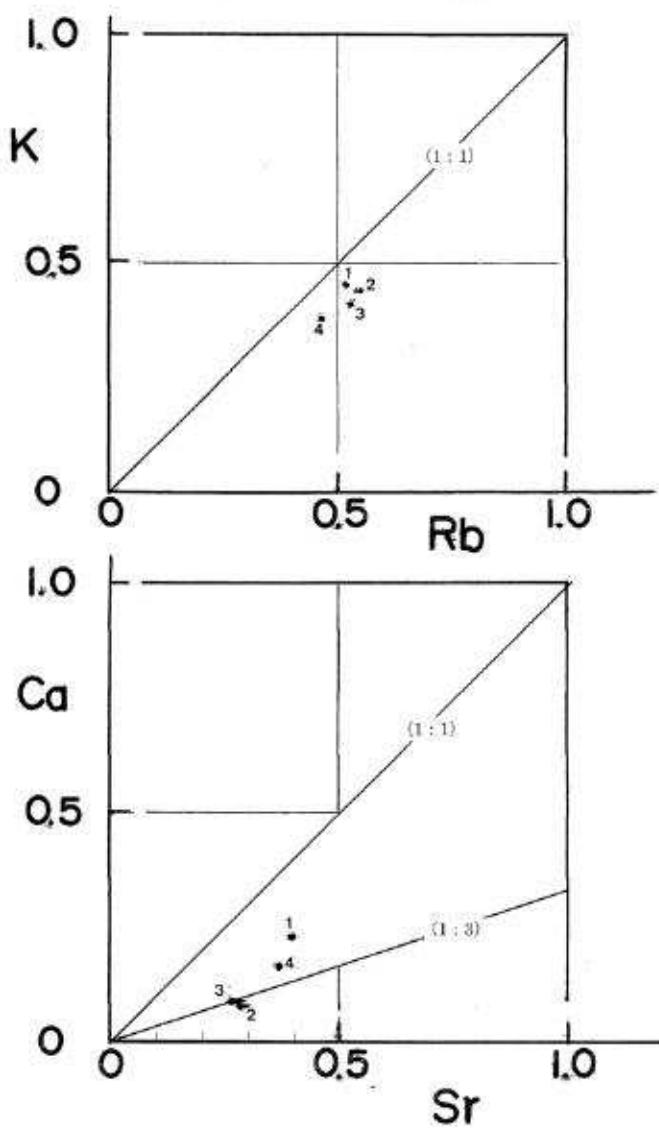


図56 府中遺跡出土須恵器の両相関図

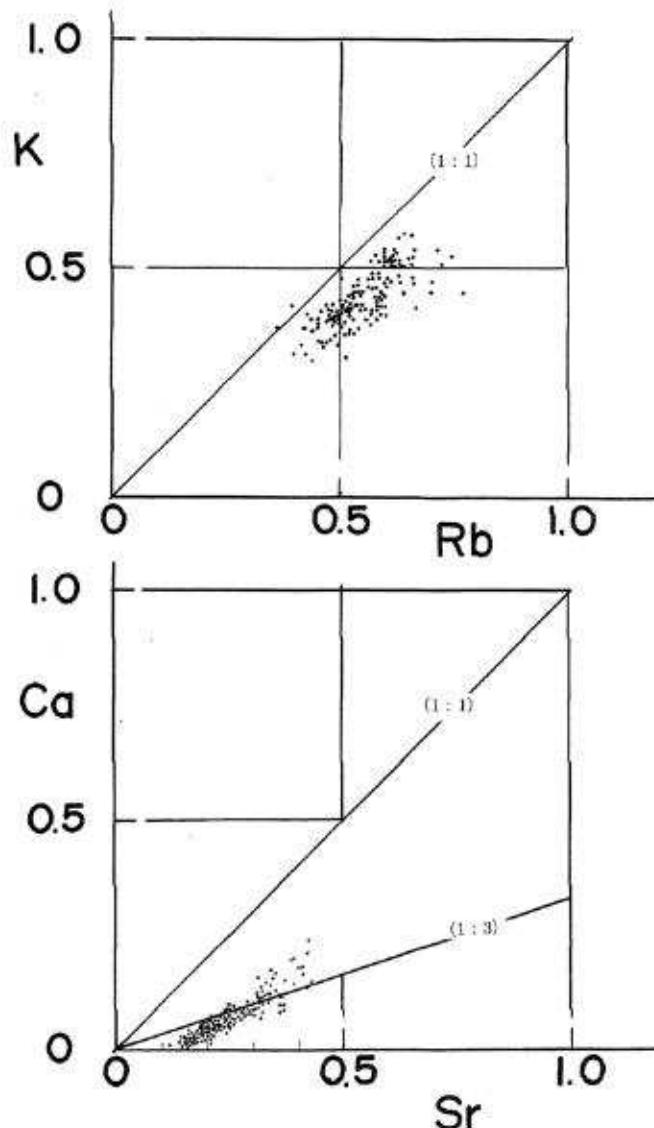


図57 陶邑・大野池地区の窯跡出土須恵器の両相関図

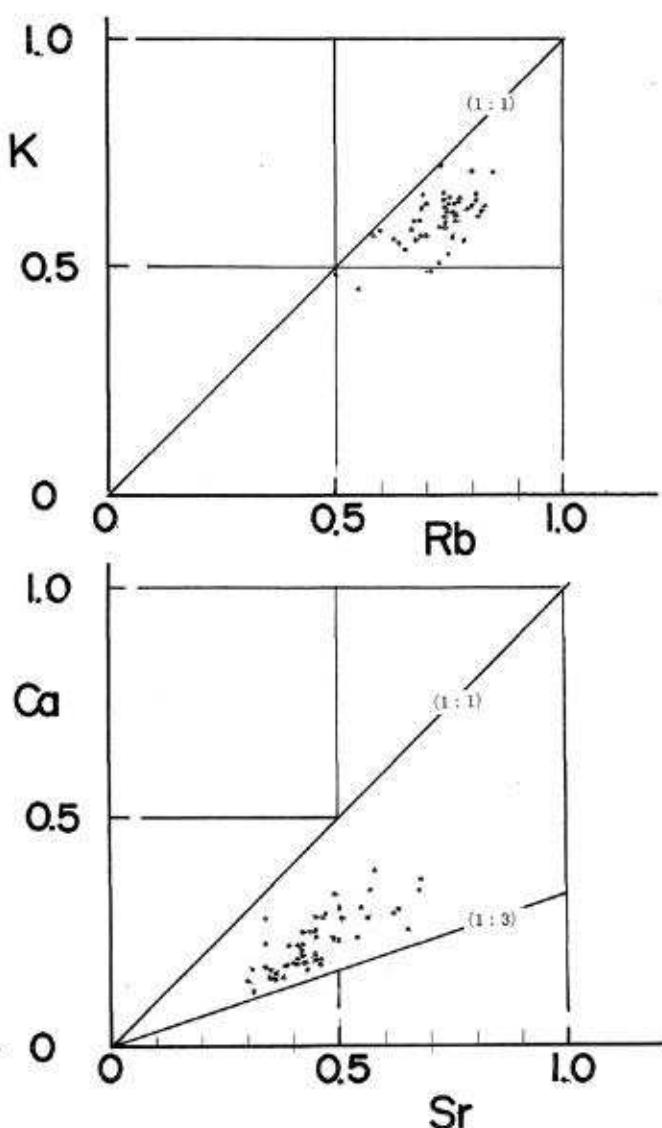


図58 韓国・内谷洞窯跡群出土陶質土器の両相関図

とは明らかである。陶質土器の可能性も否定できないが、野中群にもよく対応する。K-Ca、Rb-Sr 分布図での分布では一須賀窯跡群の製品である可能性が高い。また、試料 No.4 も陶邑群には対応しない。陶邑産ではない可能性があることがわかる。

以上の結果、試料 No.1 は陶邑産ではなく、陶質土器である可能性も含めて、一須賀窯跡群産の可能性が高い。試料 No.2 と No.3 は陶邑産の須恵器である。試料 No.4 は陶質土器ではないし、一須賀窯跡群の製品でもない。陶邑産の可能性も低い。現時点では、産地不明としておく。この推定結果を考古学的に理解するためには、土器型式や製作技法でも確認することが必要である。

参考文献(刊行順)

三辻利一・伊藤晴明・広岡公夫・杉直樹・黒瀬雄士・浅井尚輝2000「K,Ca,Rb,Sr 因子からみた花崗岩類の地域差」
『X線分析の進歩』第31集、アグネ技術センター、109～124頁

三辻利一・松井敏也2002「K,Ca,Rb,Sr因子による須恵器窯の分類」『X線分析の進歩』第33集、アグネ技術センター、73~90頁

三辻利一2010「統計学の手法による古代・中世土器の産地問題に関する研究(第31報) —長石系因子からみた近畿地方の花崗岩類、土壤および窯跡出土須恵器の胎土—」『志学台考古』第10号、大阪大谷大学文化財学科、29~45頁

三辻利一2013『新しい土器の考古学』同成社

三辻利一・中國聰・平川ひろみ2013「土器遺物の考古科学的研究」『分析化学』第62巻第2号、日本分析化学会、73~87頁

三辻利一2015「玄武岩と花崗岩類にみられるK-Rb、Ca-Srの両相関図」『志学台考古』第15号、大阪大谷大学歴史文化学科、1~17頁

三辻利一・犬木努・近藤麻美2015「土器遺物のK-Rb、Ca-Sr両相関図」『志学台考古』第15号、大阪大谷大学歴史文化学科、18~30頁

三辻利一・中村浩・犬木努2016a「陶邑窯跡群出土須恵器の化学特性—各窯および地区毎の分析データから—」『志学台考古』第16号、大阪大谷大学歴史文化学科、1~24頁

三辻利一・中村浩・犬木努2016b「陶邑産須恵器の列島各地への広域供給—素材粘土の化学特性の分析から—」『志学台考古』第16号、大阪大谷大学歴史文化学科、25~46頁

三辻利一・犬木努2017a「土器胎土にみられる地域差—窯跡出土遺物の化学特性および後背地の花崗岩類の化学特性」『志学台考古』第17号、大阪大谷大学歴史文化学科、1~24頁

三辻利一・犬木努2017b「野中古墳出土初期須恵器の蛍光X線分析」『志学台考古』第17号、大阪大谷大学歴史文化学科、25~35頁

三辻利一・犬木努2018「土器の産地問題研究における分析化学—不均質系の分析化学—」『志学台考古』第18号、大阪大谷大学歴史文化学科、13~23頁

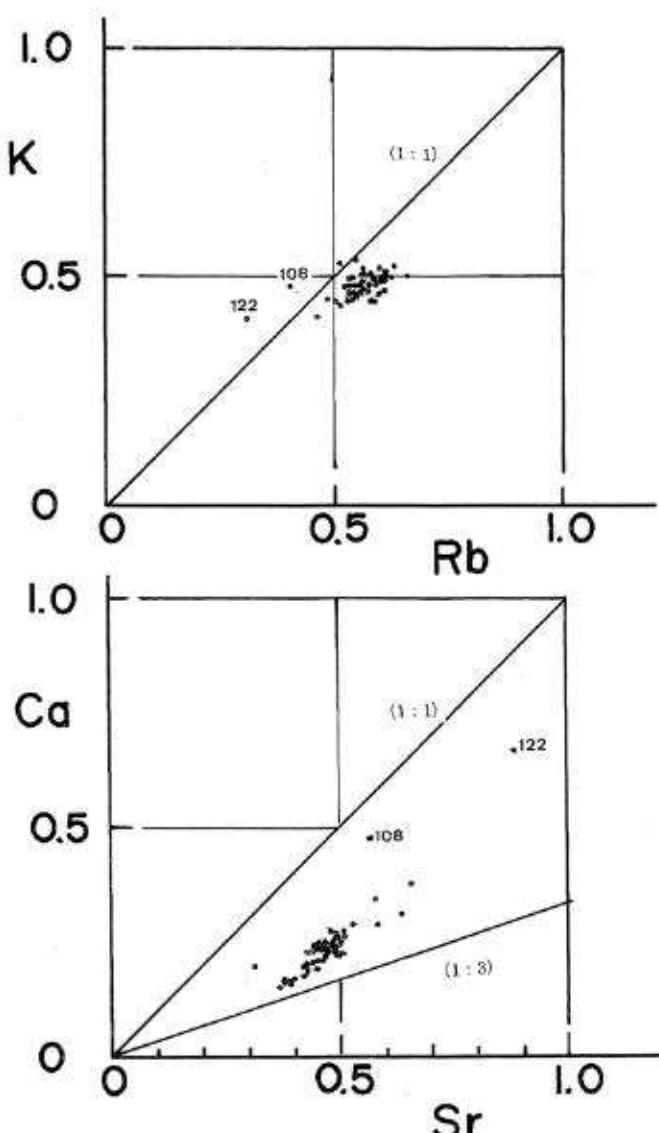


図59 野中古墳出土初期須恵器の両相関図

第4節 自然科学分析

第1項 はじめに

本報告では、遺跡周辺における古植生復元を目的として行った、第1区の庄内並行期の土坑60埋土の花粉分析と、第2区の土壌墓145下層で検出された灰白色をなす動物骨状遺物の同定と放射性炭素年代測定の結果について述べる。動物状遺物が出土した地層については、遺物が出土しておらず、時期不明である。ただし、上位で検出された土壌墓145は、古墳時代中期前半の土器棺の可能性が指摘されている。

また、動物骨状遺物(図60)については、試料の実体顕微鏡観察により、動物骨にみられるような表面テクスチャーが認められなかつたため、試料の一部を水で溶いて顕微鏡観察をしたところ、植物珪酸体が確認された。動物骨状遺物は、動物骨ではなく灰化した植物遺体の可能性が高いことが示唆され、放射性炭素年代測定を行うのは不可能である。

そこで、監督員と協議を行った結果、放射性炭素年代測定については、動物骨状の遺物が検出された地層の表層部堆積物腐植について行うこととした。また、灰化した植物遺体と確認された動物骨状の遺物は、顕微鏡観察と植物珪酸体分析および蛍光X線分析から種類の同定を試みた。



図60 動物骨状遺物サンプル写真

第2項 花粉分析

(1) 試料と方法

分析試料は、第1区で検出された庄内並行期の土坑60から採取された埋土(浅黄色(2.5Y7/3)の塊状無層理の砂礫混じりシルト)である(図61)。この試料について、以下の手順で分析を行った。

試料(湿重量約4g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。

検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。作製したプレパラートは全面を検鏡した。

(2) 結果

検鏡の結果、花粉は検出されなかった。花粉が検出されなかつたため、図表は示していない。なお、プレパラート写真を図62に示す。

(3) 考察

一般的に、花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境下で堆積すると、紫外線や土壤バクテリア



図61 土坑60の埋土の写真

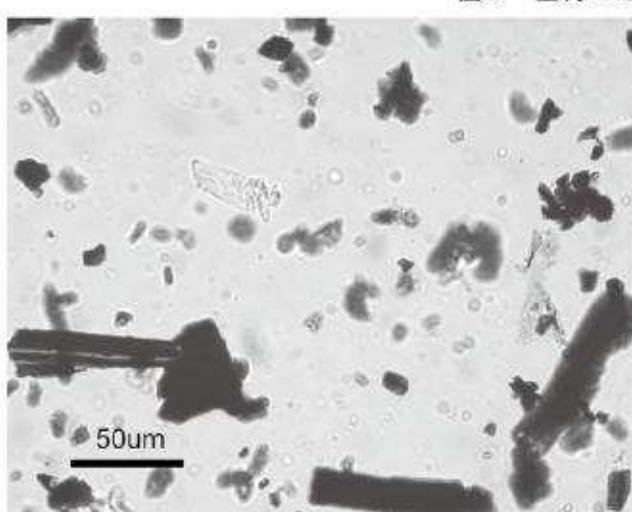


図62 花粉分析のプレパラート写真

などによって分解され、消失してしまう。そのため、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では花粉化石が残りにくい。花粉化石の保存状態をふまえると、土坑60から採取された試料は、堆積過程あるいは埋没後の環境において、酸化的環境が強く維持されていたと推定される。また、土坑の埋没速度が非常に速く、埋土に花粉化石が取り込まれないような堆積環境下であった可能性もある。

第3項 動物骨状遺物の分析

(1) 試料と方法

放射性炭素年代測定 年代測定試料(試料No.②)は、第2区の土壌墓145で動物骨状遺物が検出された地層表層の堆積物の腐植である(図63)。年代測定試料の岩質は、極細粒砂～細粒砂混じりのシルトである。堆積構造は塊状無層理、土壤構造としては壁状を呈する。詳細な観察では、根痕と思われる極く細い管状の構造や、粒團の可能性のある5mm程度の集合体の生成が確認される。試料の破断面では、粒團状の集合体の生成がより明瞭に観察された。上記の特徴から、年代測定試料は、地表近くで土壤生成を受けた堆積物と解釈される。

表3に測定試料の情報、調製データを示す。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表3 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-37059	遺構：土壤墓 145 下層 調査区：第2区 試料 No. ②	種類：土壤（ヒューミン） 状態：dry	湿式篩分：106 μ m 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

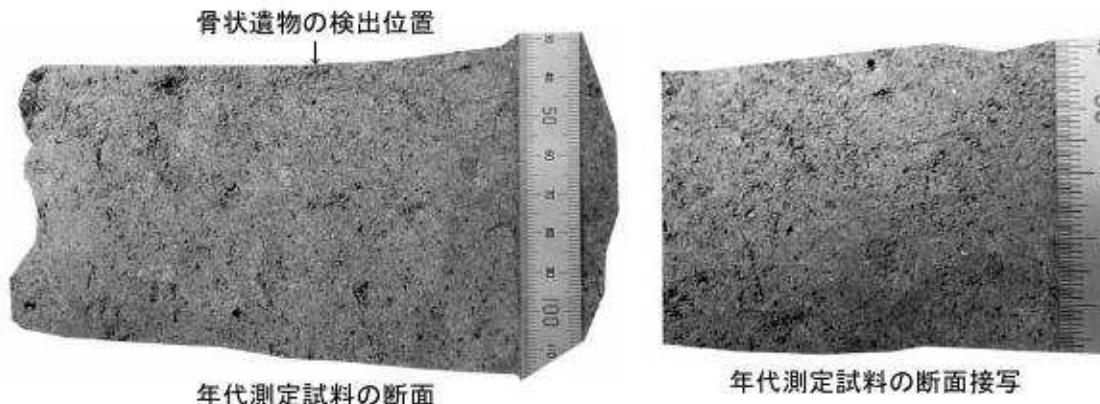


図63 年代測定試料

蛍光X線分析 試料は、顕微鏡観察と植物珪酸体分析を行ったのと同じ動物骨状の灰白色物質である。蛍光X線分析では、マイラーフィルムを張った試料ホルダに乾燥させた灰白色物質を入れて、測定試料とした。分析装置はエスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計 SEA1200VX を使用した。装置は、X線管が最大50kV、1000 μ A のロジウム(Rh)ターゲット、X線照射径が8mmまたは1mm、X線検出器はSDD検出器(Vortex)である。この装置は、複数の一次フィルタが内蔵されており、適宜選択、挿入することでS/N比の改善が図れる。検出可能元素はナトリウム(Na)～ウラン(U)であるが、軽元素の感度は蛍光X線分析装置の性質上若干低く、特に定量分析におけるナトリウムの精度は低い。測定条件は、管電圧・一次フィルタの組み合わせが15kV(一次フィルタ無し・Cl測定用)・50kV(一次フィルタPb測定用・Cd測定用)の4条件で、測定時間は各条件500～1000s、管電流自動設定、照射径8mm、試料室内雰囲気真空に設定した。定量分析は、酸化物の形で算出し、ノンスタンダードFP法による半定量分析を行った。

顕微鏡観察・植物珪酸体分析 試料は、第2区の土壤墓145下層で検出された動物骨状の灰白色物質である。

まず、資料の表面を筆とプロアードクリーニングし、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 VHX-D500/D510)で観察を行った。さらに、灰白色物質をピンセットでひとつまみ採取し、グリセリンで封入したプレパラートを作製した後、生物顕微鏡(300～600倍)でプレパラートの観察を行った。

(2)結果

放射性炭素年代測定 表4に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した14C年代、図64に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

表4 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-37059 試料 No. ②	-22.91 ± 0.14	3065 ± 20	3065 ± 20	1387-1339 cal BC (41.3%) 1319-1287 cal BC (26.9%)	1401-1266 cal BC (95.4%)

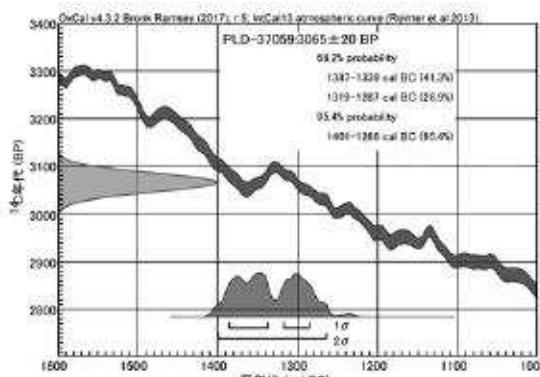


図64 暦年較正結果

年代値と誤差の丸め方は、誤差が $\pm 50\text{yr}$ 以内の場合は、二捨三入(1・2のときは切り捨て、3・4・5・6・7のときは5、8・9のときは10として切り上げ)。結果下1桁は0か5とする。

14C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。14C 年代(yrBP)の算出には、14C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した 14C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の 14C 年代がその 14C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された 14C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、および半減期の違い(14C の半減期 5730 \pm 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C 年代の暦年較正には OxCal4.3(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された 14C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は 14C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

蛍光 X 線分析 表5に蛍光 X 線分析の半定量分析結果を示す。マグネシウム(MgO)、アルミニウム(Al₂O₃)、ケイ素(SiO₂)、リン(P₂O₅)、塩素(Cl)、カリウム(K₂O)、カルシウム(CaO)、チタン(TiO₂)、マンガン(MnO)、鉄(Fe₂O₃)、亜鉛(ZnO)、ルビジウム(Rb₂O)、ストロンチウム(SrO)、イットリウム(Y₂O₃)、ジルコニウム(ZrO₂)、バリウム(BaO)、鉛(PbO)が検出された。

顕微鏡観察・植物珪酸体分析 結果を図65に示す。棒状型の植物珪酸体が観察された。棒状型の植物珪酸体は、すべてのイネ科植物に類似した形態の植物珪酸体が形成されるため(近藤, 2010)、由来した分類群の同定は難しい。

(3) 考察

放射性炭素年代測定 測定の結果、動物骨状遺物が検出された表層の堆積物の腐植は、 3065 ± 20 yrBP である。

表5 半定量分析結果(mass%)

MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	Cl	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	ZnO	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂	BaO	PbO
0.26	6.39	84.70	0.91	0.02	1.13	0.66	0.23	0.10	5.49	0.01	0.02	0.02	0.01	0.03	0.02	0.01

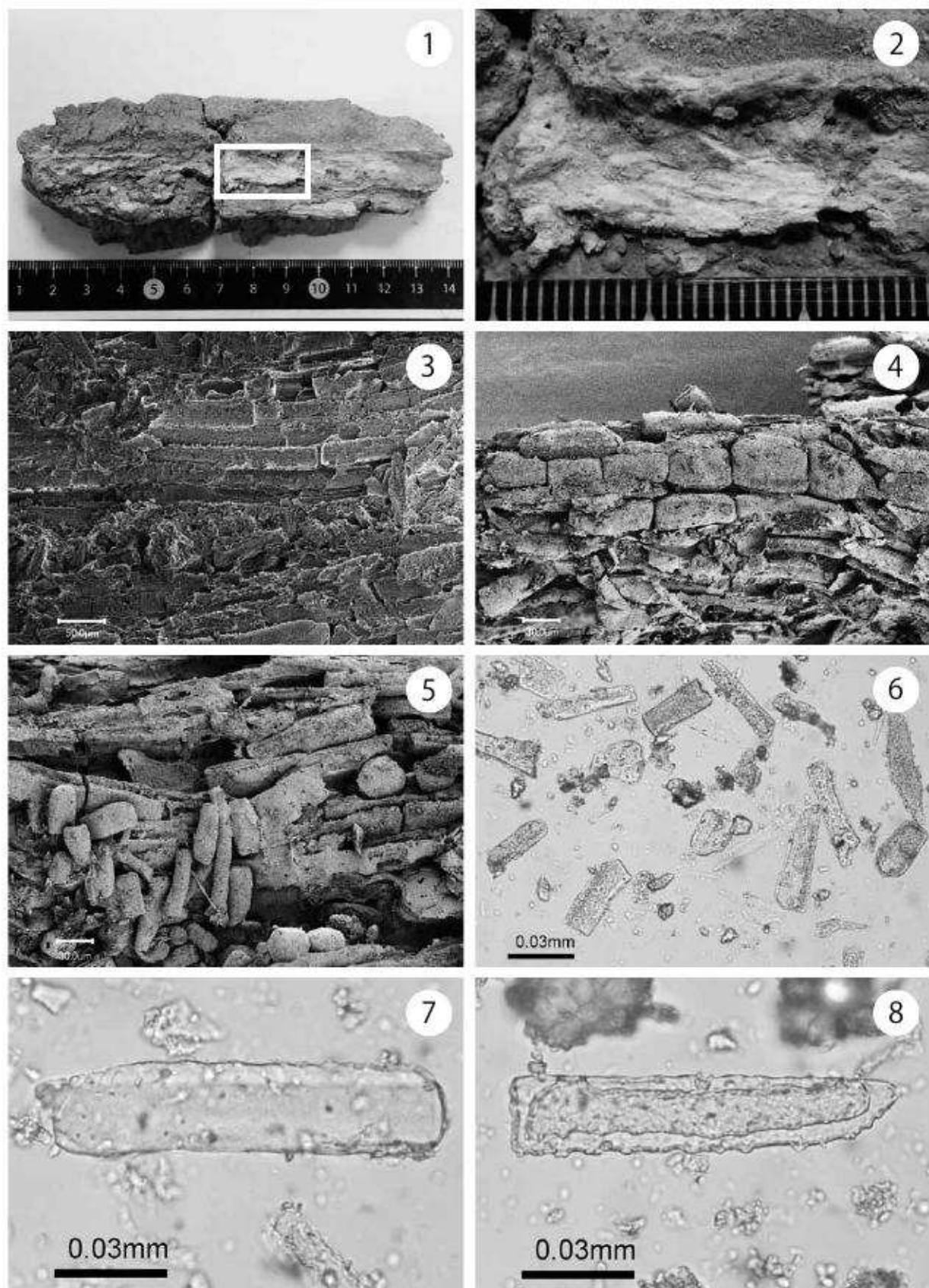


図65 府中遺跡の土壤墓145下層の灰白色物質と顕微鏡写真
1. 試料全体、2. 灰白色物質の拡大、3・4・5. 灰白色物質の走査型電子顕微鏡写真、
6. 灰白色物質のプレバラートの状況、7・8. 棒状型の植物珪酸体

20yrBPの年代値を示し、 2σ の暦年代範囲で1401-1266 cal BC (95.4%)となる。この暦年年代値は、岡田(2012)によると、縄文時代後葉～晩期前葉の時期に対比される。

蛍光X線分析 灰白色物質は、カルシウム(CaO)やリン(P2O5)の含有量が少なく、骨などのカルシウム系の物質ではない。ケイ素(SiO2)が約85%と非常に多く検出された。この結果は、顕微鏡観察および植物珪酸体分析の結果と調和的である。すなわち、分析値は、植物珪酸体を多く含む灰化したイネ科の成分を反映していると推定される。

顕微鏡観察・植物珪酸体分析 顕微鏡観察と植物珪酸体分析から棒状型の植物珪酸体が観察されたため、灰白色物質は動物骨ではなく、植物珪酸体を形成する植物(主にイネ科)の灰と推測される。ただし、今回の試料には、機動細胞珪酸体や短細胞珪酸体が認められなかったため、詳細な分類群の同定は困難である。

以上の分析結果から、灰白色を呈する動物骨状遺物は、主にイネ科の灰である可能性が高いことが示唆された。このような灰と推定される物質が地層中に保存される状況は非常に興味深いものの、今回の分析では、その形成や埋没プロセスに関して検討を行うことが出来なかった。この点は、今後の課題と認識される。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 近藤鍊三(2010)プラント・オパール図譜. 167p, 北海道大学出版会.
- 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」:3-20, 日本第四紀学会.
- 岡田憲一(2012)関西縄文集落の一時的景觀と時間的累積—墓地の分析から矢野健一氏の批判に答える—. 関西縄文文化研究会編「関西縄文時代研究の新展開：松尾洋次郎さん追悼論集」:13-32, 関西縄文文化研究会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

第4章 総括

今回の府中遺跡の発掘調査では、先にも述べたように2ヶ所の調査区が南北に約400mも離れていることから、それぞれの調査区の関連性は薄く、地形的にも遺構の様相もかなり異なっている。既往の調査成果や周辺地域の地理的・歴史的環境も踏まえて、地形の変化、各時代での土地利用のあり方などを少し視野を広げて、時系列に概観することにする。

基本的には、府中遺跡は第1区のトレーナーの断面や第2区の旧河川の状況から判断すれば、楓尾川右岸に形成された沖積段丘上に立地することが明らかになった。国土交通省国土地理院発行の数値地図25000(土地条件)によれば、台地・段丘の更新世段丘(約1万年前より古い時代に形成された台地や段丘)に分類されているが、第1区で検出した竪穴住居跡65が弥生時代中期後半の所産であるから、B.C.1世紀ごろに安定して集落の居住域として土地利用できる状況になったと考えられる。ただし第2区の状況を見ると、この時期の遺構は全く確認できず、付近一帯は、大小の河川が流れる不安定な状況であった。信太山丘陵に近い部分から段丘化が進んだと考えられる。同じような状況は、楓尾川の南を流れる松尾川の右岸に形成された沖積段丘上に立地する寺田遺跡においてもみられる。寺田遺跡では弥生時代中期後半の円形プランを呈する竪穴住居が2棟検出されている。遺跡の北側にのびる和泉中央丘陵に近い所から地形が安定したことを示している。府中遺跡の北側にのびる信太山丘陵の北側を流れる和田川の右岸に立地する西浦橋遺跡では、弥生時代中期後半の時期の大規模な「堰」が検出された。旧河川が「く」の字に蛇行する部分に約25m川幅いっぱいにわたって「堰」を設け、農地に導水している。居住域は未確認であるが、大規模な灌漑施設を備えた水田開発が想定できる。以上のように泉州北部地域における沖積段丘の形成状況をみると、弥生時代中期後半の時期に一部ではあっても、安定した居住域が河岸段丘面上に拡大されたことがわかる。これらの地形の変化と新たな土地利用は、集落域の拡大、増加、生産力の拡大、人口の増加にも繋がったと考えられる。地形の変化を含めたこれらの事象は、弥生時代中期後半の時期に池上曾根遺跡が「環濠集落」としての最盛期をむかえることにも無縁ではないと思われる。

今回の調査では、弥生時代後期前半の時期の遺構は確認できなかった。前代からの集落が廃絶あるいは大きく移動したことを示している。このような状況が、和泉市域やその周辺の遺跡でみられることや池上曾根遺跡の衰退とも合わせて、新たに出現する和泉中央丘陵上の觀音寺山遺跡や信太山丘陵上の惣ヶ池遺跡をはじめとする丘陵上の弥生遺跡群をいわゆる「高地性集落」の成立として解釈し、論じられることが多い。現象的には想定できることであるが、他地域も含めて、さらに類例を増やし、綿密な検討が必要である。

次に、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけては、第1区では竪穴住居4棟、掘立柱建物跡3棟、その他土坑群を検出し、集落の中心部分の様相を示している。かつての大阪岸和田南海線の和泉寺跡・府中遺跡の調査(国道480号の北側)で埋没河川の窪地から大量の土器(土器溜まり)が出土した。出土した土器群の中に淡路型器台が10個体程みられるのが特徴である。時期的には今回の調査で検出した集落と同時期と思われるが、第1区の集落からは600m以上離れているので別の集団と考えられる。ただし、第1区の竪穴住居跡10・85の廃絶後の窪地に堆積した黒灰色土中に大量のこの時期の土器片が

含まれること、第2区の河川跡50の堆積土にこの時期の土器が多く含まれること、和泉寺跡・府中遺跡の調査でも自然河川31の埋没後に人為的な土器だまりが認められることから洪水による集落の廃絶・移動が想定できる。少し南に離れて岸和田市域の北部を流れる牛滝川左岸の西大路遺跡においてもこの時期の埋没河川と竪穴住居を確認している。第1区から西大路遺跡の竪穴住居まで約2.5kmである。もし、横尾川流域と牛滝川流域が同日に生じた河川の氾濫に起因して集落が廃絶・移動に至ったとすれば、第1区の集落、和泉寺跡・府中遺跡の土器だまり、西大路遺跡の集落に同時性を証明することができる。今後の課題である。また、この時期の泉州地域の甕をみると、平底で外面に粗いタタキ目がある。弥生時代後期の甕の特徴を残している。いわゆる生駒西麓産の胎土の庄内甕はほとんど認められない。今回の調査でも、竪穴住居跡93から庄内甕の小片が少量出土した程度である。出土した甕だけを見れば、弥生時代後期後半か、庄内期か、時期を限定し難いために、弥生時代後半から古墳時代初頭と幅をもたせた表現になっている。少量でも庄内甕が出土したこと、高杯の形態、器種構成などから古墳時代初頭に限定した方が良いのかもしれない。

古墳時代前期から後期になると、第2区では河川敷あるいは埋没した河川の上面が墓域となり、土器棺墓、石敷き墓や供獻土器と思われる完形品の土器が点在する。最も古い時期に属する遺構102は、布留式土器の甕と壺の一括資料で墓に副葬されたものである。土壙墓145は扁平な石敷き上に、完形品の陶質土器を割って被せた墓である。遺構102に続くもので、5世紀前半の所産である。次に確認できるのは6世紀中葉を中心とする時期である。須恵器の甕による土器棺墓や石敷き墓がある。形態はさまざまであるが、須恵器の杯や短頸壺が供獻されている。この時期が数量的には最も多い。

次に墓域の様相が確認できるのは、7世紀前半である。この時期の墓自体ははっきりしないが、供獻土器と思われる完形品の須恵器の杯が、比較的多く出土している。また、埋没した河川の堆積土にも、完形品の須恵器の杯を含んでいる。墓域に被るような洪水が想定できる。第1区においても大溝が砂礫層で埋没しているのは、同じ現象が考えられる。

第2区では断続的に墓域となったのか、本来は広範囲に継続して営まれている墓域の一角が、検出されたのかは不明であるが、長期間にわたって墓域として土地利用されたことは確かであるが、この時期を通して時折、洪水の影響を受けるような、まだまだ不安定な低湿地であったと考えられる。

以上、横尾川右岸の沖積段丘面の形成過程と土地利用の変遷について、弥生時代中期後半以降7世紀前半まで述べてきた。基本的には7世紀前半にみられる河川の氾濫を最後にして、段丘化が進み、白鳳寺院である「和泉寺」が建立されるほど安定した地盤が形成されたと考えられる。おそらくこの頃には、横尾川の川筋は現代とさほど変わらない位置に固定されたのであろう。

参考文献

和泉市市史編さん委員会2013『和泉市の考古・古代・中世』和泉市の歴史6

大阪府教育委員会2010『寺田遺跡Ⅱ』大阪府埋蔵文化財調査報告2009-7

大阪府教育委員会2012『和泉寺跡・府中遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2011-3

大阪府教育委員会2015『和泉寺跡・府中遺跡Ⅲ』大阪府埋蔵文化財調査報告2011-5

*土壙墓145出土の陶質土器300は、蛍光X線分析の結果、一須賀窯跡群で作られた可能性があるとされている。(本書第3章第3節第3項を参照)

報告書抄録

大阪府埋蔵文化財調査報告 2018-2

府 中 遺 跡 II

—都市計画道路大阪岸和田南海線街路築造事業に伴う発掘調査—

発 行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前二丁目

TEL 06-6941-0351(代)

発行日 平成31年3月31日

印 刷 株式会社 近畿印刷センター

〒582-0001 柏原市本郷5丁目6番25号